御参詣は前田齊泰

州被蒙御意忝被存候旨御取合被申上、則御戻遊候事。

〔溫敬公記史料〕

十一月十二日赦。

十一月十二日。江戸廣德寺に前田宗辰の百回忌法會を執行す。

〔成瀨正敦日記〕

十一月十二日

一、今日於廣德寺、大應院様百回御忌御茶湯御執行に付、五ッ半時頃施餓鬼初り候旨御案内申上、四ッ時御法事濟寄、御參詣御指支無之旨重而御案内申上候付、四ッ一分御出御燒香等被遊、四ッ八分五厘御歸殿被候事。

十一月十三日。諸士に對する借知の率を減ずべきことを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

十一月十三日

一、今日御借知等之内被返下候趣、左之通被仰渡。

御勝手向連々御難澁至極に付、追々増御借知被仰付、別而天保八年より三箇年半知茂被仰付、其後茂御借知被仰付、何茂可爲難澁儀御心外に付、少に而も御運方御手輕にも相成候はゞ、被返下度思召に候得共、近年稀成不作、或は御上金、其外彼是不時御費用茂打湊、追々御出増に相成、御省略之儀は其廉も不相見得、總様御不足之處は御調達而已を以繰合候事故、御借財者次第に相嵩、當時不容易御勝手振に而、中々御借知等被返下候所に而者無之候得共、御家中茂益難澁之様子被聞召候に付、格別之思召を以、今般御借知幷御役料知等御借上之内、當年一作別紙割合之通被返下候旨被仰出候條、猶更人々手前遂儉約、勝手取續候様心懸可申候。

右之趣被得其意、組・支配不相洩様可被申渡候、以上。

十一月　奥村助右衛門

御借知等一作被下候割合

一、二百石迄　　全

一、二百十石より二百九十石迄　　半高

一、三百石より九百九十九石迄　　三箇一

一、千石より二千九百九十石迄　　四箇一

一、三千石以上　　五箇一

一、御切米等之分も右割合を以被返下

一、御役料知等之分、自分知七百九十九石以下全、八百石已上は是迄之御借上之半高當り被返下。

一、平士以下足輕之分も、一作之儀に付代銀圖りを以被返下。

但、頭分手替足輕等之儀は是迄之通に候事。

十一月廿五日。大雪に付き往來の取除を命ず。

〔雜事日記〕

頃日俄に深雪に至り候處、武士屋敷並町家共往來雪除方等閑之場所茂有之、往來指支候躰に付、早速雪取除、道幅廣いたし、往來不指支樣可相心得候事。

右之趣一統可被申談候、以上。

十一月廿五日　　御横目 ㋑

但十七日・十八日・十九日雪降五尺計積。

〔小木貞正献本〕

深雪之折柄に候條、來年禮二月㋑懸相勤可然候。且又深雪に付、武士屋敷幷町家共、早速往來道幅廣いたし候樣等、先達而申渡置候處、追々雪取除方等出來之躰に候得共、打續積候故に候之哉、中に者今以道狹き場所も有之候之條、尙更近邊申談、無油斷早速致道廣、往來不指支樣可相心得候。

右之趣一統可被申渡候事。

十二月

十二月十四日。白山銅山を廢したるを以て、その主任たりし者に與ふる慰勞金額を議す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月十四日

一、白山銅山今度御指止に付、主付罷在候彌十郎・宗藏へ被下方、辰之助に爲相しらべ候所、似寄之例も申聞候に付、今度は出役もいたし候故、左之通可被下哉与伺候樣、内狀に申來伺遣す。

一金三百疋　　木村彌十郎

　　金岩宗藏

十二月十七日。能登に於ける幕府領を無年限に加賀藩預領とし、從來の

施政と收納方法を改むべきことを告げらる。

〔成瀨正敦日記〕

十二月十七日

一、昨夕阿部伊勢守殿御勝手へ（此時手へ御呼出は少し間違も有之哉。）聞番御呼立に付、定助・井上要人罷出候所、左之通御書付・御書取兩通御渡之事。

卷目之上御名　　御　名

御預所之儀、是迄政事向私領同樣、御取箇永定免皆金納之處、以來外御預所並之通可被心得候。

御別紙に

以來無年限に而御預被成候事。

十二月廿二日

一、昨日荒井殿へ富永御進物之御使相勤候節、御預地之儀猶又御内談におよび候處、御内慮之趣阿部殿へ御内談之儀御支も有まじく旨等被申聞。依而其段申上、今日阿部殿へ脇田御書取致持參候筈之事。

十二月廿八日

今晩阿部殿御勝手へ聞番御呼立に而、御預地之儀無年期御預に被仰付候儀は、早速御國表へ被仰遣可被仰渡。是迄之通り被成置度旨御願立之儀は、春に至り御沙汰も可有之旨、御口達に而被仰聞候旨、聞番罷歸申上候事。

〔諸事要用雜記〕

舊臘廿九日出内狀中要々左之通。

一筆致——

一、御預地之儀に付被仰渡之趣、先便内々早々申上候。無年期与被仰渡候儀は御願通候得共、政治向私領同樣永定免皆金納之儀は、以來外御預ヶ所等並之通御心得被成候樣被仰渡候儀、誠に御存外之儀御當惑に而、御政治向御私領御同樣与申所改り之趣下方へ申渡候儀、誠以不容易儀に付、御僉議之上早速阿部伊勢守殿へ被伺、御内意之趣御書面御差出に而、右御差圖御座候迄は下方へ申渡之儀御見合成候儀は相成間敷哉と被仰達置候處、昨廿八日夕阿部殿へ聞番被召呼出、御勝手不急度御達を以被仰聞は、無年期御預所与申儀は、早速御國許へ可被仰渡、御書面を以被得御内意候趣は、御國許へ被仰渡儀先被控置候樣可仕、春に成何与か御沙汰有之べく旨被仰渡候段聞番申上、先々少し御緩に相成宜段奉存候。先便内々得貴意

候趣、未表發無之事故、爲御心得旁其段乍御用多中鳥渡得貴意候。外は期來陽候、以上。

十二月廿九日　　坂井　成瀨

大野等

十二月十八日。徳川家慶、老中をして前田慶寧の寒中の安を問はしむ。

〔筑前守様御用留寫〕

御奉書寫

一筆令啓達候。公方様・右大將様益御機嫌能被成御座候間、可御心易候。將又寒氣甚付而、無異在之候哉被聞召度思召候。此旨可相達由、依上意如此候、恐々謹言。

十二月十八日　　戸田山城守忠温
青山下野守忠良
牧野備前守忠雅
阿部伊勢守正弘

松平筑前守殿

〔恭敏公記史料〕

本年八月十一日の條參照

將軍使老中奉書訪寒中起居。世子有此事特例也。遣馬回頭謝。

十二月十八日。前田慶寧學校に臨む。

〔前田孝事日記〕

十二月十八日

一、九時御供揃に而武學校江筑前守様御出被遊候に付、主付代美作守・年寄中助右衛門幷大膳、御家老方兵部、御附方庄兵衛、若老式部罷出相詰。七半時過相濟御戻之事。

一、弓術吉田左門、劔術笠間義左衛門、鎗術加藤增之丞。右何も當時入情達者に仕る者御覽之事。

十二月。銀仲預銀手形の引換期限を更に延ぶべきことを告ぐ。

〔雜事日記〕

當時通用銀仲預手形百目小割共古札之分、當十二月中迄納替可申、來午年より通用指留候段先達而相觸候通に候。然處當月中通用之古札無據引替方相後、來正月江相殘候分茂可有之哉に付、右等之分は春に至候而も引替可相渡候條、其段相心得、尤無油斷引替可申事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十二月　　本多播磨守

正月朔日。前田齊泰、江戸城に登り年頭を賀す。

〔成瀨正敦日記〕

正月朔日

一、上々様益御機嫌克御超歳被遊候事。

一、今朝六つ時之御供揃に而、懸流六つ半鎌に而御出御登城、九つ半頃御歸殿表御式臺より御作法書之通被爲入候事。尤西御丸へも御登城被遊候事。

一、今朝御登城に付、御待請四つ時過与被仰出候旨、御近習頭中より廻狀有之候事。

一、今日御禮人頭分以上五つ半時揃之旨、舊臘御横目より廻狀有之。服裝斗目・半に而供廻りいつも之通り、但小將一人は上下着用御庭口より出る。四つ時前より出席いたし候事。

正月三日。前田齊泰、上野の東照宮等に詣づ。

〔成瀨正敦日記〕

正月二日

一、左之通相伺御近習頭ゟ申談、御香一炷相渡す。

明三日五半時不遲之御供揃に而、上野御宮幷惣御靈屋御參詣、御本坊御勤、夫より廣德寺ゟ御參詣可被遊旨被仰出候。

御宮へ御參詣に付服御改に候。常照院御立寄無之、御裝束は於廣德寺可被召替候。

正月三日

一、昨日之御供揃に而、五つ八分過御出、九つ前御歸殿被遊候事。

正月十五日。本郷邸の火見櫓・長屋等類燒す。

〔成瀨正敦日記〕

正月十五日、快晴

一、夕七つ時前白山御殿跡出火之旨板入、無程見直し近板入、御近火に相成、烈風に而火勢強、暫時大火に相成候。夕七つ半頃か御庭へ御出、高山より御覽被遊候。但御供人は御式臺へ相廻り居候。御供人御持柄迄御居間先二枚開へ相廻候付、當席奥取次等御側廻りも刀を帶御居間へ引出橋より相廻る。に付、當席も罷出候樣御意に付御供に出る。暫御覽被遊、御入被遊候所、追々火勢強、本郷通りへ火出、大御門前三度之邊火懸り候付、御屋敷内御巡見可被遊旨被仰出、御供人表御式臺前へ相廻、表御式臺より御出、御門前に暫被爲入、夫より大御門脇二枚開へ御入、中御門前通中之口御門より奥之口御式臺より御入之事。

正月十六日

一、左之通御用番青山殿へ御屆方、將之佐より被相伺、伺之通与被仰出候事。
昨十五日夕本郷丸山邊より之火事に而、御名本郷上屋敷南之方火之見櫓一ヶ所、同所續内長屋一筋、且又南門續外長屋六間計、暨本郷木戸際辻番所一ヶ所類燒仕、人馬怪我無御座候。
此段御屆申上候、以上。

正月十六日　　御名内

〔見聞袋群斗記〕
正月十五日本郷丸山より出火にて御藩邸之南火之見櫓御類燒なり。外御別條なし。大火にて佃嶋迄燒延るなり。

正月廿四日。前田慶寧學校に臨む。

〔官事拙筆〕
正月廿四日
一、今書學校經武館稽古爲御覽筑前守樣御出に付、九時過爲伺公罷出候。奉行助は播磨守被相勤。其外伺公大膳・内記、御附方に而圖書、若年寄式部も被出候事。
一、不指支段毎之通御案内申上り、返書も御附頭より到來之上、晝八時頃御馬上に而筑前守樣御出、御白洲に而御下乘、夫々例之通伺公、委曲は略之。直に經武館ゟ被爲入候に付、御跡より罷出、如例御上段横列座伺公之事。
一、夫より萩原勘太夫方組打稽古相始、畢而敷物等取拂、不指支上山崎六左衛門・山崎岩之丞方劔術稽古相始、畢而左右御障子取拂候上、水越五郎左衛門方鎗術稽古も有之候。且右者何れも入情達者之人々に而、則彼是夕七半時過相濟候事。

嘉永四年十一月廿七日参照

二月八日。金城靈澤の碑石を江戸邸より發送す。

〔成瀨正敦日記〕
二月八日
一、金城靈澤之御碑石、金澤表へ船積に而被遣候付、舊臘會所奉行へ遂僉議置、幸伊豆船之内八百石積、金澤より大坂へ爲御登米積受に向候船有之に付、右船頭へ相渡積越候筈之所、此頃出帆爲致候旨に付、今日右碑石御庭口より車積に而引參り候事。
惣運賃三十七兩相渡候事。

二月八日。德川家慶、前田齊泰に放鷹に依りて獲たる鶴を贈る。

〔成瀨正敦日記〕
二月八日
一、九つ時前か、御城當番坊主より上使彌之御沙汰之旨申越候旨、聞番より申上。

一、九つ時過上使伊奈熊藏之旨、御城へ附置候者罷歸申聞候旨、聞番より申上る。且又御城坊主連名之紙面も從跡入御覽。

一、夫より暫有之、御横目所より申談有之、何れも上下着用いたし候事。尤服紗也。

一、九つ半頃歟、御小人目付より御案内申來、申上り候由。

一、八つ時前御城下り之御附人御案内申上り、追付御表御出、水戸橋通候付水戸橋之御案内も申上、本郷三丁目之御案内に而御式臺へ御出、上使御見懸に而御式臺階下、御式臺より御右之方江御出迎、御誘引被遊、大書院江御通、上意御拜聽、御鷹之鶴之所江御進御頂戴。但右鶴は上使より少し前に御到來、御玄關に御使番兩人出迎受取、聞番先達に而大書院へ持出懸在、御頂戴被遊、上使御着座被改候間引入。御自分御挨拶相濟、被爲入、大書院溜に扣被遊候。御熨斗・御火鉢・御多葉粉盆出候上、重而御出、御菓子、御挨拶被遊御入。御取持衆御相伴に而御菓子出、御吸物・御盃出一通、御銚子引候上に而御引菜御持參、被爲入。御相伴へは御給事人濃茶・薄茶迄。不殘相濟候上、御取持衆より御請被仰上候樣御挨拶に而御出、御請被遊、直に御誘引に而上使御退出、最初御出迎之所迄御送、上使乘馬之上御引被遊、御勝手座敷御取持衆坊主・備後守樣御小書院溜与御逢、相濟被爲入候事。

一、上使衆御盃事は御斷之旨聞番より申聞、申上置候事。

〔續德川實紀〕

崩御は正月廿六日にあり二月六日御發喪

二月九日、松平加賀守のもとに使して、御鷹の鶴を贈らせらる。

二月十日。幕府、仁孝天皇の崩御を告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕

二月十日

一、主上御不豫之所、御養生不被爲叶、去六日被遊崩御候旨京都より申來、今日御書付出候。御樣子之旨、戸倉善佐より内々申越候旨、聞番より申上る。御書寫も指越候旨に而上る。伊勢守殿御渡、大目付江

主上御不豫之處、御養生不被爲叶、去六日被遊崩御候に付、爲伺御機嫌、明十一日惣出仕之事。

但、西丸江も惣出仕之事。

二月十一日

一、前段之御供揃に而今朝五つ半時過御出、兩御丸御登城被遊、九つ八分御歸殿之事。御服御服紗・麻之御樣子也。

一、主上崩御に付、昨十日より十四日迄五日、普請・鳴物遠慮之旨、今曉小屋觸あり。

二月二十日。仁孝天皇崩御せしを以て金澤に於いて本日より五日間普請。

同役は家老

鳴物の停止を命ず。

〔御家老方等諸事留帳〕

二月廿日

一、左之廻文同役一統ゟ月番より來。

今月六日主上崩御に付、普請・鳴物御停止之旨等、大御目付衆より御書付到來之由に而、同十二日不時立町飛脚歩を以、將之佐等より別紙寫之通只今申來候に付、普請・鳴物等今廿日より廿四日まで日數五日遠慮候樣、一統相觸申候。此段爲御承知申進候。則別紙寫壹緘相廻可被申候、以上。

二月廿日　　奥村助右衞門

今月六日主上崩御に付而、普請・鳴物一昨十日より十四日迄五日御停止之旨、大御横目衆より御書付を以申來候に付、寶暦十二年七月之振を以、御屋敷中夫々申觸候。其表之儀者前々之振を以可有御申觸候。右御書付寫進之候條、右之趣眞龍院樣初御申上可被成候。右に付不時立町飛脚歩を以申進候、以上。

二月十二日　　將之佐等兩人

美作守樣

追而於其表も、寶暦之節諸殺生・普請・鳴物等五日遠慮之儀に申渡候旨返書に申來居候。此段爲御承知申進候、以上。

〔若年寄方御用留〕

二月廿日

一、去る六日主上崩御に付、於江戸左之通伺濟に而今日飛脚到來、三十人頭・御横目・御鷹匠小頭へ申渡、今廿日より廿四日迄五日之間鳴物遠慮、御鷹御殺生控申渡候事。

主上去六日被遊崩御候に付、普請・鳴物昨十日より當十四日迄五日御停止之旨御書附相渡候に付、御屋敷中鳴物等五日遠慮之儀申渡候旨昨日將之佐より演述仕候に付、御殺生方等相控候樣申渡候。依之相しらべ申候處、寶暦十二年七月、安永八年十一月主上崩御之節、鳴物遠慮日數之通此表・金澤共五日宛御相控申候間、今般茂昨十日より當十四日迄日數五日御殺生方相控候樣可申渡旨奉存候。於金澤も鳴物遠慮日數之通御鷹等相控候樣可申遣哉と奉存候。

猶更奉伺候事。

二月十一日　　本多大學

二月二十日。幕府、仁孝天皇の崩御を弔し奉る爲香奠を献すべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

二月廿一日

一、先帝（御諡號被上候迄は、於京都は先帝与可奉稱旨、京都御沙汰書に相見え、此表御作法書に而は、大行天皇与可奉稱由之事。）崩御に付、御香奠白銀二十枚於京都可被指上旨等、昨日御書附相渡候。右に付禁裏（御踐祚有之候故、東宮樣を禁裏与奉稱に而、御書中にも其通也。）御機嫌御伺、且御香奠御備之御使者物頭も京都江被指出候付、御所司代酒井若狹守殿江之御書、并禁裏附明樂大隅守殿・渡邊筑後守殿江御連名之御書、都合御書兩通、當廿三日之御日附に而出來、御用人立會校合、入御覽、今日將之佐江御渡。右は於金澤御使人江御渡之御口上書は、御用所に而出來上候付、入御五日・六日頃發足之筈之上、且右御使人へ御渡之御口上書は、御用所に而出來上候付、入御覽、是亦今日將之佐へ御渡に相成候。右之趣今便申遣候付、御席に而今日へ相延有之候由也。

一、筑前守樣より御香奠被献候儀、御家に御先例無之に付、昨日御用番阿部殿へ、聞番を以御伺書御指出置之事。

二月廿二日

一、先帝崩御に付、四品十萬石以上より御香奠、并禁裏爲伺御機嫌京都江使者被指出候樣、當廿日御書附相渡候所、筑前守樣より御献上等之御先例無御座に付、相公樣より御用番阿部殿江昨朝御聞番御伺書御指出置之所、昨夕阿部殿江聞番御呼立に而、御香奠并御機嫌伺之儀、

於京都被成御伺候樣、御伺書に御付札に而御渡に付、右御伺書等御覽濟、御用人江相渡す。

二月二十日。金城靈澤の碑を石川郡大野浦に回漕することを江戸會所に上申す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿日

以書付御願上候

一、御碑石一本（長五尺六寸 幅四尺六寸 厚一尺五寸 同形此目方凡四百貫目程。）

右御碑石、今般此表より御國許大野浦迄御積廻し御座候付、右廻船大野着船仕、同所御役所江御屆奉申上候はゞ、同御役所より村役人被仰付被成下置、元船より陸揚迄之艀下船、并事馴候人足三十人程御差出し、無遲滯水揚相成候樣奉願上候。且右艀下舟賃并人足賃等、多分之儀不申樣被仰渡有之樣被成下置度奉存候。尤御大切之御品に御座候得者、大野着岸次第急速水揚被仰付、水揚相濟出帆被仰渡候得者、江戸御廻米御積所江差向候付、大野に而滯船無御座候樣奉願上候。依之此段以書付奉願上候、以上。

弘化三年二月　　御會所　　佃屋文治

二月廿五日。仁孝天皇崩御せしを以て、前田慶寧奉悼の使者を幕府に派遣す。

〔官事拙筆〕

二月廿四日

一、筑前守様より御機嫌伺之御使者有之に付、御渡之御書五通、竹田市三郎席ゟ指出候に付、受取、御用人大屋武右衛門相招渡之候事。

一、右御使者澤田秀之助明日發足之様、此間御用人より申聞、則相伺、寛之通被仰出候に付、夫々御使書等も出來之上、頭弓岡亮左衛門 澤田秀之助誘引、交名相唱候に付、相招、盆に載候儘御使書等渡之、彌明日可致發足候。御書者御用人より直に受取候様申渡候事。

〔加藤三郎左衛門御用部屋日記〕

二月廿四日

一、主上崩御に付、公儀ゟ御伺御機嫌之御使、御大小將澤田秀之助明日發足に付、罷出御用相伺候付、御用無之段申遣候。且御渡之御書、竹田氏越後屋敷へ持參、御用番へ被相達候。

御本丸　西丸　若御年寄　大奥

右一通宛。

二月廿六日。前田慶寧、金澤城二ノ丸を巡視す。

〔諸事要用雜記〕

二月廿六日

一、先達而被仰出候通り、筑前守様今日御居間廻り等御覽に付、九時前より大村氏被罷出、拙者儀は風邪に付不參。九半時之御供揃に而同刻過御出、奥之口より御上り、御居間書院に暫御待合、肴次郎御先立に向候而御出被遊、御近習頭詰所前より御居間廻り夫々御覽、御膳所も御覽、夫より蔦之間御廊下通御表へ御出被遊候。蔦之御間御廊下仙人之御杉戸外より、御城代播磨守殿御先立之事。

一、重而蔦之御間御廊下通り御入、御居間書院へ御溜、御供廻り被仰出、此時仙人之御杉戸之内御附方に而御先立、夫より追付奥之口より御戻り。

但、御出入共御近習頭始御式臺階上へ罷出候事。

御居間御覽之節、播磨守殿・美作守殿・圖書殿御供被致候事。

〔恭敏公記史料〕

二月廿六日巡二丸城。

二月。懸作高を本村に取返す場合に故障なからしむべきことを告ぐ。

〔郡方御觸〕

天保八年高方御仕法之刻、懸作高取返方之儀被仰渡、追々本村ゟ可取返旨等委曲申渡置候通に付、寄々取返候向茂有之候。然處元直段不相知分者、當時之直段に可取返儀に付、懸作人に而者過分之代銀申張、取人者又格別直安く買返可申与申張、彼是遲滯に相成、或者取返之村方に而、取人共せり合申分いたし、又者懸作人賣をしみ候。彼に寄せ是に託し申延などいたし、煩敷及申分候族茂有之、懸作高買返之儀申出候とも、兎角不果敢相聞、甚以不相當沙汰之限に候。高代銀之儀抔者、大体並合茂有之儀、双方實意を以示各、五ヶ村役人加詮議候へ者、速に相辨筈に候條、已來取返方申出候はゞ、彼是遲滯無之樣急度可申渡候。將又組裁許においても、無謂詮議延々に相成候向も有之哉に相聞、難心得儀に候。取人共せり合候儀抔者、豫而申渡置候趣も有之儀、遲滯に相成儀先は無之筈に候。尤入組難相辨分者、早々申聞可請指圖候。乍然取返度趣申出、無謂遲々におよび候族も有之候はゞ、詮議之上品に寄急度曲事に可申付候。

右之趣得其意、一統不相洩樣早速可申渡候、已上。

午　二　月

諸郡御扶持人・十村中等

改作奉行

二月。御郡奉行、海邊手當の爲輪島出張所及び遠見番所の位置を定む。

〔郡方御觸〕

御算用場奉行ゟ

異國船渡來之節海邊御手當方御用に付、御郡奉行輪島出張所并遠見番所等出來方之儀に付、御郡奉行紙面等取立追々被指出、詮議之趣被申聞候。依之右出張所、別紙繪圖之通輪島に被仰付候。

一、遠見番所之儀、福浦者別冊圖書之通出來、輪島崎は是迄之燈明堂に建添、是亦別冊圖書之通出來、金剛崎は山伏山に在之燈明堂に而相辨候儀に被仰付、敷物代等御渡可在之候。

一、宇出津鐵炮稽古場等、幷同所に役所形相建候儀、別紙繪圖之通出來被仰付候。

一、留書足輕之儀、出張中二人宛爲相詰、且引拂後小遣迄に而者縮方茂不行屆に付、留書一人宛爲相詰、小遣之儀も兩人召仕度旨、御郡奉行申聞候通承屆候。右小遣百姓等之内召仕、一人三百目宛被下候儀、是亦承屆候。右出張所等、宇出津役所取毀候古木相用、別紙外作事方圖書之内、雜用引去所方引請出來に被仰付候。出張所式臺与申茂、指出迄に而相辨候得者、尚又御入用可相減旨御郡奉行申聞候由に候間、其通相心得、惣体御入用減方尚更精誠遂詮議、出來之儀可被申渡候。則別紙繪圖等六品相渡候。出張所等引高之儀者、最初被申聞候与者地

元相減候間、改而被書出可被申聞候事。

午　二　月

三月三日。前田齊泰の行列、江戸城和田倉門附近にて阿部伊勢守の先驅と衝突す。

〔成瀨正敦日記〕

三月八日

一、昨夕阿部伊勢守殿御勝手へ聞番御呼立に付、脇田平之丞罷出候所、當三日御下城之節、和田倉御門邊に而混雜之儀は御承知可有之、右は思召も有之儀に候哉、御尋申候樣伊勢守殿申候旨、公用人を以被申聞候付、平之丞何等承知不仕事故、如何之時宜に候哉与内々公用人へ承り見候へ共、品は不申聞、同所に而阿部殿御行逢之節混雜いたし候儀之旨に付、猶更供方之者致僉議候上及御答可申上旨申述罷歸、其段以奥取次申上、いづれ御尋も有之事に候得ば、不取敢明朝御挨拶之御使相勤可申哉之旨相伺、今朝相勤候筈之旨等古屋申聞に付、其時宜相尋候所、今朝よりも其節御供之表小將へ承り見候所、御下城之節水戸樣之跡へ越前守樣、其跡へ御引續に而桔梗之方御出之所、阿部殿大手之方御越御進みに而、越前守樣之横へ御並被成、和田倉御門御通り、夫より横に御通可被成所、越前守樣御人數之内切れ、不申故御見合

に而、此方樣御箱之先へ御通り懸り之所、御箱持見合不申故、阿部殿御家來御箱持之棒端押へ候故、三十人小頭罷出、道具に手を御懸被成なと申て、少し押返し候樣にも相聞得候へ共、御駕籠脇よりは得与見得兼候。右に付混雜はいたし候へ共、毎もか樣なる事は折々有之、格別目に懸り候程之事は見受不申旨。猶又御供頭等聞糺有之候はゞ可相分哉之旨に付、御供頭人見也記僉議之儀申談置候所、人見・九里相同じ申聞有之候は、段々新番・御歩・三十人頭等得与承糺候得共、前條之時宜に而指て御無禮成程之儀は無御座。併阿部殿与申儀は其節何れも心付不申故、其節御歸之上何等も不申上。且是程之混雜は毎も有之事故、其節譯而申上候程之儀とも不存、御横目よりも一と通り混雜いたし候旨及言上置候族に而、御供方僉議いたし候得共、何等替り之事も無御座旨等申上り候付、其段申上置。

三月六日。前田齊泰、仁孝天皇の崩御を弔し奉る爲使者を金澤より發す。

〔近敦日記〕

三月廿八日

一、仁孝天皇へ御香奠白銀二十枚御進獻之御使者、大組頭田邊左兵衛儀、當月六日金澤發足、同十五日京着、翌十六日於泉涌寺御進獻相濟、同十八日德大寺殿邸に而、禁裏・女院・准后樣御機嫌御伺之御使者相勤候旨等、詰人より當十九日立正六日便に而申越候紙面等、入御覽候

事。

一、右同様に付、筑前守様より御香奠御進獻等之儀、詰人を以御所司代被御伺之候所、御香奠白銀三枚以御使者御進獻被成、禁裏初御機嫌も御伺被成候様御指圖に付、國元より使者指立候而は日延に相成候得共可申遣哉、此表詰合之者を以可被指出哉之旨も相伺候所、御勝手次第と御指圖に付、同十八日德大寺殿亭へ、禁裏御初御機嫌御伺之御使者奥村典膳相勤、同十九日泉涌寺御香奠御進獻之御使者も典膳相詰候旨、是亦夫々言上、御用人より入御覽候事。

三月七日。前田齊泰、增上寺參詣の際の宿坊を清光寺に定む。

〔成瀨正敦日記〕

三月七日

一、增上寺御參詣之節、御宿坊以前より通元院之所、先住代文政十二年正月か不埒之申上方有之に付、當分清光寺へ御宿坊御賴置に而相濟來候所、先達而より通元院へ如元被仰付候樣仕度旨、同院幷外坊中よりも每度願之趣有之候得共、先其儘に相成居候所、當四日增上寺方丈より御使僧を以、如以前通元院へ御宿坊之儀、同院幷坊中願之通被仰付候樣。清光寺儀は申談方も可有之旨に而、御賴之趣申來居候。依而何とか御答御使を以可被仰遣儀に付、御用人・聞番へも遂僉議候所、通元院に相成候時は、當時院中大破にも相成居候事、指當御手當過分に可相成、只今清光寺何等御指支も無之事に候間、先此儘相成居候而可宜与示談治定に付、其段申上相伺候所、先清光寺に是迄之通り可被成置旨に付、右之趣增上寺之御口上御用人より相伺、大小將御使に而今日被仰遣候。

三月十二日。前田慶寧、學校に臨む。

〔官事抽筆〕

三月十二日

一、今日經武館稽古御覽之內、吉田三家的も初而御覽に付、射場伺公處等繪圖も有之候へ共、猶更罷越何れも見置、左之通着座處等及示談治定。九半時前不差支旨督學より申聞に付、如例以紙面申上置、追付返書も到來、御出案內有之上、夫々每々之出處ゟ罷出居候事。

一、追付晝八時前、御馬上に而筑前守樣學校ゟ御出、御白洲に而御下乘、奉行助前に而御中座、御意有之。益御機嫌克恐悅奉存候旨申上候。夫より直經武館ゟ被爲入、御跡より罷出、夫々如例御上段横着座、稽古不差支旨御横目申聞、加藤三郎左衞門ゟ申述、申上り、追付御襖明、石丸彌太郎・越山一丞方稽古御覽。中程に而明倫堂講書不差支趣右同斷に付申上置、前段稽古濟寄に而御襖建則稽古爲止、各御先ゟ參り、明倫堂續御廊下際伺公、御通之上御上段

際ゟ各着座、講書相始候旨申上、御襖明、則經書講之、助教加人西坂常人也。濟寄、經武館不差支旨又々申上置、無程相濟御襖建、前段之處ゟ伺公罷在候事。

一、夫より重而經武館ゟ被爲入、都而右同斷。則木村喜右衞門方劔術相始、濟寄射場不指支之旨申上置、無程相濟御襖建候に付、着座處改め、障子を向ふにし、同處御上段際に振替り其儘に而着座、御通之上御跡より罷出、射場御上段御障子際に奉行助御柱角邊に少しひずみ着座、作州等は少し下り眞直に着座伺公、其外夫々出所等略之。竹田等之内は奉行後。方に着座也。則吉田左門・吉田左近右衞門・吉田平助方弟子的御覽、二手充也。三家三切に而、入情達者等之分相濟候處、重而御好之御樣子に而、御射手等其外出座之人々的御覽。右は御横目ゟ直に竹田等内より談有之躰。夫々相濟、御横目より相濟候旨申聞候故、其段は竹田等内ゟ申述、申上候。畢而階上等ゟ如例何れも罷越居候。無程直に御戻被遊候事。

三月十四日。前田慶寧、江戸に向かひて金澤を發す。

〔公私日錄〕

三月十四日

一、六半時過出席、服紗小袖・上下。

一、御供之竹田氏等五時出宅被相揃候。

松之御殿は眞龍院の所居

本文は江戸に於いてなり

一、御膳被爲濟、御上下に而五つ時過松之御殿へ被爲入、御伺御機嫌被仰上、御盃事被遊候御樣子に候。暫有て御戻り、於御用之間拙者共被爲召、畢而於御居間相公樣御附使者之御近習頭被爲召、御直答、御附頭誘引相濟、遠江守・庄兵衞被爲召御意有之。夫より御留守に相殘候主膳・三郎左衞門被爲召、御緣頰ゟ罷出、益御機嫌能被遊御發駕恐悦奉存候段申上る。無事にと御意有之。御請申上退去。指續松田平之助等御留守に相殘り候御附頭何茂一同被爲召、御意等同前。右以前基五郎殿・豐之丞殿爲御見立御出に付、御通之儀被仰進、御附頭御先立、於御居間御對顏、御熨斗御側小將差上之。姫君樣御附使者河野四郎右衞門呼置、御出御直答、御先立自分、御使者誘引、御附頭相濟御入、基五郎殿等無程御退被成候。

一、五半時過御旅裝束に御改、松之御殿へ爲御暇乞御出。御供數御平生御城内之御供數に而、何茂旅裝束也。御出之節御發駕御供廻被仰出候。松之御殿に而は御對顏、御熨斗被進、無御手間取追付御戻り被遊候。右御出御戻りの節、基五郎殿等階上内より左之方へ御出被成候。

一、御供相廻り、年寄中等御玄關前ゟ被罷出、夫々宜所に而申上り、四つ二歩益御機嫌能被遊御發駕候。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿一日

一、筑前守様當十四日御發駕に付、同日不時立足輕早飛脚今日到來、右之傳封之旨に而小幡・松之御殿御附頭・二御丸御廣式頭より之紙面三封、幷今石動驛より高田より之傳附、割場奉行より夜五つ半時頃送越、受取遣す。小幡よりは、筑前守様十四日四つ時之御供揃に而、四つ二分益御機嫌克御發駕被遊候旨等申上り、高田よりは暮頃今石動御着被遊候旨申上等也。依而御近習頭中迄御紙面爲持遣、入御覽、坂井氏へも承知に申遣す。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿七日

一、筑前守様御儀、當十八日より泊驛御逗留、十九日・廿日も姫川等御指支、廿一日御指支無之旨申上、同日曉天七つ半時泊驛御發駕、山下難所々々御越被遊、姫川御越被遊候處、追々增水いたし候に付、御人數全越不申内（御使馬迄は越候由）指支、市三郎等・圖書殿も持鑓等從者少々迄越渡り、御道中奉行は兩人共相殘、御人數三分二計は相殘候由。同日糸魚川御泊、翌日殘御人數御待合に而、同驛に御見合被遊候内、晝後迄に追々不殘姫川越來候へ共、御發駕御指支、同驛に御逗留被仰出候旨。依而宿觸飛脚指立候付右に傳附、右之趣共竹田等より言上、御道中奉行よりも言上、尤圖書よりも被申上、將之佐より入御覽候事。

〔成瀨正敦日記〕

三月晦日

一、筑前守様當廿五日善光寺驛迄御着被遊候所、犀川・筑摩川出水、御渡船御指支に付、俄善光寺驛不時御泊被仰出、翌廿六日・廿七日も減水いたし不申に付、善光寺御滯留被遊、明日川明之様子も未相知れ不申旨等、廿七日同所より町飛脚・早飛脚步に而今朝到來。右委曲竹田等より申上。右に付朔日御着之儀は相成不申故及言上候旨、且御道中奉行よりも申上候。且筑前守様より御書も被上候事。

〔成瀨正敦日記〕

四月二日

一、筑前守様前月廿五日俄に善光寺様御止宿被遊候所、同廿八日迄御逗留、廿九日犀川・筑摩川共追々減水いたし、御渡船御指支無御座に付、同廿九日九時之御供揃に而同驛御發駕、兩川無御滯御通行、八半時矢代驛江御止宿被爲遊。右に付御泊附先達而之通御繰延、來月五日夕御着可被遊旨被仰出之旨等、竹田等より言上、御道中奉行よりも同樣言上。其外奉札御容躰申上り等も到來、夫々御近習頭中迄爲持遣、入御覽。

三月廿二日。富山侯前田利保の江戸上屋敷災に罹る。

〔御家老方等諸事留帳〕

三月廿九日

一、當廿二日曉、出雲守様江戸表御屋敷御廣式長局より出火、御住居向不殘御燒失之由富山より申來る。

〔諸事要用雜記〕

三月晦日

一、當月廿二日不時立早飛脚、廿七日より廿八日迄糸魚川に逗留、今日到來左之通申來。

今晩八時過、下谷茅町稻荷邊出火与近板打候處、無程出雲守様御屋敷内より出火之旨及屆、御同所様、御廣式下部屋より出火、御住所向不殘御燒失、御屋敷内御鎮守等者此方様御人數を以消留、御長屋等者相殘候由。備後守様に者風筋不宜候得共、格別風も無御座ゆゑ御屋敷中御別條無御座旨。壽正院様早速御立退、御本宅御廣式ゟ被爲入候所、六時過及鎮火候に付無程御戻り被遊候。右に付御前御差扣之儀、今朝御用番戸田山城守殿へ御伺被成候處、卽刻不及其儀旨被仰渡候。尤當御屋敷中聊御別條無御座候。相公様御初方々様、御機嫌御指障も不被爲在、恐悦御同然奉存候。右に付今日□時前一□不時立町飛脚早飛脚步被差立、前段之趣其表方々様へ年寄中より被申上候筈に付、譯而御次より不被仰進候間、是等之趣爲御承知申進候、以上。

是月は大盡なり

備後守は大聖寺侯前田利平

三月廿二日　　坂井

大野等

〔見聞袋群斗記〕

三月廿二日。富山藩邸御燒失、金二千兩御使にて被遣。

三月廿七日。加賀藩所藏の和蘭字書を藤井方亭の遺子方朔に貸與す。

〔成瀨正敦日記〕

三月廿七日

一、御藏本蘭書之左之二部、藤井故方亭借用罷在候所、せがれ方朔儀も同様借用仕置度旨相願候付、一ト先返上爲致、其段申上借用被仰付候付、方朔へ相渡す。

はるま　全二冊

ひゅぶねる　全二冊

右二部共字書之由。

四月五日。前田慶寧江戸に着す。

〔成瀨正敦日記〕

四月五日

一、筑前守様益御機嫌克八つ鎌下御着被遊、中之口御式臺より御上り、御溜へ被爲入候上、當席被爲召候付、小左衞門罷出候所、御着御案内、御機嫌御伺之御口上被仰上候付、小左衞門申上、追付御前御居間書院へ御出、上之口より御出、御先立主税。御着座御刀持、御先立共御入口に扣罷在る。之上、小左衞門四之間左へ相廻り居。小左衞門を以御對顔可被遊旨被仰進、御居間書院御敷居之外より二疊目位御出、御禮被遊、内へと御挨拶之上、御敷居之内へ御着座、此節御敷居外に而御佩刀御取被遊候。御挨拶、御のし上之、御禮被仰上、御のし引候上、御同道之儀被仰進、上之口より御見物所通り御同道、御住居ゟ御入被遊。

四月六日。御郡奉行、金城靈澤の碑の石川郡大野湊に到着したることを報ず。

〔諸事要用雜記〕

四月六日

一、先達而舟積を以被遣候御碑石并御手水鉢等、夫々到來之旨御郡奉行より屆有之。

但、御碑石者兼而申談候通、明日竹澤へ持屆候筈に申來、且御手水鉢者九日に指出候儀申談候事。

同七日

一、御碑石重目に而今日は御庭へ持屆兼候段申來、昨日小笠原へ申談置候に付重而右之趣申談る。

同九日

一、御碑石到來之儀、今便申上候筈に候得共、未見分も不致に付、當十一日天氣次第見分之儀小笠原へ申談置、本便及言上候筈也。

但、到來之趣執筆迄爲申遣置候事。

四月八日。銀仲預銀手形の引換期限を延ぶ。

〔雜事日記〕

當時通用之銀仲預手形百目札并小割札共、古札之分引替方當正月ゟ殘候分茂可有之に付、其分者春に至候而も引替可相渡旨、去る十二月申渡置候所、今以引替殘茂有之躰に付、當五月中限古札不殘引替可申候。最前より數度月延茂申渡候上之儀に候間、右限月過候而引替指出候共不承屆候條、其段相心得無油斷引替可申候、以上。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

四月八日　　前田近江守

四月十三日。德川家慶、前田齊泰に就封の暇を賜ひ且慶寧の出府せしを勞す。

弘化二年十二月條の參照

〔溫敬公記史料〕
四月十三日。將軍遣戸田山城守來賜休暇。右大將亦遣山城守。
〔恭敏公記史料〕
四月十三日。將軍遣老中戸田山城守來勞。兼許溫敬公之就國。招請溫敬公景德夫人喬松君命嚮子。

四月十五日。前田齊泰登營して就封の辭見し、慶寧は參府の禮を行ふ。

〔續德川實紀〕
四月十五日、月次の賀例のごとし。尾張中將宰相に轉ぜらる。松平加賀守就封のいとま賜ひ、御鷹・馬を下さる。加賀守家人長將之助・前田圖書拜謁す。
〔溫敬公記史料〕
四月十五日。登城謝之。長將之佐・前田圖書謁將軍。
〔恭敏公記史料〕
四月十五日。同溫敬公登城謁將軍。爲參府給暇也。
〔官事抽筆〕
四月廿四日

將之助は將之佐

一、今晩御用番より被差出候左之江戸來狀、添紙廻狀共到來に付、遂披見致承知書等相廻候。別紙左之通。

一筆致啓達候。一昨十三日以上使戸田山城守御國元之御暇被仰出、白銀・御卷物御拜領。自右大將樣も御同人を以御卷物御拜領。昨日御老中方御連名之依御奉書、今日御登城被成候處、於御座之間御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自御熨斗鮑御頂戴、御鷹・御馬御拜領被成、重疊結構成御儀目出度恐悅之至奉存候。委細之儀者以御書被仰出候御樣子に御座候。將又將之佐・圖書御供に被召連候處、於御黑書院御目見被仰付、其上御卷物拜領仕、御威光故与難有仕合奉存候。
右之趣爲可申進如此御座候。恐惶謹言。

四月十五日

遠江守等十一人樣

長將之佐
前田兵部
前田圖書

四月十七日。金澤淺野水車町より火を失す。

〔官事抽筆〕

四月十七日

一、今晝八時過水車町より出火、次第に大火に及び候。右同斷に付以使者出席斷、御用番江相達候。當月御用番は痔疾に而不被出、助作州被勤、承知之由。且今日出席各風邪等に而不被出、併遠江守父子は被出候由。右火事鎭火は夜五時過頃、尙委曲類燒家數等別記に有之事。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化三丙午年四月十七日晝八時前、淺野水車町越中屋喜十郎方同居人平野屋茂右衞門後家とよと申者より出火。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化三丙午年四月十七日晝過、淺野町水車より出火、夜五時頃鎭る。風强く、其上組屋敷えんしやうに火移候哉、直に大樋金くさり橋迄燒拔、今一口は大衆免すなはせ邊少し殘り、七曲の小路上土藏作り之家を限り留る。下本通りのこらず燒失、裏卯辰邊山の麓は大抵のこり申候。

一、其頃之風說、丙午年故火はやく用心可致旨に而、則廿一日丙午の日故、家々屋根へ水を洒ぎ申候。

一、右火事前十六日之夜、月之出以之外赤く御座候事。

一、十七日右火事中夜六時過、又々他に火事有之由かまびすし。火消所々太鼓を打申候。併是は餘り長火事ゆゑ、人數一返引上げ候分、又押出候に付太鼓打申候由也。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化三年四月十七日馬場六番町より出火、類燒家左之通。八時出火、暮過及鎭火候事。

覺

一、千百九十七軒　類燒家數

内十五軒　水車町　内八軒　支配達
十八軒　立川町　内五軒　同
三十七軒　下牧町　内六軒　同
七十三軒　中牧町　内八軒　同
二十六軒　上牧町　内三軒　同
四十九軒　同中通り
四十九軒　同横町
二十五軒　同西町

二十六軒　同穴町　内二軒　支配違

二十九軒　七曲り　内二十一軒　同

五十軒　龜淵町　内二十二軒　同

二十八軒　井波町　内六軒　同

十四軒　淨光寺前

二十二軒　心蓮社門前　内六軒　同

十二軒　善導寺門前　内二軒　同

百廿一軒　山の上町　内三軒　同

二百十四軒　春日町　内二軒　同

十一軒　寶藏町　内七軒　同

六十八軒　上田町　内七軒　同

六十四軒　森山町　内一軒　同

十三軒　山下町　内十軒　同

二十九軒　談議所町　内一軒　同

七十一軒　大樋町

御支配違百四十二軒

外三軒　毀家　二軒　半毀

二ヶ所　番所　三ヶ所　木戸　六つ　土藏

右私裁許類燒如斯御座候、以上。

四月　兵次郎　次助

市郎右衞門　孫六

覺

一、二百四十一軒　類燒家數

内三軒　公事場足輕組地　四軒　前田式部殿家中

三軒　武士屋敷　四軒　寺庵

二十六軒　御仲間組地　十一軒　町附足輕組地

三十二軒　中組　四十一軒　大組

二軒　御小人組地　五軒　御坊主組地

二十三軒　大衆免村　十四軒　山上村

五十八軒　談議所村　一軒　町附足輕組續割場

右私共裁許之外、他支配地類燒家如斯御座候、以上。

午四月十八日　肝煎　四人

〔日用雜記〕

一、四月十七日晝九つ半時過頃淺野川馬場六番丁邊より出火いたし、大衆免皆燒申候。夫より金屋町・高道・山の上町・春日町・茶橋より金くさりの橋迄の內半分兩方共燒申候。其夜五つ時火事鎭申候。且六つ時頃火消中ゟ御横目中より引揚之樣被致指圖候に付、被引揚候處、玉井賴母樣火情强く被見請候に付御出馬有之候。生駒右膳樣・寺西要人樣等右同樣御出馬有之候。其夜五つ時頃御引揚之由。但三千軒餘茂燒失いたし候風說に御座候。

〔每日帳書拔〕

四月十七日

一、大衆免町家より出火、及大火、奉書火消申渡候事。

四月十八日。前田齊泰、江戸を發して就封の途に上る。

〔官事拙筆〕

四月廿六日

一、夜前御用番より被差出左之江戸來狀添紙に而四時過到來、致承知書等相廻候事。

相公樣益御機嫌能、今十八日晝九時前御發駕被遊候。依之中飛脚を以申進候。

右之趣眞龍院樣初御申上可被成候、以上。

四月十八日　前田兵部等兩人

前田近江守樣

〔溫敬公記史料〕

四月十八日。駕發江戸。五月三日到于金澤。扈從長將之佐。

〔官事拙筆〕

五月朔日

相公樣當廿七日糸魚川に而御逗留之御樣子に付、昨廿八日魚津附同心共を以泊驛迄指遣承合候處、姫川洪水に而岸崩、曁昨朝より追々山之下親不知・駒返り高波に相成、昨日之處茂糸魚川御逗留に相成申候御樣子之旨、魚津同心之者早飛脚到着仕候に付御屆申上候、以上。

午四月廿九日　富田織人

前田美作守樣

〔官事拙筆〕

五月二日

昨廿八日糸魚川より申進候通、相公様益御機嫌能御旅行被遊、姫川出水に付御逗留之處、次第減水御渡船御指支無之に付、今朝五半時之御供揃に而糸魚川御發駕、姫川并山之下難處々々無御滯御越、七半時泊驛ゟ御着御止宿被遊候。御供人末々迄無異儀罷越申候。先以恐悦御同意に御座候。將又來月三日曉八時之御供揃に而、高岡御發駕可被遊旨被仰出候。尤御泊附者先達而相極候通に御座候。此段眞龍院様初ゟ御申上可被成候。今晩山本修理より早飛脚差出候に付傳封此段申進候、以上。

四月廿九日　　長將之佐

前田近江守様

四月二十日。先の火災により困窮する者を收容して粥を給す。

〔官事拙筆〕

四月廿二日

一、町奉行水原清五郎・坂井忠左衞門別席に而、今度類燒之者共之内小前之者共飢に至候躰に而、居候處も無之難儀仕候様子に付、大衆兎町・高道町・春日町三ヶ所に一昨日より救小屋を建、粥を爲焚爲給候處、人高千人餘に相成申候。併是より人多に可相成躰にも無御座、追々縄くゝり抔いたし居住仕候者も御座候。此段一應達置候旨に而、人高覺書も差出、則受取書添爲致右同斷之事。

〔諸事要用雜記〕

四月廿四日

一、左之通町奉行持參口達に而も申聞に付、今日急便内狀を以申上候事。

當十七日水車町より出火烈風に而大衆兎等・高道町筋より大樋町迄歟千軒餘燒失仕。右ヶ所は小前者多、常々救置候者不少御座候處、今度甚急火に而道具等持運候間茂無御座、過半皆燒候様子に而、指當致方茂無御座、不便之爲躰に付、早速御救方之詮議仕、先十日夕より粥焚相渡申候。千軒建候内困窮者四百五十軒計御座候。粥相渡候人高昨日迄之所一日千七百人計に御座候。近年材木等高貴、其上先達而堤町等大火後別而直段も引立、大工日用等手張申候に付、本通筋相應之家すら急に假圍茂仕得不申体御座候。尤難澁者に而縄くゝり小屋茂仕得不申、便り申身寄等之者茂無御座者共は、右小屋へ入置申儀申渡、小屋不足も仕候得ば建増茂仕圖御座候得共、大抵夫々便りヶ所等御座候哉、右小屋入仕候者は人少に御座候。是迄救方には家持之者迄に而、同居借家人へは救方無御座振に御座候得共、今度之儀は□□右等茂一躰に粥相□□不仕、先只今之處指當□□有御座間敷哉与奉存候。□□詮議仕

缺字は虫喰

候儀茂御座候得共、□之儀御序を以被仰上可被下候事。

四　月　　水原清五郎
　　坂井忠左衛門

四月廿四日。建築材料の價格を低廉ならしむべきことを命ず。

〔毎日帳書抜〕

四月廿四日

一、近頃材木類其外縄蔣抔直段以之外引上、御家中等へ雇候日用賃錢抔も過分に引上候様子相聞候。無謂右様之族有之間敷儀候條、引下げ相應之直段を以商賣等いたし候様、町奉行等へ申渡候事。

四月廿六日。前田齊泰の子利義・利行、石川郡白山宮に行歩を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

四月廿六日

一、今日基五郎殿・豐之丞殿白山ゟ御行歩御出被遊候。折惡敷降に成候事。

四月。宮腰町奉行里見亥三郎、錢屋五兵衛の船頭に渡海免狀を與ふ。

〔宮腰町内記〕

加州手船宮腰町錢屋五兵衛才許船頭・水主共九人乘、永代渡海於浦々異儀有間鋪者也。

加賀宰相内　　里見亥三郎

弘化三年四月

津々浦々役人中

五月三日。前田齊泰金澤城に着す。

〔官事抽筆〕

五月三日

一、今日御着城に付、晝九半時前服紗小袖・上下に而追々登城。御用番は今朝例刻より被出候事。

一、晝後津幡御供廻り、森下・大樋御立之御附人追々到來。右大樋より之御附人參候上、そろ〳〵遠江守・播磨守・助右衛門・雄二郎・大膳橋爪へ罷出居候。美作守は御城代當月主附之由に而御式臺ゟ被出、御家老中も御式臺なり。三之丸には寺社奉行始役懸り人持・諸頭出居候。夫より御先三品追々着、淺野川大橋御通行御附人も到來、遠州ゟ直に相達點頭被致候。無程追々御人數着、御持柄見え候前之比各蹲踞、筆頭遠州三之丸方を頭にして順に橋之角少放れ

平伏也。諸役人等は二之丸方を頭に列し平伏也。則相公様御馬上に而前を御通之節、今日は天氣も宜敷御着城御大慶被思召候。各も無事与御意有之。遠州御受等被申上候。此時何れも少進み出御禮仕候。御通過之上追付登城候事。

一、益御機嫌能御着城被爲在候付、各夫より御用番座に而恐悦申述、畢而互にも申述。御用番は來月御用番自分に恐悦被申聞候事。

五月四日。富山侯前田利保が江戸邸燒失に就き加賀藩より助資を得たるを謝せる報金澤に達す。

〔成瀨正敦日記〕

五月四日

一、出雲守様御燒失に付、先達而於江戸表御用之間へ將之佐被爲召、御助成方御僉議之趣御發駕前申上り、金二千兩御振替被進候に付、右之趣御發駕御當朝四月十九日御家老富田大隅呼立、將之佐より被申談候付、右御禮御出も可被成所、御保養中に付重而同人を以被仰上候旨等、江戸表御圖書・兵部より二十四日出に申來候紙面、御用番より被入御覽候事。

五月九日。大聖寺侯前田利平、江戸より歸邑の途金澤城に登る。

〔成瀨正敦日記〕

五月七日

一、備後守様前月廿六日江戸表御發駕、當八日金澤御着被成候付、同九日御登城之様可被仰進哉。同日は松雲院様御祥月之儀に付御料理等は不被進御儀与、先例等御用番より申上る。御作法附等今日被相伺候之通与被仰出候。且同日御參詣日に付、晝後御登城之事に被仰出候事。

五月九日

一、八つ時頃備後守様御登城、御口上御家老承り、以御近習頭申上、御對顔可被遊候間御居間書院へ御通り之様、以御家老被仰進、追付御通、御茶・御たばこ盆出之。追付上之口より御出御對顔。其節御熨斗上之、暫御對談被遊、無程御挨拶被遊、如例農人之御杉戸迄御送被遊被爲入候事。

五月十日。石川郡相川新の儀左衞門孝行を以て賞せらる。

〔見聞袋群斗記〕

五月十日。石川郡相川新村の孝子儀左衞門に御褒美あり。

五月十一日。前田齊泰囃子の舞を演ず。

〔官事拙筆〕

五月十日

一、明十一日晝九半時揃御囃子有之候に付、出席之人々望次第拜見被仰付旨、以御近習頭被仰出候由、御用番各江申談候に付、御禮之趣申述候。

五月十一日

一、晝八時過御舞臺拜見所江廻り候樣案内に付、同席・御家老中等每々之所江罷出、御近習頭入口迄誘引も有之、則左之御番組之通有之。御前御舞拜見之節は手を付居候處、手を上拜見候樣以御近習頭被仰出。依而始終に手を付候事每々之通。且今日詰處御見通しに成候故、御出御覽之節は手を付致見物候事。

御番組左之通り

繪　馬　爵　東　北　御　善知鳥　權兵衛

邯　鄲　宮　門　小袖曾我　万十郎　碇　潛　忠　藏

歌　占　御　昭　君　權兵衛　祝言須磨源氏　權　進

右夫々相濟、退去之上松之間於二之間各一列に而、以御近習頭拜見之御禮座上播州より被申上候事。

一、追付夕七半時前何れも致退出候事。

五月十三日。前田齊泰、金澤郊外七ッ屋口に放鷹す。

〔官事拙筆〕

五月十三日

一、今日九時之御供揃に而御鷹野に御行步御出。依而御出相濟、追付九半時前御用番之外各退出。

〔諸事要用雜記〕

五月十三日

一、九時過御出七つ屋口より御鷹野御出、暮六時前御歸殿被遊候事。

但、御供拙者罷出る。御獲柄鶴等廿四・五も有之。御拳も數有之。天氣も穩に而御慰被爲成候事。

五月十四日。二條齊信の使者金澤城に登り金子融通を求む。

〔官事拙筆〕

五月十二日

一、二條樣御使者西村出雲守儀一昨日到着。依之先例之通總代見舞旁、年寄中・御家老中一

自分は奥村助右衛門

人宛旅宿江可罷越之旨に付、今夕自分相勤候樣、昨日御用番より被申談罷越候筈。御家老方に而は今枝被參候旨。

一、夕七時過上下着用、供立常より相增、則出宅、堤町中宿組屋德右衛門方へ參候。坊主一人罷越居候。今枝は少前被來候由也。夫より以坊主御使番呼立候處、則入江半藏參出に付、旅宿間圖り之樣子等相尋、萬端承合候處、委敷申聞有之。且追付御案內可申上之旨申聞退去。此中宿座敷江兩人通り居候內、茶・干菓子も出之、併暫時故菓子は不取上、其儘にいたし置候事。

一、夕七つ時過、旅宿不指支申來候に付、助右衛門・內記同道、暫時之間故步行に而、則盛砂等有之門より入、上り口に而家來江刀渡し、式臺階下侍江烏渡挨拶候處、誘引、其處曲り狹き處通筋に御使番兩人列座及挨拶。其所少過、闇き間より一段高く誘引人爲知、夫へ上り候處、御使者西村出雲守出向、挨拶誘引。二之間より上之間床橫障子側着座、兩人は障子後にし、向うて右之方に着座、始而逢候及挨拶。且暖和之砌彌御賢勝目出度存候。今度は遠路御使者御苦勞に存候。御見舞旁、同役總代致參扣候旨而々申述。夫より暫時咄合候。且出雲守より、今度從二條樣御賴之趣、登城之上御口上書を以被仰進筈候得共、尙又何分宜と被申聞、應而及答。追付退出、最前に有之通、則暮頃致歸宅候事。

中川八郎右衛門は家老

五月十四日

一、今日晝四時過、二條樣御使者登城之筈に付、例刻上下着用登城。各も同斷。但內膳氣滯に而登城無之。

一、晝九時前御使者西村出雲守登城。御大廣間江被通、御家老中之內より御口上之趣承之、覺書被受取、各へも披見に被出。相濟、御家老方より直に被上候由。追付挨拶に可出旨に付、加判年寄中・御家老中二切に、虎之間方より廻り挨拶に出、面々挨拶之上引取。重而遠江守等五人出候處、出雲守從二條樣御命之趣申述候上、右に付乍輕少拜受物被仰付候旨も被申聞候に付、座上遠江守より蒙御懇命、其上拜受物被仰付忝仕合奉存、御禮之趣宜と被申述候處、歸京之上可相達被申聞、則退去。重而內膳爲名代助右衛門壹人罷出候處、右同斷拜聽之上、尙更內膳江可申聞旨申述、則退出。次に御口上承、中川江も拜受有之由。其外は御命迄也。夫より御作法書之通り御料理等出、委細は略之。且御前御直答可有御座處、御疝邪氣に被爲在、其儀無之、御家老中之內より御返答御口上に申述候由。右御使者饗應後、御問拜見も有之由之事。

一、彼是八時前頃追付退出之旨付、年寄中・御家老中實檢之間方後にし、御式臺橫板間に一列見送り出居候。追付御奏者番誘引、座前に而挨拶有之、御式臺通退出有之候事。

一、右相濟、外御用も無之に付各下城。夫より直に播磨守・近江守・將之佐・助右衛門同道に而、西村出雲守旅宿江罷越、式臺玄關に而御命幷拜受物御禮、播州・近江守一切、將之佐・助右衛門一切、兩人宛一集申述、座上之者口上述、同樣に宜と述、且交名も申置。則夫より直に而々歸宅いたし候事。

〔成瀨正敦日記〕

五月十四日

一、今日二條樣御使者西村出雲守儀登城に付、表向上下着用に候へ共、御次內は常服に而先罷出候事。

一、二條樣御內用之御口上、且御狀も被進、御家老八郎右衛門御取次、以大村被申上候付、夫々入御覽候所、此間御用番より伺有之候通り、追而可被及御答旨、當座之御答被申述候樣、大村を以八郎右衛門へ被仰出候事。

但、右御內用御口上書取は、禁裏來年御卽位・大嘗會等に付、右大臣樣御勤向に付二千兩御借用御賴也。右覺書翌日御用番へ以大村御渡、遂僉議被相伺候被仰出候事。

五月十六日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事拙筆〕

五月十六日

一、今晝學校御出に付、晝九時過、遠江守初上下着用學校へ致出座候事。

一、晝八時過奧之口御出案內に而、主附近江守・將之佐、伺公には遠江守・播磨守・助右衛門・大膳・內記・萬之助・大學・八郎右衛門、若年寄式部は御先立也。夫々御作法之通り罷出居、追付御乘用に而御出、御白洲御式臺前に而御下乘、奉行前に而御中座御意有之、御請等江州より被申上。夫より明倫堂御上段江被爲入、各橫江如例伺公。無程講書初候旨、學校御橫目より奉行主附に達、御用部屋を以て被申上、御襖明候處に而、奉行始御廣間內江進出、筋違に伺公候處、御上段御下り、御廣間御氈之上御着座、御見臺も上り候上、大學三綱領教授廣瀨順九郎講之。畢而御上段江御復座、御見臺引之處江、主附近江守教授順九郎誘引、正面に而平伏候處、講書大儀と御意有之。御請、蒙御意難有仕合奉存候旨、江州御取合被申上。御襖建、各御上段橫江復座、追付御廊下口に向ひ着座罷在候。夫より經武館へ被爲入、加藤增之丞方鎗術、山森武太夫方鎗術稽古御覽。相濟、各如最前御式臺階上等江伺公、追付御戻り、都而每々之通替儀無之。

五月十八日。前田慶寧、江戸城に登り本丸造營成就の祝賀能を覽る。

〔藤懸賴善手記〕

五月十八日

一、六時頃御出、筑前守様御本丸江御登城被爲遊、暮六時過御歸殿被遊候事。御城御造營御成就に付、御祝儀御能御拜見之事。

但、御出之節御提灯神田橋邊迄相建、御下り之節大手酒井與四郎邊より相建候事。

朝御供

御右　葭田　池田　御大小將より　加人　御横目　脇田平之丞

御左　古屋甚兵衛　篠島　御近習番より加人　澤田宅左衛門

上下御供　御大小將御番頭指支候に付御表小將御番頭より　津田判太夫　荒木津太夫　津田

晝御供

御右　飯田　嶺　御大小將より加人　和角孫左衛門　御横目代　九里辨之助

御左　人見昌之進　稲垣　和田

上下御供　中川平膳　宮川久兵衛　改田

一、右に付晝御供人四時過御殿江相揃、其段御横目所江及案内、九時前御横目所より相廻候様申來、夫より御番頭等同道に而、一統御作事御門より出、順之通致馬上、南御門前通り御登城御道筋之通り罷越、酒井雄樂頭殿表門邊に而致下馬、夫々代り合申候。且交代罷歸候者も、右所に而順之通馬上致、前に記候通之道筋より罷歸、一先中之口前へ相揃、御横目指圖之上引取申候事。

但、引取之刻限は八時頃之事。

一、朝御供人迎之從者、御横目所より申來候通、中之口前腰懸爲揃、押足輕致指引、晝御供人江指續罷越候事。

但、朝御供人鎗爲持不申者、鎗迄取寄候。從者乘馬とも、晝御供之者召連候分を召連罷歸候事。

一、晝上下御供之者は、御横目所より案内之上、惣御供より一足先江罷歸候事。

一、殿中詰御用無之事。

但、御燒飯御溜に而被召候故之由事。

一、御燒飯御用有之、池田相勤候事。

一、交代之節從者召連方、若黨兩人・鎗・挾箱・笠籠・草履取・馬之事。

一、御燒飯例之通御玄關前に有之御挾箱に入有之に付、御挾箱共爲持罷越、中之口に而爲取出、直に聞番江相渡。

但、古屋殿申談に而、以後も右之通相勤可申旨に付、本文之通相勤候事。

一、今日切御茶碗御用有之に付、御燒飯者一集に取揃致候事。御茶碗箱御服紗包に相成、御燒飯と一集に相成居申候。

五月十九日。前田齊泰能を演ず。

〔官事拙筆〕

五月十九日

一、今日御能拜見に付、朝五時前上下に而出席、各も追々同斷。

一、五時過拜見處江廻り候樣案內之處、助右衞門・雄二郎・御家老中等一兩人之外未被出。則前々之通御舞臺向うて右之横御縁側江列座、後〻には成瀨主税等御近習勤仕人々等、服上下に而拜見、向側御間には御表勤仕當番之頭分等夫々列座拜見。都而拜見方等去春之通故略之。彼是晝九半時至一先御中入之事。

一、晝八時過重而御能相始り、都而右同斷。彼是暮六時過則相濟申候。御番附略左之通。

御能御番組

伏見御　藤戸　舟藤御

二人靜　權進　富士太鼓　宮川　船橋　權兵衞

舟辨慶　附祝言　御

文角力　舟鮒　梟山伏　吹取　瓢の神

一、右相濟、松之間於二之間同席・御家老中等一列に而、以御近習頭御能拜見被仰付候御禮、座上遠江守より被申上候事。

五月十九日。金澤安江町より火を失す。

〔官事拙筆〕

五月十九日

一、夜五時過安江町筋出火に付、追付致出席候。御用番幷將之佐・內記・万之助・式部先に出席。夫より大膳・庄兵衞・播磨守・近江守も追々出席。其外者風邪等に而以使者斷之由也。右火事次第に及大火、奉書火消六人被談、彼是翌曉七時前漸鎭火寄に而、未火事所御横目よりは達無之候へ共、御用も無之旨に付各致退出候事。

〔成瀨正敦日記〕

五月十九日

一、退出後六つ半過に而も可有之歟、安江町高田亥次郎隣町家より出火、急に鎭り不申に付、卽刻出席いたし、暫相詰罷在候所、鎭火はいたし兼候へ共、御城は火の粉等も參り不申事故各退散。拙者は一類前田主馬方へ相見廻候所、堤町へ延燒にて氣遣しくに付、暫見合罷在、

九つ半頃同所は氣遣無之、下火に相成候付致歸宅候。惣而鎭火七つ時過由。
翌日承り候へば、潰家共町家九十九軒、外二軒武士屋敷燒失之由。

〔故紙雜鈔〕

一、弘化三年五月十九日夜五時前、安江町より出火、左之通燒失、曉天七時過及鎭火候事。

一、火元不知

一、七十六軒　安江町

內一軒毀家　一軒半毀

一、十　軒　同町地借

內一軒支配違　二軒毀家　一軒半毀

一、九　軒　下堤町

內一軒　同町地借

一、六　軒　袋　町　〆百一軒

外に武士屋敷　百　石　組　外　安江町横小路之內　高田亥太郎

三百石　御馬廻組　末寺前末　佐藤兵馬

右肝煎上山市藏より借用寫置候事。

右火元は安江町松任屋善兵衛与歟申者手代、主人之銀を盜出し、其儀を掩ひ隱さんとの爲火を付候よし。右之者出奔いたし候得共、越前地にて捕へられ、同年十月磔之刑に處せられ候也。

〔每日帳書拔〕

五月十九日

一、安江町高田亥太郎邊より出火、及大火、奉書火消申渡。

但、此時二條樣御使者逗留中に而、旅宿近火に付外宿へ立退せ候事。

五月廿四日。二條齊信の使者に金子貸與申込の一部を許容す。

〔成瀨正敦日記〕

五月廿五日

一、此度二條樣より御振替金御賴に付、御用番へ遂詮議被申上候樣被仰出置候所、於御勝手方御算用場奉行へも遂僉議、金子千兩御振替被進候而可御宜、且御返濟方之所、當時天保十一年御振替千俵之御返濟、殘八百俵之內三百俵は、千兩之內に而只今御返濟、殘五百俵は當年より申年迄三ヶ年に御返濟、此度之千兩は翌酉年より御助力米之內を以、百俵充二十ヶ年に御返濟与申御算用場僉議之趣等申上り、出雲守江可申述書取下物、別段申述共兩通も出來、

當町は金澤

以主税被相伺候之通与被仰候所、重而右兩通以大村被上之、御家老江直に仰出候様申上候付、入御覧、執筆へ相渡、調筆出來之様申談置。

五月廿四日。火防に注意すべきことを告ぐ。

〔雜事日記〕

近頃度々出火有之及大火候。火之元之儀一統油斷は有之間敷儀候得共、頃日多分天氣茂打續宜敷候間、猶更嚴重相心得可申候。放火付草躰之品茂所々有之様子相聞江候條、侍方等屋敷廻を初、町家至迄別而入念可致候。自然疑敷者茂有之候はゞ召捕置、早速及斷可申候事。

五月廿四日　　前田美作守

五月。質商の利率と限月の變更を許す。

〔郡方御觸〕

小松町質屋共利足之儀に付、同所町奉行等紙面に覺書相添被出之候。然處當町奉行よりも、質屋共相願候由に而、利足之儀者一歩三朱宛爲取請、限月者是迄十ヶ月切に申渡置候得共、以來十三ヶ月切に承屆置候而も苦かる間敷哉之旨及内達候に付、當分右之通町奉行切に聞屆候儀承置候段申渡候條、遠所町・在之儀も同樣に候間、夫々無急度御算用場より可被申渡候事。

閏五月四日。鳳至郡院内村直次郎が父の代牢を請ふ爲公事場に駈込みたる事情を取調べしむ。

〔諸事要用雜記〕

閏五月四日

一、公事場奉行江左之趣相尋候様被仰出、則呼出伊藤主馬へ申談候處、奉畏追付可被申上旨之事。

御預所鳳至郡院内村直万せがれ　直次郎

右支配人より縮申付有之處、前月六日番人之透を考、公事場へ駈込、父之代牢相願、孝心之至に付不及代牢、父出牢之儀伺有之。直万儀は輕罪之者之旨に付、其節伺之通被仰出候。右之通人縮も有之者之處、孝心之至を見込候儀は不一通儀も可有之、如何躰之様子に候哉、口書も上り不申に付、委曲之様子御分被遊兼候此段御尋。

閏五月六日。竹澤天滿宮に龍蛇神を合祀す。

〔成瀨正敦日記〕

本文は奥村助右衛門の手記に係る梅源五左衛門は側用人

閏五月二日

一、今度於江戸表御受被遊爲御持に相成候龍蛇神御眞像、森辰之助へ寫被仰付候に付、此間申談置、昨夕より致別行、今日より御次へ罷出候付、波之間御縁側に屏風圍出來、奥附御横目足輕被指出候樣、梅へ此間申談置。

閏五月六日

一、龍蛇神、今日竹澤御鎭守へ御相殿に而正遷宮有之候。尤野尻彦六郎へ被仰付候事。

閏五月八日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

閏五月八日

一、今朝瀧之間講釋御聽聞可被遊旨、梅源五左衛門を以被仰出候由。例刻より早めに出席相始り居候に付、直に瀧之間御敷居内に伺候。遠江守・大膳被出居候。御見通しに不相成故、手を付不申候。則御儒者助教新井周藏孟子講之。追付相濟、御入之上見計ひ退出いたし候事。

閏五月八日。石川郡本吉町紺屋三郎兵衛に御金裁許を命ず。

〔官事拙筆〕

閏五月八日

一、此間示談之上以御用部屋伺置、其通被仰出候に付、左之書立御算用場奉行有賀寛兵衛相招、於席相渡候事。

本吉町　紺屋三郎兵衛

右之者苗字爲名乘、御かね裁許被仰付、所奉行直支配被成置候樣仕度旨紙面等指出候に付、格別之趣を以御かね裁許申渡、如最前一代切苗字相名乘候儀、且直支配之儀も承屆候條、本吉湊裁許ゟ可被申渡候事。

午閏五月

〔御家雜抄〕

弘化三年閏五月

一、本吉町紺屋三郎兵衛儀、最前苗字御免、御調達方御用相勤。就中天保七年違作に付越後米御買入之節も、全御用立候所、同九年能州ゟ居住被仰付置候得共、同十四年御引替所御調達金も上納仕候に付、住所如元被仰付。其後御調達方御用立候付、苗字爲名乘、御かね裁許被仰付、所奉行直支配被仰付候樣願に付、如最前一代切苗字相名乘候儀承屆、御かね裁許申渡、本吉湊裁許直支配之儀も承屆可申哉之旨寛、寛之通被仰出。

閏五月九日。前田齊泰、蓮池御庭に金城靈澤碑を建設すべき位置を檢す。

〔成瀨正敦日記〕

閏五月九日

一、今日八つ時之御供揃に而、蓮池御庭江御出可被遊旨被仰出、金城靈澤御額・御碑文建所之御好等可被遊旨に付、當席兩人共罷出る。八つ時頃御出被遊、御先へ罷越、八つ半過右御用相濟候故、兩人共外御用無之旨御意之由金谷申聞候付、致退出候。

閏五月十一日。前田齊泰夫人江戸城西ノ丸に登る。

〔諸事要用雜記〕

閏五月十一日

一、姫君樣當二日西丸御登城被遊候段申來候事。

閏五月十三日。先の罹災者中給人に借知一作限り免除することを告ぐ。

〔官事拙筆〕

閏五月十三日

一、今般先頃火災之節類燒之人々江、格別之趣を以御借知一作被返下候に付、右書立覺書、今枝内記與力之内右之者有之故、同人席江相招相渡候處、奉畏早速可申渡、於私も難有仕合奉存候旨被申聞、退去。夫より寺社奉行始諸頭一人充相招相渡候處、夫々當座之御禮も申聞候事。

閏五月十四日。前田齊泰能を演ず。

〔官事拙筆〕

閏五月十四日

一、追付梅源五左衞門席江出、今日御能被遊候間、望次第拜見被仰付候段被仰出候旨申聞候。且御家老中江も可及演述旨も申聞に付、夫々可爲申聞旨申述候。則遠州初江も申聞、御家老中主附本多大學、若年寄中前田式部座江相招、夫々申聞候處、御禮被申聞、御用番より引受、以御近習頭御禮申上置候事。

但、追付御始に而、未出席無之人々も有之、拜見處江相廻り候故、執筆より可申達之樣申入置、直には不談候事。

一、晝四時過御能始り居候間、拜見處江可廻旨に付、遠江守・助右衞門・大膳・御家老中も、如例右之方御舞臺横拜見處江罷越列座拜見、其外御次内等拜見人も後〻に如每列座、向側には詰合御奏者番始諸頭等右同斷。追付播磨守・美作守・將之佐も追々出席、右同斷。則左之御能二番有之、彼是晝九半時頃一先御中入之事。

一、晝八時過重而御能等相始り、前段之通夫々拜見、夕七半時前相濟候事。

御能等御番組左之通。

天　鼓　忠　蔵　高野物狂　御

御仕舞等　歌　占　万十郎　一調　長右衛門

飛鳥川　御　龍田川邊　新　助

八　島　直次郎

隅田川　權兵衛　殺生石　權　進　亂　權兵衛

閏五月十七日。紀伊侯徳川齊順逝去の報金澤に達す。

姫君は前田齊泰夫人

〔官事拙筆〕

閏五月十七日

一、晝四半時過、當九日出御用人御用に而十日迄延日圖り早飛脚到來。前日兵部等より之紙面紀伊大納言樣御所勞之處、養生不被爲叶、當八日曉子之下刻御逝去被成候に付、姫君樣御定式御半減、十月四十五日之御忌服被爲受候旨等、且右に付普請は八日より三日、鳴物は七日遠慮申渡有之由。此表鳴物等遠慮之儀前々之通可相伺旨等申來候に付、追付先例引しらべ、伺書兩通等以御用部屋上之、伺之通被仰出候に付、普請は今日一日、鳴物等は明後廿九日迄三日遠慮之筈に、夫々毎々之通觸付候。

閏五月廿一日。長將之佐家來毛受莊助に儒者を命ず。

〔官事拙筆〕

閏五月廿一日

一、晝四半時前各出席之上、御横目席迄相招、長將之佐家來毛受莊助名書渡之、罷出居候間、各誘引に而席迄指出候樣申渡候處、追付指出候旨申聞、各列座御用番左之通申渡之。

新知　百二十石　毛受莊助

御儒者に被召出、新知如此被下之。

閏五月廿二日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

閏五月廿二日

一、今日九半時之御供揃に而、兩學校へ御出被仰出候事。

閏五月廿五日。前田齊泰、火矢方の大筒を觀る。

〔成瀧正敦日記〕

閏五月廿五日

一、火矢方手合之大筒御覽可被遊旨、此間被仰出申談置。今日火矢方小川群五郎・小川七郎

左衛門持參いたし、御居間先御庭に而御覽被遊候付、御横目へ申談爲相廻、群五郎等兩人、外に棟取火矢方御細工人兩人手傳に入、夫々相飾る。（但御庭二枚開より内は、三十人者八人計爲出爲持運候事。）群五郎等爲引候上御覽被遊、相濟、群五郎等相廻し爲相仕廻、相返候事。

一、今日御覽之御筒十貫目筒・六貫目筒・一貫目筒一挺充、外に敵鉾与申數仕懸之小鑄筒（百五十目計之玉之由。）五挺充之分二箱、御覽被遊候事。

六月朔日。金澤の町人能登屋左助、江戸金座より金銀箔の請賣を許されたるを以て苗字を許さる。

〔毎日帳書抜〕

六月朔日

一、左之通申渡候旨に而町奉行出之。

卯辰西養寺前

能登屋左助事　越野左助

右之者今般江戸表金座より金銀箔類請賣等いたし候儀御聞屆に付、苗字相名乘度段願出候。右職柄に依而苗字相名乘候儀は願之通承屆候。しかし御老中方へ御達之筋有之節は、苗字持には御達無之、家持左助与御達之筈に候。

右之通可被申渡候事。

六月三日。鹿島郡金丸の孝女いとに賞賜す。

〔見聞袋群斗記〕

六月三日。鹿嶋郡金丸村の孝婦いとに御褒美被下。

六月十一日。德川家慶が前田齊泰の暑中を問ひたる奉書金澤に達す。

〔官事抽筆〕

六月十二日

一、夜前宿繼御奉書到來之由に而、各揃候上松之間常之席進出、播磨守・美作守・將之佐・助右衛門・大膳・御家老中一列に而拜見。（兩人充一集拜見、御家老中も同斷。）畢而互に一禮復座。御用番若年寄式部殿拜見被談。夫々相濟、重而座進出、同席御家老中一列大村肴次郎相招、暑氣御尋宿繼御奉書到來、恐悦奉存候。私共御奉書拜見被仰付、難有仕合奉存候旨、座上播磨守より被申上、畢而復座之上、若年寄殿拜見申談、御禮等申聞候趣も被申述、御奉書も返上有之候事。

六月十四日。相模浦賀に米船の入港したる報金澤に達す。

〔成瀨正敦日記〕

六月十四日

一、當月初相州浦賀表江異國船二艘渡來（あめりか船の由。）に付、松平大和守殿・松平下總守殿御暇被下、御堅め所へ被參候樣六日夜被仰渡。其外近所之萬石以上之御面々にも、浦賀奉行より申達次第御人數被仰出候樣、大目附より御書付出候旨等、四日出聞番内狀に申越、戸倉善佐より指越候書面等左膳より上之候事。

六月廿三日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事抽筆〕

六月廿三日

一、今日瀧之間講日に付朝五半時頃出席。

一、追付講書御聽聞之旨に付、瀧之間之處江助右衞門・大膳着座いたし居候。則御出、御襖明御聽聞。經書助教加藤甚左衞門講之。頭分以上如例聽聞人も有之、晝四時前相濟被爲入候事。

六月廿三日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

六月廿三日

一、今日九半時之御供揃に而、兩學校へ御出被仰出候事。

一、九半時過學校より御案内に而御出被遊、御先江大村・拙者參る。初め明倫堂に而句讀師會讀御進み被遊御聽聞。夫より入學生會讀之席へも御進み、醫學は其處より御聽聞。其内經武館宜段申上り御出、的御覽之御座所へ被爲入、三手先一建廿三人程充御覽。畢而御射手中江も御好的被仰出、何茂仕候。都合六組に而相濟、七つ時過御戻り被遊候事。

七月朔日。防火の手段を充分にすべきことを定火消役に告ぐ。

〔御用番方每日書立書拔〕

七月朔日

一、定火消役筆頭津田内藏助席江相招、左之覺書渡之、同役江申談候樣申聞候事。

去年以來出火之節每度及大火候。消防方之儀は各役前之事に候得者、尤由斷は無之筈に候得共、猶更申談出精被相勤、何分不及大火樣相鎭可被申候。

一、近年家來之内騎馬之者抔、中には裝束等僭上成躰有之。且携候品を以猥に人を雇立、怪我人も有之躰相聞候。將又引揚之節、町幅に人數を張、下々がさつ成儀も有之由相聞江、不心得之至に候。向後右等之族無之樣、主人々々より下々迄嚴重に可申付候。

右之通可申渡旨被仰出候事。

本年十月二十日の條参照

〔雑事日記〕

定番頭江

火事之節無用之人々火事場江不罷越筈御定茂有之候處、次第に相緩み入込候者多、無用之者早乗いたしがさつ之族有之、中に者人込之内江乗込、怪我人等茂有之由相聞候事。

一、火事之節辻立之者多、往來等之障に相成、且馬上之人々江聲を懸馬を驚し、不作法之趣共相聞江候事。

右之趣に付前々より相觸置候所、近頃次第に猥に相成、御縮方指障候條、向後右族無之様急度可相心得候。尤自今右躰之者有之おいては、廻り方役人相見咎、名前承屆候條、被得其意、組・支配等不相洩様被申渡、尤家來末々等申渡候様可被申談候事。

右之趣一統可被申談候事。

七　月

七月九日。能登中居の鑄物師に壹貫目玉の大筒製作を命ぜしむ。

〔御家老方等諸事留帳〕

七月十日

一、一貫目玉鑄筒製作被仰付、能州鑄物師十兵衛也。繪圖も差出、昨日大村肴次郎を以入御覽相伺候處、伺之通被仰出。

大村肴次郎は側用人

〔諸事要用雑記〕

十月廿日

一、中居に而出來之一貫目大筒出來、昨日御家老方より入御覽、於御居間先御覽被遊候目形七・八百貫目之由也。

七月十五日。前田齊泰、その誕生日を祝して囃子を行ふ。

前田齊泰の誕生日は七月十日なるも同日は齊廣の忌日なるを以て之を避けしなるべし

〔諸事要用雑記〕

七月十五日

一、今日御誕生日に付御囃子被遊、眞龍院様にも夕景御入之由。

七月十八日。能美郡附近に大風あり。

〔御家老方等諸事留帳〕

七月廿八日

一、能美郡邊當十八日之大風に而吹潰家百四・五十軒も有之。

但、越前地は格別に中、人家等大破損之由也。

七月十九日。火矢方の大筒等を充實するの方法を講ずべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

七月十九日

一、左之通御家老主付大學へ被仰出、主税相達す。且右に付御入用方も可有之候間、御借手方も被示合候樣被仰出候旨も相達す。

小川家火術之儀は、御先代樣段々御世話被爲在、火矢所等も被建置、御細工人も被指添、御手厚に被置候所、近來追々御省略に而、年々御渡方も相減就而は、御貯用之御筒等御修覆も不行屆、纔に近年打試之儀御聞屆之族に候。然處今度御貯用之御筒等御覽も被遊候所、前々御貯用之內燒筒等に相成、御貯用高相減候躰被聞召候。當時海邊御配方も有之處、右火術之儀は格別御手當にも可相成、殊に御先代樣右樣被成置候儀旁、御時節柄には候得共、今一篇御引立可被成思召候條、猶更遂詮議可被相窺候。此段可相達旨被仰出候。

七月

七月廿四日。青山將監の家來齋藤三九郎の石川郡打木濱に於いて大筒を試射することを許す。

〔毎日帳書拔〕

七月廿四日

一、青山將監家來齋藤三九郎、於打木濱大筒打試之儀願出候付、僉議之趣窺之處、被仰出之趣有之に付、小川群吾郎等稽古場之儀等御家老方へ相尋候處、往古は打木濱幷能美郡湊浦兩所に而稽古仕來候處、獵幷蠶に相障候旨に而、元祿元年より打木濱は相止、湊浦一ヶ所に成候由。稽古筒は一貫目・六貫目・十貫目を重に稽古いたし候由。元祿年中迄者年置稽古被仰付、其後は折々被仰付、寶曆九年之頃より稽古不被仰付由。然處文化十二年右稽古之儀相願、其節最初打木濱与相願候得共、往來留も行屆不申由に付、湊浦に而力樣之通稽古仕候得ば、縮方殊輕相立候旨等に付、其段申上候所、打木濱に而打候樣被仰出。

行屆不申由に付の次脫文あるべし

七月廿五日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事抽筆〕

七月廿五日

一、今晝九半時御供揃に而、學校經武館御出被遊候旨、伺公出順に付御用番より被談、則九時過主附將之佐退出後、追付大膳同道退出、學校江致出座候。御家老庄兵衞・若年寄式部も引續被出候事。

一、稽古出座人等相揃不差支御案内、例之通主附より以紙面被申上候上、彼是八時過御出、御乘用也。直に經武館へ被爲入候。伺公方等之儀毎々之通故略之。追付稽古不差支段御横目より達、則被申上、御稗明、澤田宅左衞門方居合等相始。畢而御稗建、出座人振替候上、重而關小太郎方劔術等、先達而出情人御覽殘り之分兩人、幷御好之品等稽古御覽。夫より出座順に而勝負等も有之。彼是七時過相濟、直に御戻り、伺公方等例之通、庄兵衞暫被居殘候。相濟、主附之外追付致歸宅候事。

七月廿九日。黑川良安御醫者に召出さる。

〔成瀨正敦日記〕

七月廿三日

一、當時青山將監手醫師黑川良安与申者、本越中御郡方出生之者之由に候所、蘭學宜いたし、當時諸國にも算へ候程之者之由御聽立居候。御用にも可相立儀に候間、被召出候而も可宜哉之御内意に候間、御内々年寄中御僉議可有之旨被仰出候付、右御内意之趣今日御用番遠江守へ主税於別席相達、僉議之趣被申上候樣にと申達置。

七月廿九日

青山將監手醫師

新知八十石被下、御醫者に召出

右は蘭學宜、醫術も相應にいたし候由に付、被召出候由。

黑川良安

是月は大盡なり

本年七月廿四日の條參照

七月晦日。青山將監、齋藤三九郎をして鑄造せしめたる大筒の試射を石川郡打木濱に行ふ。

〔成瀨正敦日記〕

八月朔日

一、西洋流火術者齋藤三九郎与申もの、去年歟青山將監方へ召抱に相成、先日よりもるちる大筒鑄立出來、右大炮稽古方爲致度旨將監より段々願有之、御用番より被相伺、打木濱に而打試等御聞屆に相成、則昨晦日打試出來いたし候由。

〔長谷川源左衞門筆記〕

今茲弘化丙午の秋、老參政青山淇水軒君、西洋の新神火器大炮を造れり。其名をモルチール・ハンドモルチール・野戰炮といふ。各要務あり。この三箇の新神器の如きは、蓋し未だ北陸七州これを權輿するもののあらず。老參政これを始製す、實に北地の先鋒嚆矢と云べし。僕これに銘して、未雨徹土先霜戒氷と云ものは、君の高志その源あるを敬感するが爲なり。今や其眞志の起る所の因を記し、又其銘の基づく所の深意を略解し、人をして感發の道を開か

んと欲す。凡そ人の常情に於る、誰かそれ義に向ざるものあらんや。然れども勇なるもの少く、義を見て能く爲すもの終に稀なり。特り老參致の如きは寛厚の長者にして、其眞義を見て果斷するの大勇あること、又その比なし。僕昔時父に從て初見し、陪講すること今に至て五十三年の久しきに及びて、義行はれ言聞かる。恩遇一日の如し。昔時僕の壯なるや、北狄ヲロシヤなるもの來りて、皇國の東北界を窺ふと聞きて、窃かに國に報ぜんことを欲し、自ら地球を造て彼此の形勢を辨じ、火炮を鍊習して此賊を豫防せんことを思ひ、その談屢參政君に議して、此の君の深志あることを見る。近年又エゲレス等の海賊、やゝもすれば本邦に迫らんとするの機あり。然るに世人多くは本朝の地勢を知らずして謂らく、賊船の來る只崎陽・津輕若くは東海の浦賀に在るのみとし、火炮の術は我國に古傳の名秘ありて足れりとして、日新の妙藝あることを考へず。愚なるかな。夫れ本朝は東洋正帶中の一大島にして、四方八面皆それ連環の海濱に非ざるものなし。賊の來路最も廣しと云ふべし。今國家閑暇にして患なき者の如しと云へども、賊の狡猾なる何れの海濱に向て其虚を探り伺ざるの理有らんや。老懐中夜にこれを憶へば寢ることを得ず。起つて之を訟へんことを欲すれども、微臣の愚忠達するに由なし。徒に感慨するのみ。頃者聞く、西洋の火炮や累年戰國に長じて、新眞の妙藝殊に開け、崎陽の高島秋帆その妙秘を傳へ得て、西國の諸侯は皆これに服して、專ら之を主用す。中にも肥前侯は明敏にして大に之を悅び、我が天正・文祿の鋒を洗ひ出さんと稱して、此火器を造製せること數百に及べりとなん。實に然らば、それ賊は必ず西國を避て他境に入らんか、其災量るべからざるの害を生ぜんことを懼る。又此に天なる哉、天保の末年我邦の人齋藤三九郎なる者ありて、此全傳を得て國に歸る。僕雀躍して之を青山老參政に進む。此れ固より參政の宿志に吻合せるが故に、斷然として悅で之を臣とし、果然として費に吝ならず。其重臣德田・佐雙・藤村・河野・松坂の五人に命じて造炮の工を督せしむ。三九郎の傳へたる、自ら其火器を造り、其火藥を製し、其火炮を放つ、此の三術を兼ね、其藝備れりと云べし。此に今年孟秋下旬、其の工初て就る。僕大に悅で謂らく、今老參政君高年七十に過て、其盛舉斯の如きは、實に此れ洪澳の綠竹猗々たる德風あり、果して有斐の君子衛武に比すべしとし、敬嘆の餘り君の高志を畫き出して君の眞面目を表し、此銘を作り之を炮上に刻して永く其孫子に貽り、君の精意を示し、後人を勵して不言の教を不朽に垂んとす。

八月八日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔諸事要用雜記〕

八月八日

一、今朝瀧之間講書御聽聞御出被遊候事。

女院は新清和門院、本年六月二十日崩御

八月十日。前田齊泰、先に女院崩御せしを以て禁裏・准后の御機嫌を奉伺せしむ。

〔成瀨正敦日記〕

八月二十六日

一、女院崩御に付、禁裏・准后御機嫌御伺之儀、公邊へ以聞番御伺之所、京都詰合之者を以御伺可有御座旨御指圖に付、其段京都詰人へ申遣置候所、當十日禁裏・准后爲伺御機嫌、傳奏衆御亭へ參上之儀、御所司代受指圖、奥村典膳相勤、筑前守樣よりも御同樣に付、岡田豐之丞相勤、同十二日勅答相濟候旨等、夫々御用人迄重上紙面、御用人より入御覽候事。

八月十一日。前田齊泰、石川郡宮腰に放鷹を行ふ。

〔官事拙筆〕

八月十一日

一、今日は七つ屋邊宮腰口迄御鷹野に、九時之御供揃に而御行步被爲在候付、御用番御家老中主附之外御出後九時過何れも致退出候事。

〔諸事要用雜記〕

八月十一日

一、今日九時之御供揃、同刻御鷹野御出被遊、暮頃御歸殿被遊候。御供同席大村氏被罷出候事。

一、今日御獲柄左之通。

御拳　小鷺二

八月十九日。前田齊泰、能を演ず。

〔官事拙筆〕

八月十九日

一、例刻出席、今日御能被遊候御樣子に付、拜見相願候而差支間敷哉、以執筆播州殿より成瀨等之內迄被聞合候處、不指支旨に付、則播磨守・美作守・助右衞門暫拜見仕度旨、播州殿より以御用部屋被願置候處、追付勝手次第拜見被仰付候旨、以同人被仰出、御用番より被申談、御禮申述置候事。

一、夫より拜見處迄相廻り候。彼是九半時前頃也。尤今日は御表之人々拜見は無之旨に而、御襖も處々建居、御緣側拜見處次御間に而、播州殿に准じ帶刀脫し（各此處に脇指有之。）例之御緣側迄參り列座拜見之。御能女郎花中ばより末之方也。右相濟、御中入之旨に付、一先三人共致退去

候事。

但、今日遠江守・大膳も尤出席候へ共、際入有之不被願事。

一、晝八半時前重而御始之旨に付、拜見處ゟ相廻り候。則三井寺御能相濟、美作守・助右衞門は退去、追付以御近習頭拜見之御禮松之間於二之間一列申上之。相濟、夕七半時前則致退出候事。

御能番組左之通。

放生川　御　女郎花　宮門　三井寺　御

小督　基五郎殿・豐之丞殿　融　爵　附祝言

九月朔日。側用人等書を金澤に發して、前田慶寧の兵學稽古の事等を議す。

〔富田儀右衞門日記〕

九月朔日

一、來る四日出、左之通小幡氏等へ可申遣候事。

一筆啓上仕候。――然者兵學御稽古御用有澤判平申聞候備立等算木御扱並城圖之儀、右箇條之節一通り申上候得共、右者別段御稽古無御座候而は、御覺被遊候儀も難被爲成候。依而當時御稽古日六々と廿一日都合四日之內、廿一日を右兩樣御稽古日に相極め、御抱守之內へも被仰付、不宜所は判平相直し可申。左樣之所御覽被遊候得ば、御稽古に可相成候。右之趣來女吉よりも申越候旨申聞候に付、其段申上候處、判平申聞候通可被遊旨御意に付、左候者相公樣ゟ私共より可奉伺候間、其上に而御始可被遊儀可御宜旨申上置候條、御伺可被仰越候。兵學御稽古之儀は、御表に而も御用之間に而成瀨氏等之內被相詰迄に而、外に御相手抔と申儀無御座樣承り罷在申候に付、一往奉伺儀可然哉と示談之上申上候。

一、江戶近海ゟ異國船渡來之節、臨時防禦等被仰渡儀可有之旨御書付到來、御觸渡御座候。右之節當時詰高を以御手配之儀、夫々御內しらべ可有御座儀勿論に候。萬一御留守年に右樣之儀御座候へば、若殿樣御出馬可被遊、是又夫々御手配可有御座候へ共、圖書殿內々被申聞趣も御座候。御道中如手配被成進候得ば宜儀、必左樣にも可有御座候得共、一向不奉承知、共圖りに心得罷有候も不安心成ものに御座候。御隱密之品故、私共彼是申には不及儀にも可有御座哉に候へども、少し御模樣承知仕罷在度儀に御座候。成瀨氏等御內談御座候而は如何可有御座哉。密々御內談申上候。御考可被下候。右之御序に御部屋御軍裝も相定り不申由。此節御僉議中と歟申譯にも御座候哉。御附之人々指物等相心得度候而も出來不申、自ら武備怠り之端とも可相成儀に御座候。中古格別長き御部屋住も不被爲在事故、御詮議も起り不申

前田圖書は家老にして世子の傅たるもの

竹田市三郎
富田儀右衛門は世子の側用人

小幡主膳・加藤三郎左衛門は前田齊泰の近習頭

坂井小左衛門は側用人

哉。若殿様には末長き御部屋住之御儀、其上連年異國船渡來物騒敷時節に候得ば、何と歟取頻御詮議有御座度事に奉存候。右之趣御考、御模様次第御内談可被下候。

九月三日　竹田市三郎
富田儀右衛門

小主膳様
加三郎左衛門様

〔富田儀右衛門日記〕

九月廿九日

當三日之貴書相達、――然ば兵學御稽古御用有澤判兵衛申聞候旨に而、備立算木御扱並城圖之儀、右箇條之節一通り申上候得共、右者別段御稽古無御座而は、御覺被遊候儀難被爲成候間、當時御稽古日六々と廿一日之内、廿一日を右兩様御稽古日に御極、御抱守之内へも被仰付、不宜所は判兵衛相直し可申、左様之所御見聞被遊候得ば御稽古可相成、右之趣采女吉よりも申越候旨に付、其段被仰上候處、其通り可被遊旨御意に付、左候はゞ相公様ゟ御伺可被成旨被仰上置候。兵學御稽古之儀は御相手も無、御人拂に相成居申儀、一往御伺可有之儀と御申合之由、御尤に奉存候。今日御次ゟ罷出、小左衛門ゟ申含置候間、相濟候上否可申上候。

一、江戸近海ゟ異國船到來之節、臨時防禦等被仰渡儀可有之旨、先達而被仰渡候。依而當時詰高を以御手配御内調理可有御座儀は勿論に候得共、萬一御留守年に右様之儀御座候得ば、若殿様御出馬可被遊、是又夫々御手配可有御座候得共、圖書殿内々被申候趣も有之、御道中如御手當被成進置候哉。決而左様にも可有御座候得共、一向御承知無御座、其圖りに御心得爲御濟置候も御不安心に付、御模様御聞置被成度。御部屋御軍裝も相定り不申由。御附之人々指物等心得度候而も出來不申、自ら武備之怠り共可相成儀、取頻御詮議有御座度思召候段等、一々御尤御同存に御座候。如何様御隱密之品には御座候得共、御互には御様子も密々奉承知罷在儀に付、先今日小左衛門ゟ内々相咄、御含之趣共委曲申入候所、御尤之儀に御座候。前段臨時防禦被仰渡候節、御手配之儀如何様御帳冊になりと御認可被進置儀と奉存候。内々御互より小左衛門迄、御模様相伺候趣を以可奉申上置候由申聞に付、夫に而も宜儀に候はゞ、其趣に取計呉候様申入候所、右之趣に申上置候方速に御詮議も御治定相成、可御宜旨申聞候。御部屋御軍裝大躰御治定之筈、御附之人々御合紋等、御細工奉行ゟ御渡に相成候哉、其儀は不奉承知。尚又御様子も可奉伺置、前條之儀もいづれ折角御詮議中に候間、無程夫々御治定に可有御座段申聞候間、右様御承知置可被下候。

九月十四日　加藤三郎左衛門

竹　市三郎様
富　儀右衛門様

〔富田儀右衛門日記〕

九月廿九日

一、先便被仰遣候毎月廿一日備立算木御取扱城圖御稽古之儀、暨右之節御抱守之内御相手被仰付候儀、坂井小左衛門を以奉伺置候處、御勝手に御稽古被遊候様被仰出候間、右様御承知御申上被成候様奉存候。竹田氏へも御演述可被下候。

右之箇條、當十九日出内狀に申來り、則申上置候事。

大原は長家の御武具懇主附

九月二日。長大隅守の與力河野久太郎、江戸浪人松下健作に就き大炮の製作を傳習すべき許可を受く。

〔大砲御用留〕

九月二日

一、大原十郎左衛門殿より、今般江戸浪人松下健作御當地ゟ罷越候に付、河野久太郎西洋流大炮爲鑄度段申聞候。御差閊も無御座候哉之旨、御用番様ゟ御内談有之候處、御用番様より相達御内聽所處、不被爲在思召候。勝手次第爲鑄可申旨御談之事。

他國人に候得共、請人取置逗留致候に付、逗留中爲鑄候儀は不指閊候よし。

且又銅之事も御聞合被遊候處、隨分埒明候由に候間、いか程と申數可申上旨も御談候事。

右吹場は吹屋を頼候而可宜哉、土田惣助を以承合候事。

九月十日

一、吹屋九左衛門貸呉候哉之旨、四日に土田宗助ゟ頼候處、隨分御貸申候。私方に有之候品は、何成共御貸可申旨申聞候。

出座は奥村助右衛門

九月七日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事拙筆〕

九月七日

一、晝九時過、大膳同道に而學校ゟ出座、御家老中は中川、若年寄式部も引繼被出。則八時前御馬上也御出、明倫堂ゟ被爲入、無程講書初り、木下仁平講之。御聽聞畢而經武館ゟ被爲入、八半時御用番將之佐も被出、武藤李兵衛方居合等、島澤儀左衛門方槍術稽古御覽、夕七時過御戻り被遊候。

九月七日。藩の財政逼迫するを以て嚴に諸向の經費を緊縮すべきことを令す。

〔成瀨正敦日記〕

九月七日

一、左之書取御勝手方播磨守殿大村迄被相渡、左之役々へも申談候樣被仰聞候由。

御近習頭　御能方　御膳奉行　奥御納戸奉行　御茶堂方　御右筆　御書物奉行　南御土藏奉行　金山方

御勝手御運方御逼迫至極に付、其以來格外御省略、種々御仕法も被仰付候得共、近年不時御物入等打湊、悉皆御調達を以御辨用に付、當時御手繰方等必支与御指支に相成候。然處江戸表等色々無御據過分之御入用も相向候處、被成方も無之、當盆前諸向渡り方等、幷御調達銀御返濟も指支、一統渡り方も御指押に可相成所、左候而は御調達等も出來兼候付、誠に無理成當座御調達を以漸御辨じに相成候付、年々以御借財相嵩候。右之通實に御逼迫至極之御勝手振に候處、其時々御調達も出來御辨用に相成候事故、諸向においては御勝手も御取直之樣にも存込候哉、其已來毎度御省略之儀被仰出も有之候得共、近くは惣躰相弛申躰に而、いつとなく御入用多に相成、願方等茂追々致增長候。此儘にては必至与御指詰り之處迄可被爲至候條、御平生向等御入增無之、且不時御入用も實以御打捨置難被成品は不及是非、其他は一圓御指省に相成候樣、自・他國共御省略之筋相弛不申樣相心得、定・不時御入用精誠を盡相減候樣、厚心懸可遂詮議候事。

丙午九月

九月十三日。小川群吾郎等をして江戸浪人松下健作に就き西洋流火術を學ばしむ。

〔成瀨正敦日記〕

九月十三日

一、江戸表より浪人松下健作と申者、先日より此表へ罷越、將之佐殿用向も有之逗留いたし罷在候。右は水野越前守殿御家來松下壽水与申者之せがれに而、西洋流火術者に而功者なる者の由。依而小川家之人々入門いたし、委く承り候はゞ、火術彌委く相成可宜与之御内意に而、先右御内意之趣内々小川群吾郎呼立申聞、存底相尋候所、聊存寄も無御座、右樣被仰付候へば別而難有儀与申聞候に付、猶又御奉行へ申談、健作手前内々爲承合候所、未熟至極には候へ共、入門等仕度与申人々も御座候へば、尤相傳可仕与申居候由に付、其段委曲申上、今日左之兩人御次へ呼立、左之通申談候。且健作方へ罷越候儀等は、猶更町奉行へ相達引合候樣等申談候事。大野奉

近年西洋流火術行はれ候躰に候處、御家には右火術傳も無之に付、各ゟ附屬可被仰付思召候。然所此頃江戸浪人松下健作与申者、御當地逗留罷在候由に而、右火術相應相心得罷在候躰候問、此者ゟ便り、自分に入門之心得を以、全く相傳を受候樣に与之御内意に候事。

小川七郎左衞門

〔溫敬公記史料〕

九月十三日。命小川定位・小川忠富。使學西洋火術。

九月十四日。東本願寺、使者を前田齊泰等に遣はして末寺の竣成を謝せしむ。

〔御家老方等諸事留帳〕

九月十四日

一、東本願寺より今度末寺上棟に付御國恩爲御挨拶使僧被下、相公樣ゟ腰屏風・晒布一箱か・御菓子一箱、筑前守樣ゟ晒布五疋・扇子一箱、御家老・若年寄ゟ晒布三疋・扇子一箱、寺社奉行・御算用場奉行・御郡奉行等先々準御贈物有之樣子。右拜受有之に付、當十六日・十七日・十八日之内に宅々ゟ御使僧相勤、御贈物持參之由、今日月番より演述有之。

九月十七日。前田齊泰、青山將監が鑄造せしめたる大砲を覽る。

〔近敦日記〕

九月十七日

一、青山將監家來齋藤三九郎製造いたし候モルチル等、西洋流之大筒二挺十貫目玉と三貫目玉也。洪水軒より被入御覽候付、今日割場人懸申遣取寄、御庭先御庭へ御手廻りに而爲廻候事。

十月二日。前田齊泰能を演ず。

〔官事拙筆〕

十月二日

一、今日は御能拜見に付、朝五時過登城、少前拜見所ゟ廻り候樣申來候由也。追付雄二郎・遠江守父子・美作守も被出、追々拜見處ゟ罷出候。前々之通御緣側也。後〃には御近習勤仕之人々子供も拜見。向側、詰合諸頭等・執筆共も拜見被仰付。井筒御能相濟、彼是九半時過一先御中入之事。

一、晝八半時頃重而相始り、何れも拜見右同樣。彼是夜五時過相濟候事。

御番組左之通。

大社御　八島暦　井筒御

正尊宮門　春日龍神　基五郎殿　祝言伏見　豐之丞殿

八幡前　釣狐　弓矢

十月八日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

十月八日

一、例刻出席、今朝は瀧之間經書講日に而御聽聞も有之。助教新井周藏講之。四時前相濟候旨。內記・式部聽聞被出候由。

十月十三日。前田齊泰、諸士の風俗に關して親翰を與ふ。

〔官事拙筆〕

十月十三日

一、例刻出席、晝四時過御用之間ゟ被召候に付罷出候。御親翰二通被渡下。一通之分は諸士風俗等之儀に付被仰出候趣に而、且御意は、金龍院樣御代以來段々被仰出之趣も有之候處、兎角次第に等閑に相成候故、今度又々被仰出候間、一統ゟ可申渡。今一通之分は猶更遂詮議可申上旨に而御渡、御家中收納米拂過等之儀に付御親翰也。右奉拜戴、難有思召御尤之御儀奉存候。猶更僉議仕、自跡可申上及御請、懐中仕退座、各ゟ拜戴に指出、拜寫并書立も爲致候事。

〔早川氏藏文書〕

諸士風俗之儀に付、先年金龍院樣段々被仰出之趣有之候處、不被爲遂候に付、右御主意致貫通候樣被成度、其以來每度被仰出、行狀儉約等之儀に付而も追々被仰出之儀も有之。其砌少は志氣も相立候躰之所、無程流れ候儀者、何茂存込薄き故に候哉。且久々御借知も被仰付置候得共、臨時御入用も指湊、乍御心外于今御借知被返下候樣之御場合ゟも至兼、何も可爲難儀与御推察被遊候得共、不被爲得止事被仰付候事に候。諸士困窮之樣子も難被默止、小身等之人々不被行屆御取扱之儀も有之候得共、中には勝手不仕抹之人々者、不筋之族も有之躰に被聞召。是等は御借知全被返下候者、右樣之風俗は相改可申哉に候へ共、前文之通無是非被仰付候事に候へ者、是等之處致會得、是迄之習俗を離れ、聊も廉恥之志相立、少宛成共風俗立直り候樣被遊度御事に候。將又文武稽古も追々被爲相進度与、御仕向方も被仰付候得共、兎角年若之人々曁無息之輩之內にも志薄、惰弱之風俗も有之躰、父兄之敎諭も等閑故に候。何も前文之次第致會得、豫而も被仰出候通、他を不見合、各志を相勵候樣有之度儀と被思召候。畢竟久々御煩被爲在、時々之御敎諭も不被爲行屆故与、今度又々被仰出候。此後

油斷之輩は、品に寄不被得止事、被加御嚴制候場ゟ至候而者、御心外之御事に候條、頭・支配人得与相心得、一旦之事に不相成樣念頃に可申諭候。於各も僉議有之、夫々可被申渡候事。

兩手合は盗賊改方及び金澤町奉行配下の足輕

御別紙

一、近來諸士勝手難澁に付、中には不筋之調達方も有之、收納米算違等にも候哉、拂過之人々茂有之體に候處、猶豫之內表向不相聞濟候由に候得共、下々に而は其樣子も相聞可申、是等も折々耳立、誠に士氣之變敗嘆息之至に候。

一、諸士家內暨下々衣類等之儀、先達而申渡有之、不心得之者は廻り方之者見咎候筈に而、月々達聽候處、近くは見咎候者茂薄く候。追々諸士家內を始、一統麁服に相改り候儀に候哉。改方等兩手合名目而已之樣に相成候而は如何に候。猶是等僉議之事。

一、女出合宿之儀、前々令禁止候處、人氣遊惰に流れ、右體之場所兎角不相止體に而、事に寄り折々は達聽候品も有之候。此儀に付而は、町奉行ゟ申聞候品も候條、尙更各においても取締方僉議之事。

一、殺生方增長無之樣、兼而申渡候趣に而、年若之人々勤仕之餘暇、暨無息之人々抔稽古之暇日に岩乘之試も可有之候得共、萬事を抛ち獲物を貪り候樣之風俗は不可然候。別而重役相勤候人々者、急度心得も可有之事に候。

右等之箇條僉議可有之事。

右十月年寄中ゟ御渡。

十月十三日。女出合宿の禁止を勵行すべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

十月十三日

一、左之通被仰出候付、執筆へ書取爲調、町奉行水原清五郎へ申談。

女出合之儀は前々御停止候處、右樣之場所兎角不相止躰、事に寄折々は御耳立候儀も有之候條、取締有之、紛敷渡世方之者は、相應之生業に爲改候樣、可遂僉議旨被仰出候事。

十月十五日。前田齊泰、金澤郊外大豆田口に放鷹を行ふ。

〔諸事要用雜記〕

十月十五日

一、今日九時之御供揃に而、御鷹野御出之儀、昨日被仰出候。

一、今日御子樣方御同道之儀被仰出候由之事。

一、九時過御出、大豆田口より御鷹野被遊、宮腰口より夜六半時御戻り被遊候事。

本年七月九日の條參照

十月十九日。前田齊泰、鳳至郡中居鑄物師に製造せしめたる大筒を觀る。

〔諸事要用雜記〕

十月廿日

一、中居に而出來之一貫目大筒出來、昨日御家老方より入御覽、於御居間先御覽被遊候。目形七・八百貫目之由也。

十月二十日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

十月二十日

一、今日九半時御供揃に而、兩學校御出被仰出置、則八時前御出被遊候事。

十月廿四日。前田齊泰能を演ず。

〔官事拙筆〕

十月廿四日

一、今日御能拜見被仰付候に付、朝五時前出席、各も追々同斷、則御禮之趣被申聞候に付、以御近習頭御用番より引受申上。且御家老中等御禮之趣、主付內記より被申聞、是又同斷。青山は腰痛難儀に而不被罷出事。

一、朝五半時前御能相始り候に付、如例拜見所ゟ相廻り候。御表之方拜見人は御廣式頭・御作事奉行・御普請奉行・割場奉行等之躰。詰合組頭等は拜見無之。且吉益北洲於同所拜見被仰付候。將又今日執筆共も拜見不被仰付御樣子に付、諸向拜見不被仰付候節も相願候へば拜見被仰付候例も候由に而、堀學之丞等何れも相願度旨御用番ゟ申聞候に付、各ゟも示談之上、例も有之故御用部屋ゟ於別席、不苦儀候はゞ拜見被仰付候樣仕度旨申述置候處、追付以執筆、今日は御間狹にも候間、奥之間執筆迄拜見可被仰付被仰出候旨に付、其段執筆共ゟ申談候。仍之中之間執筆共は、晝後御用濟候上、例も有之旨故爲引取候。右御能二番相濟、一先御中入之事。

一、晝八時過重而御能相始り、右同斷何れも拜見、彼是暮六時頃相濟候事。

御番組左之通り。

調伏曾我　御　鉢木　基五郎殿　住吉詣　權之進

張良宮門海人　御　附祝言

鶯泣尼　鬼之繼子

十月。能美郡に於ける百姓の風儀に就いて諭示す。

〔郡方御觸〕

能美郡村々人氣次第に惡敷相成、我察振廻間々有之体。或者村々休日之儀、若者共亦者奉公人抔より、不時に村役人江申達、定之外休日いたし、村役人より彼是申入候得者、後日仇をいたし、既に去年德橋組中村之者共、右体之儀在之。且村方若き者共等不能了簡儀在之候得者、申合除け者にいたし、中直りには酒抔爲振舞、不時成費も在之。則板津組長崎村之者共、右様之儀有之に付、兩村共其節夫々詮議之上、嚴重咎方茂申付候儀、面々承知之通に候。尤右兩村にも不限、心得違之者共有之哉に粗相聞え候。ヶ様之人氣押移、追々致增長候而者、先以御縮方難相立に付、無據嚴重之咎方も可申付場に至り、さすれば人々難儀之筋に相成候儀、誠に氣之毒成事に候。因茲今度改而心得方左に申渡候。

一、休日之儀、前々より村々に而定有之儀に候間、改而組裁許江爲書出置、右之外不時休日堅不相成。若何与歟謂有之休日いたし度儀有之候はゞ、村役人・十人頭・長百姓相談、納得之上可致休日候。若き者共等願に寄、休日一圓不相成候事。

一、村々に而除け者にいたし候儀、先以在之間敷儀。殊更中直りに酒等爲振舞候儀抔、甚不埒之至に候。假令年忌・法事・祝儀たりとも、身分不相應之振廻等堅不相成候事。

一、村々に而酒小賣いたし候儀不相成候。其内宿立或者往來筋稼所に而、酒小賣不致而難成向者、小賣人名前爲書出置、酒計少々宛爲致小賣可申候。中に者煮賣体之儀いたし候者も有之哉に相聞得候間、左様之儀一圓不相成。右宿立等之外酒小賣堅不相成候。若心得違之者於有之者、急度咎方可申付候條、兼々廻り藤内共見廻方可申付候事。

右之通得其意、夫々嚴重可申渡候。畢竟是迄其許中取縮方不行屆哉、第一村役人・長百姓共取縮方等閑故与相聞得候。萬一以後若き者共等不埒之申分等いたし、外村々人氣にも指障候程之儀有之候得者、時宜により其村一統過怠申付候儀茂可有之候。左候得者一村之難儀与相成事に候間、村役人共長百姓に而急度相心得、若き者共等不所存之儀有之候はゞ、常に無油斷申諭、惣而一村之人氣柔和に相成候之様、勿論耕作稼無怠出精いたし候様心懸可申候。斯申渡候上にも不心得之者於有之者、速に可申出、急度咎方可申付候條、是等之趣譯而嚴重申渡、村役人共請書取立、而々奥書を以可指出候、以上。

午　十　月

加　州　御　郡　奉　行

改　作　奉　行

能美郡十村中

十一月五日。越前永平寺開基波多野三左衞門家傳の一粒金賣弘の請を許す。

〔毎日帳書拔〕

十一月五日

一、越前永平寺開基波多野三左衛門家傳之一粒金、御領國中爲賣弘、波多野文二郎与申者致順廻度旨願出候段、永平寺より申來。僉議之上往還筋宿々幷町立之ヶ所致順廻候儀差支不申、其餘里中村々之儀は止宿方等差支候旨に付、往還筋宿々並町立ヶ所迄承屆候段可申渡旨、伺之通被仰出事。

十一月七日。前田齊泰、來年三月中に參覲を命ぜられたることを告ぐ。

〔御家老方等諸事留帳〕

十一月七日

一、來春御參勤御時節御伺之處、來三月中御參勤可被成旨御老中連名御奉書寫到來、拜見被仰付、各列座如例致拜見候事。

但、御禮月番引請被申上候事。右若年寄ゟは別に拜見之事。

十一月八日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

十一月八日

一、例刻出席、月次瀧之間經書講釋御聽聞中に付、直樣同處ゟ伺公、追付內記も被出候。追

付相濟被爲入、則引取候事。

十一月十九日。前田齊泰學校に臨む。

〔諸事要用雜記〕

十一月十九日

一、今日九半時之御供揃に而、兩學校御出被仰出、則八時前御案內申上り御出被遊候。入學生會讀・諸組會讀數席有之、於御上段御聽聞。暫有之堂中へ被爲入御聽聞。其內林六左衛門方稽古不差支旨申上り、御上段へ被爲入、夫より經武館へ被爲入、林六左衛門方出情人御覽。相濟、平稽古御覽。其內馬術不差支段申上り、近藤□左衛門方代師範片山久右衛門方稽古乘馬不差支段申上り、夫々全御覽、相濟御戻り七時過之事。

但、出情人へ御意之儀御主付へ達。

十一月廿一日。家中の借知一部を本年限り免除することを告ぐ。

〔御在國若年寄方御用留〕

十一月廿一日

御上御難澁に有之借知銀被仰付置候御家中、一統難澁之段聞召。依之御借知之內割合之通一作被下返候條、猶更儉約相心得、勝手取續候樣にと御趣意之旨、月番座に而書立被相渡候事。

御勝手向連々御難澁に付、追々增御借知等被仰置、何茂可爲難澁儀に付、被返下度思召之處、近年打續御物入、去年以來茂不時成御入用共指添、彌增御手繰方六ヶ敷、不容易御勝手振に而、何分不被爲行屆候。乍然御家中難澁之樣子茂被聞召、深御心痛被爲在、格別之思召を以、御借知幷役料知等御借上之內、當年茂一作別紙割合之通被返下候旨被仰出候條、猶更人々手前遂儉約、勝手取續之儀心懸肝要に候。

右之趣被得其意、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十一月　　本多播磨守

御借知等一作被返下割合

一、二百石迄　　全
一、二百十石より二百九十九石迄　　六歩
一、三百石　　四歩半
一、三百十石より四百石迄　　四歩
一、四百十石より九百九十九石迄　　三ヶ一
一、千石より二千九百九十石迄　　四ヶ一
一、三千石より九千九百石迄　　五ヶ一
一、一萬石以上　　六ヶ一

一、御切米等之分茂右割合を以被返下。

一、役料知等之分自分知七百九十九石以下全、八百石以上は是迄御借上之半高當り被返下。

一、平士被下足輕之分茂被返下。

但、頭分手替足輕・被下足輕等之儀は是迄之通。

一、逼塞・遠慮等被仰付置候者不被返下候事。

十一月廿四日。江戸浪人松下健作將に歸國せんとするを以てその待遇を議せしむ。

〔諸事要用雜記〕

十一月廿六日

一、當廿四日御用番ゟ左之通被仰出。

江戸浪人松下健作与申者、先達より此表ゟ參り居、西洋流炮術聞えも有之に付、小川兩家弟子入被仰付候。然處不遠一先罷歸、來春中又々罷越候筈に候。夫々右兩家へ傳授も仕候上は、何と歟御合力、曁御館入等に而も不被仰付而者相成間敷哉。猶更健作身元之儀被承糺候而、

右等之趣僉議有之候樣思召候。且右弟子入に付、西洋流之筒も二・三挺被仰付候筈に候。右樣浪人ゟ筒被仰付候儀も、御差支無之譯に候哉。猶更是等之處も、聞番僉議被申上候樣被仰出候。

十二月朔日。江戸近海に異國船渡來の際の臨時警衛は小將頭の一隊に之を命ずべきことを告ぐ。

〔御親翰帳之内書拔〕

十一月晦日

江戸近海異國船渡來之節、臨時警衛之儀豫而被仰渡有之に付、是以後在府中被仰渡次第、詰合之小將頭一手合、先手物頭貳人・聞番一人・使番一人指副指向可申候。且右手合ゟ與力貳人・歩者貳人相渡可申候條、兼而心得方夫々可被申渡置候。委曲之儀は小將頭へ直に可申聞候。先手物頭等ゟは、小將頭可示合旨も可被申渡候事。

十一月晦日

〔諸事要用雜記〕

十二月三日

一、江戸近海異國船渡來之節御人數被差向候趣、當朔日御小將頭・御先手・御使番ゟ、夫々於表向被仰渡有之候事。

一、右に付江戸表しらべ方御用意之御品壹卷、御内用方より指上、御家老ゟ御渡、左之通今日申渡。

於江戸表近海異國船渡來之節は、被仰渡次第御人數被差向候に付、御小將頭へ被仰渡候。

右に付御武器御用意方、別紙一卷御渡被遊候。彼地御貯用之品相調理られ、御不足之分來春江戸表へ被差遣候條、夫々被申渡之樣被仰出。

内記殿へ達す。

御武器御用意可被仰渡置分

一、御　弓　十五張

但、小道具共

一、征　矢　三千筋

但、一張二百筋宛

一、矢　箱　三　荷

一、御鐵炮　四十挺

但、小道具共

一、玉　藥　八千放分
但、玉目一兩一挺二百放宛
一、玉　箱　五　荷
一、長柄鑓　拾五本
但、笛卷十段鞘折形
一、長柄持番刀　二十腰
一、貝大鼓　一　組
一、侍具足　二十領
但、與力二人ゟ御渡其餘御用意物
一、御歩ウルミ朱具足　二　領
但、貝・太鼓御歩ゟ御渡
一、足輕革具足　百　領
但、六十六領御渡物其餘御用意物
一、弓足輕指物シナヘ絹　三十四枚
内　小頭黑に白筋違二筋　二　枚

平　黑に白筋違二筋　三十二枚
一、鐵炮足輕指物シナヘ絹　九十二枚
内　小頭赤に白筋　二筋　四　枚
平　赤に白筋違二筋　八十八枚
一、割場附小者羽織笠　四十三
但、矢玉箱持・長柄持・太鼓負ゟ御渡之分
一、御貸馬具　二十四分
但、與力二人ゟ御貸渡、其餘馬持以下御貸渡御用意物
一、割場奉行ヘ左之通書取を以て別紙一卷御渡、昨日申渡之筈。

割場奉行ゟ

御在府中江戸近海異國船渡來之節、警衛被仰渡次第、詰合之御小將頭等被差向候筈に付、右手合ゟ御渡候。足輕・小者等別紙之通兼而相心得、午去臨時詰合之內を以相辨候樣被仰出候事。

割場奉行ゟ可被仰渡人馬高

一、御弓足輕　十八人

小頭　二人
平　十六人
一、御鐵炮足輕　四十八人
小頭　四人
平　四十四人
一、割場附小者　四十三人
矢玉箱持　二十一人
長柄持　二十人
太鼓負　二人
一、御貸馬　二十匹
右於江戸、臨時御小將頭斷次第可相渡候。

十二月四日。徳川家慶が前田齊泰の寒中を問はしめたる奉書金澤に達す。

〔官事抽筆〕

十二月四日

一、寒氣御尋宿繼御奉書、今曉到來之由に而、則御用部屋拜見被仰付候旨被仰出、如例年寄中等一列席、座を進み各拜見之。畢而御用番より若年寄迄も拜見被談、相濟、同席・御家老中一列に而、御奉書到來之恐悦、次に拜見之御禮、御用部屋相招、座上遠江守より被申述候事。

十二月五日。江戸近海に異國船渡來の際警衛の任に當るべき小將頭に豫め密令を交附す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月五日

一、江戸近海異國船渡來之節、警衛被仰渡、御小將頭等一手合被指出候儀に付、御小將頭中へ御渡物箱一つ御直封、外御親翰一箱、今日以織人飯尾吉太夫へ御渡之事。

〔諸事要用雜記〕

十二月五日

一、御小將頭へ、江戸近海異國船渡來之節臨時防禦之儀付、御親翰一箱幷御渡之物一箱、今日當席を以御渡、飯尾吉太夫へ相渡。

今般申渡候在府中江戸近海手當方、其方棟梁之儀に候條、臨時人數可指出候節は、先手物頭兩人・聞番一人・使番一人指副候筈に申渡置候間、萬端可申談候。尙指向候人數書一卷並備之圖一枚相渡置候。武具之分は在江戸之表納戸奉行、人數・貸馬之儀は割場奉行迄、豫而

其心得申渡置候條、臨時相達可請取候、以上。

月　日　　小將頭中

在府中江戸近海手當方人數積り

一、小將頭　一人
一、大小將番頭　一人
一、大小將横目　一人
一、大小將　十八人
内　番頭代　一人
　長柄奉行　一人
一、先手物頭　二人
一、聞番　一人
一、使番　一人
一、與力　二人
但乘使役

一、歩　二人
但、貝・太鼓指副
一、弓足輕　十八人
内　小頭　二人
　手替　一人
一、鐵炮足輕　四十八人
内　小頭　四人
　手替　四人
一、矢箱持小者　六人
一、玉箱持小者　十五人
一、長柄持小者　二十人
内　小頭　二人
　手替　三人
一、太鼓負　二人
以上

一、組頭・物頭自分目印鑓爲持可申事。
一、家來之分詰合候人數を以て可致出立事。
一、若黨は革具足可爲着用事。
一、小者は羽織・笠可爲着用事。
右在府中兼而其心得可申渡置事。

十二月九日。前田齊泰、幕府に屆出づべき系譜を發送せしむ。

〔成瀨正敦日記〕

十二月九日

一、公儀ゟ御指出之御系譜、當九日中御指出可被成旨之所、御しらべ方相後れ候付、暫御延引之儀御屆に相成居候所、此頃出來に付御帳等出來、御判は小之分御用ひ、御帳御印無之今日入御覽、江戸表聞番迄御渡、宜取計及御達候樣被仰出、其段今便早飛脚を以申遣す。

十二月十一日。前田慶寧の婚禮前に當り江戸邸御廣式向の費用を節すべきを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

十二月十一日

一、左之通御用番より被仰渡、御本宅頭へ申渡方は追而詮議申渡候筈之事。
御勝手向御難澁に付、御次向等御儉約方主付各內被仰付置候處、去々年御住居向格別嚴敷御省略に付、御內輪向御省略方不行屆樣之儀有之候而は如何に付、於江戸表御次向幷御廣式向御省略之儀被仰出候趣有之。其節申渡置候通に候。然處來年筑前守樣御婚禮之上は、江戸表御廣式向御廉多に茂相成可申儀。其砌御嵩高に相成候得ば、押移御定例之樣に相成、其節に到候而は品に寄容易に御改被成兼候樣之儀も可有之候。依之只今より萬端心付、御仕來之儀も成丈御事輕に相成候樣取計、其御振合を持込候而、親姫樣御引移之上茂物事御嵩高に不相成樣、各油斷なく被相心得、御廣式頭ゟも申談精誠可有僉議候。此段可申談旨被仰出候事。

十二月二十日。金澤茶屋町の名稱を改む。

〔兩茶屋町一件〕

是迄茶屋町上之通	愛宕一番町		
同	中之通	同	二番町
同	下之通	同	三番町

右之通今般町名相改候條、此段可被申渡候事。

十二月廿一日。前田慶寧、齊泰夫人を招請す。

〔恭敏公記史料〕

十二月廿一日。招請景德夫人于屬宅。應夫人命使陸原大次郎講論語孟武伯問孝以下三章。夫人垂簾聽之。

十二月廿二日。賭の諸勝負禁止の前令を勵行せしむ。

〔小木貞正献本〕

かけの諸勝負者御制禁に候處、心得違之者も有之、且正月者勝手向等に而小兒抔之遊事与名付、博奕に似寄之慰事不苦儀之樣に存候族茂有之躰相聞候に付、寛政元年委細被仰渡置候通、かけもの仕、勝負を以慰与いたし候儀者、御停止之事に候條、猶更無違失急度可申渡旨被仰出候事。

右之趣被得其意、同役中傳達、組・支配不相洩樣可被申渡候、以上。

十二月廿二日　本多播磨守

志村平之丞殿

十二月廿三日。明倫堂教授廣瀨順九郎、前田齊泰の子利義及び利行の名乘を撰進す。

〔成瀨正敦日記〕

十二月廿三日

一、基五郎殿・豐之丞殿御名乘、來春被進候付、廣瀨順九郎明倫堂教授に考被仰付候付、先日申談置候所、此間二三通り充考指出候。相伺候上、左之分御治定に付、則今日折紙に調、順九郎より指上候事。

基五郎殿　義（よし）

豐之丞殿　行（ゆき）

十二月廿四日。諸鳥の落羽を弓矢奉行に差出すべきことを命ず。

〔郡方御觸〕

諸鳥落羽拾取、御弓矢奉行に指出方等之儀に付、別紙兩通御算用場より相渡候に付、寫相越之候條、得其意、以後之儀嚴重申渡、其許中於手前無油斷取立可指出候。先々早々相廻、從落着可相返候、以上。

午十二月廿四日　大嶋五郎右衞門

能州四郡十村中

寶暦九年御類燒後、御矢御用に可相成諸鳥落羽拾取指出候樣、御郡方等江申渡置候處、新川郡迄每歲少々宛拾羽指出候得共、其餘御郡等より者一切不指出に付、鴇羽等甚拂底に而御用支に相成候体。其上近年者鴇丸羽肉付之儘に而、所々致賣買候体相聞候に付、御弓矢奉行より御家老中江相達、御紙面被相渡候に付、寫相達候。御郡方等より不指出儀者、麁略に相心得候体に相聞候條、以來者諸郡等共一統無油斷、各手合江取立、御弓矢奉行江被引渡、其段當場江も可被申聞候。且又右体御用支にも至候條、肉付丸羽自分に不致賣買、當町魚問屋江指出候樣、急度可被申渡候。以後等閑之族等於有之者、嚴重咎申付候條、此段譯而可被申渡候、以上。

十二月十八日　　御算用場

高澤平十郎殿
大嶋五郎右衞門殿

寶暦九年御類燒後、御郡方幷遠所町方江、諸鳥落羽拾上候得者、指出在之候樣被仰渡御座候處、新川郡迄者拾羽少々宛每歲指出候得共、近年是亦指出方無御座、其外御郡方等都而指出不申に付、先年より每度御達申上置候通に御座候。文化五年矢天井御用之御矢出來被仰付候砌茂、前段之趣に而、黑丹衣等甚拂底至極に御座候に付、格別御詮議御座候而、以來之儀茂被仰渡御座候而、御郡方幷遠所町方江嚴重相心得、指出候樣御達申上置候處、則被仰渡御座候得共、諸向より指出方無御座、黑丹衣・鴇羽等甚拂底至極に御座候而、御用支に相成申候。其上中興者鴇丸羽肉付之儘に而、所々江指出賣買仕候体に相聞申候。ヶ樣之儀御座候而者、彌御用羽拂底に相成申候間、以來相對賣買不仕、當所魚問屋江指出候樣嚴重被仰渡、御弓矢所江指出候樣仕度御座候。左候得者、尾羽善惡により御仕切銀之內を以代銀相渡可申候。兎角遠所町方等御縮方茂相立不申候。相對賣買仕候黑丹衣・鴇羽等之分者、如何共御縮方御達申上候手段無御座、何れ遠所出役所において嚴重詮議御座候而、當所魚問屋迄指出方御座候樣被仰渡御座候樣仕度御座候。暨當所魚問屋抔に者、少々宛所持仕候者も有之体に候得共、魚問屋江指出不申哉、自ら御用羽集兼、必至与御用支に相成候間、魚肝煎等江嚴重申渡候而指出候樣、町奉行幷御郡奉行中江嚴重被仰渡御座候樣仕度奉存候。此段御達申上候、以上。

午十二月　　木村九郎等四人
今枝內記樣等七人

十二月。家中の人々の道中に持參すべき荷物の重量を限定す。

〔雜事日記〕

御横目江

大御目付は幕吏のなり

御家中之人々道中往來持參之諸荷物貫目之儀に付、天保十四年大御目付衆より御書付相渡之節、一統申渡置候通に候處、今以過貫目荷物有之哉に相聞候條、以來別紙貫目付寫之通違失無之樣可相心得事。

右之趣被得其意一統可被相觸候事。

十　二　月　　長將之佐

覺

一、駄荷本馬　三十六貫目小付共、外に四貫目用捨。
但、四箇附に而過目に相成候者輕尻二疋、又は小付に而過目に相成候者人足一人相立可申。
一、乘本馬　二十貫目小付共、外に四貫目用捨。
但、過目相成候者人足一人相立可申候事。
一、荷輕尻　十八貫小付共、外四貫目用捨。
但、過目相成候者本馬に相成可申事。
一、乘輕尻　五貫目小付共、外三貫目用捨。
但、過目相成候者乘本馬に相成可申候事。
人足一人五貫目

右御定目形如斯候事。

午　十　二　月

十二月。前に遊廓たりし茶屋町・石坂町の家屋を改造すべきことを命ず。

〔兩茶屋町一件〕

茶屋町裁許肝煎　清左衞門
石坂町裁許肝煎　九兵衞

女出合宿之儀御停止之處、今以心得違之者有之體相聞。以來右樣之儀於相聞は、宿者勿論、集合居候男女名前承糺、夫々嚴重可申付候。且茶屋町・石坂町家建、嵩高成二階作り、或は身分不相應之間數所持之者、都而通例之家に相改可申候。尤見分方申渡置候條、早速取懸り、來春迄に不殘爲相改可申事。

弘化三年十二月

十二月。非人小屋の收容者六百三十人を算す。

〔溫敬公記史料〕

十二月。貧民在悲田院者六百三拾人。

弘化四年

正月朔日。前田齊泰、金澤城に於いて年頭の賀を受く。

〔官事拙筆〕

正月元日

一、朝六半時過登城、其外追々同斷。

一、晝四半時過列立宜御横目申聞候に付、以御近習頭申上、各御小書院江相廻り、御用番之外遠江守始瀧之間御敷居際江寄居候。無程御出、遠江守・播磨守・美作守・近江守・將之佐・助右衞門・雄二郎・内膳・大膳・内記・大學・庄兵衞・八郎右衞門・式部迄獨禮被爲受、相濟、御禮人相濟候旨御用番御敷居内江進入申上、夫より於御大廣間人持・頭分一統御禮被爲受、則御入、何れも引取候事。

一、鶴之御吸物御下御内々頂戴被仰付候旨、御膳奉行杉野貞之助席江出申聞候に付、各江も御用番より申談。御家老中等江は主附大學相招夫々被申談候樣、若年寄江も演述有之樣申述。且又同刻過御臺所奉行渡瀨七郎太夫よりも、御嘉例之通一統江御のし頂戴被仰付候旨、右同斷申述候に付、是又夫々同樣申談候事。

一、御熨斗等頂戴不指支旨に付、於席同席・御家老中列座、坊主給仕御三方出之、何れも順之通御のし頂戴之。相濟以御臺所奉行御禮申上候事。

一、引續き鶴之御吸物・御酒・御取肴鰯頂戴。右同斷相濟以御膳奉行御禮申上候事。

一、二番座御禮人列居宜旨、御横目申聞如例以御近習頭申上、晝九時過御出、御大廣間御下段に御着座。最前伺公等に而御禮不申上人持・頭分幷御大小將より坊主頭迄一統御禮。各前之通伺公相濟、被爲入候刻於御居間書院三之間筑前守樣御側小將等之御禮人も有之、伺公は無之。右人々退候以後於舟之間御表小將一統御禮、伺公遠江守。相濟被爲入候事。

正月二日。謠初を行ふ。

〔官事拙筆〕

正月二日

一、今夕御謠初之節、基五郎殿・豐之丞殿御同道に而御見物御出之御樣子、此段爲心得申達候旨、成瀨主税より以執筆申聞候事。

一、御謠初に付各八半時前より追々登城、万之助斷、近江守儀疝邪快旨に而今夕は登城有之候。且又大膳儀御盃頂戴無之故不及被出候へ共、御作法爲見受被出候儀は勝手次第之段、先達而奉達御聽、其通被仰出、申談有之候に付、則被出候に付、以御近習頭大膳儀御作法見受

度旨に而罷出居候旨申上置候事。

一、夕七時過御流頂戴人相揃候旨、御横目申聞候に付、寄置候様申談、則揃候旨等以御近習頭申上候。追付宜旨に付又々申上、各御大廣間ゟ相廻り候。則無程御出、近うと御意有之、御廣縁着座處より御敷居際御疊之上ゟ各進入列座。夫より遠江守・播磨守・美作守・近江守・將之佐・助右衛門・雄二郎・内記・大學・庄兵衛・八郎右衛門・式部迄御盃頂戴、御家老中等は返上無之。畢而役懸り人持青山將監等、物頭已上段々御流頂戴、御肴役美作守・助右衛門相勤。則相濟、御規式相濟候旨御意有之候に付、御規式首尾克相濟、恐悦奉存候。私共御盃頂戴、何れも御流れ被下難有仕合奉存候旨、座上遠江守申上、暮頃被爲入、各引取候。夫々御作法書之通替儀無之候事。

正月四日。打初・射初・乘初の儀を行ふ。

〔宮事抽筆〕

正月四日

一、今日御鐵炮御打初御規式首尾能相濟候旨。

一、晝九時前、御射初之人々相揃候旨申聞候に付、寄置候様申談、申上置、於御大廣間吉田家御射手一人充御覽被遊、被爲入何れも引取候事。

一、御巽風裁許林久太夫、森權太夫席ゟ出、御打初御規式首尾能相濟候旨申聞、交名中り附等差出候。依之前段御射初・御打初御祝儀被下物御目錄相渡候筈に付、御横目相招、其段申渡、檜垣之御間御縁側ゟ寄置候様申渡候處、追付寄置候旨に付、則於御縁側御横目差引左之人々一人充指出、拜領物被仰付候旨御用番申渡、御目錄御用人より渡之、御禮申聞退去之事。

御射手等　　吉田家

御巽風　　吉田才一郎　北村八太夫

國府清馬　高嶺八太夫

一、夕七時前御馬乘初相濟、御馬奉行奥村友左衛門、御馬方坂野忠兵衛席へ出、御規式相濟候旨申聞候に付、前段之通御横目へ申談寄置候上、於御縁側御用番申渡、御馬乘へ御目六御用人より渡之候儀等、右同斷之事。

御馬乘

高・桑五兵衛
明石磯五郎

正月十一日。前田慶寧疱瘡に罹る。

〔諸事要用雜記〕

正月廿二日

一、今日晝頃當十五日立不時早飛脚到來。

筑前守様十一日より御熱氣被爲在候處、十四日より御發物被爲在、十五日御疱瘡御治定被爲在、御筋合も宜、御輕痘に被爲在候由申來候事。

〔恭敏公記史料〕

正月十一日。公罹痘瘡。是日初熱。將軍經景德夫人貽紅縮緬製大達磨・大耳突及紅色懷囊。

正月十八日。將軍使奏者番稻垣安藝守問疾。右大將亦同。

正月十一・二・三日序熱。十四・五・六日出齊。十七・八日水膿。二十・二十一・二十二眞膿。

正月二十五日初浴。二十八日再浴。二月朔三浴。

二月十一日拂床。

正月廿三日。前田齊泰、瀧之間の講書を聽聞す。

〔官事拙筆〕

正月廿三日

一、例刻出席。今朝瀧之間經書講釋廣瀨順九郎講之。御聽聞も有之候由之事。

正月廿四日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事拙筆〕

正月廿四日

一、今晝九半時御供揃に而、明倫堂江被爲入候に付、御用番御家老中主附之外服紗小袖・上下に而、九時過退出學校江爲伺公被出候。則八時過御出、八半時過御還城之御様子之事。

〔諸事要用雜記〕

正月廿四日

一、今日明倫堂御出被仰出、晝八時前御案内に而追付御出、（御服御上下・御服紗也。）御先立候當席幷御近習頭等罷越、（有賀・大野罷越。）何茂上下着用、例之通於明倫堂御出向申候。追付御出、御上段江被爲入候上、宜段御主付より被申上、其段申上る。御襖明御下り被遊、御上段前御廊下之外に御敷氈初めより敷有之候處へ被爲入、暫之内當席御先立、御見臺御表小將持出上之。無程講師廣瀨順九郎、扣加藤甚左衛門、三綱領一章講じ、御聽聞被遊。相濟、御見臺引候上、直に御上段

是月は大壺なり

十一月は弘化三年

へ被爲入、御氈御近習勤仕[illegible]。無程講師御前へ罷出、大儀之旨御意、將之佐御取合申上退去、御襖建之、伺公等宜付、御直に御戻り被遊候事。

但、講師御意幷教官之人々聽聞之御禮、將之佐殿被申上、奥御取次へ申入候事。

正月晦日。德川家齊の七回忌法會を神護寺に執行す。

〔官事拙筆〕

十一月十二日

文恭院樣七回御忌御法事、來正月於神護寺御執行に付、御導師常照院々代海心院被仰付候段可申渡候。

一、右御法事に付、前々之通赦被仰付候に而可有御座候。死刑・拷問來正月朔日より御法事相濟候迄相止候樣、公事場奉行等江可申渡候。右近例公邊御法事之振を以奉伺候。

〔官事拙筆〕

正月晦日

一、今日於神護寺文恭院樣七回御忌御法事御執行。朝六時過のしめ・長上下着用御寺江罷越候。

一、辰之刻御法事相始り、五半時過相濟、何れも溜々江引取候事。

自分は奥村助右衛門榮通

一、夫より巳之刻御法事晝四時過相始り、右同斷、同半時過相濟候事。

一、夫より午之刻御法事餘程有之九時過相始り、右同斷、同半時過無御滯相濟候事。

一、追付御參詣御用意不差支旨に付、右之通御案內申上置候處、八時過御供廻り之案內、次に二御丸奥之口御出之見番に而各溜所迄出懸居候之處、次之見番不罷越候へ共御作法も聞えに候旨御横目申聞候に付、惣奉行始繪圖之通出處江罷出居候。御玄關階下左之方御法事奉行助右衛門、右之方院代海心院罷出、階下端若年寄八郎右衛門、其外〻右之方寺社奉行玄蕃罷出、年寄中等は階上夫々列居。無程御裝束にて御參詣、御白洲横に而御手水之上、夫より又御步行階上御上り、御法事殿敷居內に而鳥渡御拜、相濟御戻。其節階下に而院代江、今日は天氣相も宜、無御滯相濟御大慶被遊候旨御中座に而御意有之。御懇之御意之趣難有仕合奉存候旨、御法事奉行御取合申上候處、其次自分江も御法事無御滯相濟候、詰大儀与御意有之候に付、無御滯相濟恐悦奉存候。御懇之蒙御意難有仕合奉存候旨及御請。則御戻被遊、何れも引取候事。

二月朔日。前田齊泰の子利義・利行名乘を授けらる。

〔諸事要用雜記〕

二月朔日

一、今日基五郎殿等ゟ御實名被進候に付、御出之儀兼而被仰進置、御着、御入之上御都合伺之上、御鈴通申上、無程御表ゟ被爲入、奥之口より御溜へ被爲入、御出之趣御近習頭を以被仰上、御通之儀被仰進、御前御居間御上段へ御出、御手寄へ御實名折掛包之分二つ、一集に御小蓋にのせ上置。基五郎殿等御一集に御脇刺御取、二之間御敷居之外へ御出、直に御右之方御襖際へ御着座下もより三疊目二疊目。其時御實名被進候段御意、御一方づゝ御上段へ御上り、御實名書御直に被進、御頂戴御復座。豐之丞殿にも御同樣御復座之上、御熨斗三方配膳役持出、御二方樣へ指上、引候時目出与御意、難有思召旨御禮被仰上、御退去。御次に而被進候御名書御渡に付、御一方樣御名札指し、幷順九郎考指上候引書之處迄、小紙に調相添候而、御廣式頭へ相渡候事。

〔見聞袋群斗記〕

二月朔日

基五郎殿・豐之丞殿ゟ御實名被進る。基五郎殿には利義、豐之丞殿には利行と被進。

二月三日。百歳の老齡者に物を賜ふ。

〔溫敬公記史料〕

二月三日。賜年百歳者物。

二月九日。前田齊泰學校に臨む。

〔官事拙筆〕

三月九日

一、例刻出席、今晝九半時御供揃に而、學校ゟ御出被仰出候旨に而、伺公出順播州之處、欠席に付次順自分に付、供九時に揃候樣坊主ゟ申付置、則晝九半時前主附退出後、追付大膳同道退出、學校ゟ致出座候。出席中可書記儀無之候事。

一、晝九半時過則學校ゟ出座、御家老方に而庄兵衞、若年寄式部も被出候。稽古不差支御案內も每々之通有之、彼是八時過奥之口御出之御附人に而、主附初御式代階上等ゟ罷出居候。無程御出、階上に而將之佐ゟ御意有之。助右衞門等御廣間御敷居際伺公前に而も如例鳥渡御中座。夫より明倫堂御上段ゟ被爲入、各伺公處ゟ着座。追付稽古不差支旨主附より被申上、御襖明、無程御廣間中央ゟ御進み、諸組會讀御聽聞。何も其處ゟ罷出、御左之方筋違に着座伺公。追付經武館稽古不差支旨も被申上、無程御上段之處ゟ被爲入、御襖建、各經武館御通筋口ゟ每々之通着座罷在候事。

一、追付經武館ゟ被爲入、御跡より罷越、御上段横に例之通伺公。稽古不差支旨被申上、無程御襖明、飯尾誠次郎方劔術先出情人一人御覽。相濟、御襖建、重而申上り候上御襖明、常

稽古御覽も有之、彼是八半時過御歸館、伺公等最前之通。但暫庄兵衛被居殘候。都而伺公方等督學抔も同斷、何等替儀無之故荒增記之候。夫々相濟、追付夕七時前致歸宅候事。

二月十四日。前田齊廣夫人眞龍院還曆の祝賀を行ふ。

〔見聞袋群斗記〕

二月十四日。眞龍院樣御本卦之御祝。

〔諸事要用雜記〕

二月十五日

一、昨日眞龍院樣御本卦御祝に付、御入被遊候に付、當席三人共恐悦罷出、御附頭を以申上候事。

二月十七日。前田齊泰能を演じ、齊廣夫人眞龍院の還曆を祝す。

〔官事拙筆〕

二月十七日

一、今日御能拜見に付、朝五時過彼是五半時前拜見處江廻り候樣申來候に付、遠江守・美作守・助右衞門・雄二郎・內膳・大膳・御家老中等も拜見處江相廻り候。前々之通御緣側に而、後。には御近習勤仕之人々等子共も拜見、向側當番之人持・諸頭等執筆共も拜見被仰付。俊成忠則相濟、彼是九時頃に而一先御中入之事。

一、晝八時過重而相始り、何れも拜見右同斷、彼是六時前相濟候事。

御番組左之通

養老　惟進　俊成忠則　基五郎殿　松風露

道成寺　御宮門　鶴亀　猩々　豐之丞殿

松樗　財寶　福の神

但、今日之御能は眞龍院樣御本卦之御祝此間有之、右御祝御含之御能之由候事。

松之御殿は松の間と異なり

二月廿二日。前田齊泰の子利義・利行金澤城松之間に移る。

〔官事拙筆〕

二月廿二日

一、先達而松之間御普請御成就、今日より基五郎殿・豐之丞殿右御間江御引移被遊。且基五郎殿には御額に御角入も有之候に付、服紗小袖・上下着用、檜垣之間上屏風圍之處に而年寄中・大膳・御家老中等一列に而、基五郎殿御角入被爲濟候恐悦以御近習頭申上候處、追付以同人御喜悦被思召候旨御意之趣も有之候。且同時に松之御殿頭江も右同斷御祝詞眞龍院樣江申上、夫々座上遠江守より被申述候。右は松之御殿御間支に付呼立に成候事。

〔見聞袋群斗記〕

二月廿二日基五郎殿松之御間江御引移り御暮之樣被仰進、同日御額直し・御袖留御祝有之なり。御年御十五なり。豐之丞殿には御十三ゆゑ、御表御住居は不被仰進候へ共、强て御願に付御許容、二月廿二日御一集に松之御間江御引移りなり。

二月廿七日。德川家慶等使を遣はして前田慶寧の酒湯に浴するを祝す。

〔官事拙筆〕

三月五日

一、筑前守樣御疱瘡御順快御酒湯被爲引候旨等、前月廿七日不時立町飛脚早飛脚歩之分今日到來。則來狀を以御用番より演述も有之候。以上使御拜領物等有之候委曲申來。紙面之內荒增爲覺左に記之。

今廿七日筑前守樣御疱瘡御酒湯爲御祝儀、御兩殿樣江公方樣・右大將樣より上使有之段、內々御城坊主衆より申來。且又御本丸より上使若御年寄本庄安藝守殿、西御丸よりも若御年寄松平玄蕃頭殿御越之旨申來候段聞番申聞候に付、組頭・御用人・御横目江申聞、夫々不指支樣前々之通可相心得旨申渡候。

一、御殿揃刻限之儀、上使提灯引に而御出宅之御樣子に而、曉七時与申渡候。

啓之助は富山侯前田利友

一、御兩殿樣御名代之儀筑前守樣より啓之介樣江御賴之處、御承知に而御出被成候事。

一、安藝守殿朝六半時前、玄蕃頭殿五時前御越、御大書院江御通、筑前守樣御疱瘡御酒湯爲御祝儀、相公樣江御拜領物被仰付候旨、御兩方共御同樣御申述。時々御名代啓之介樣御拜聽、圖書江被仰聞候趣別紙に相調上之申候。筑前守樣江上意之趣も被仰聞候に付、竹田市三郎を以御同處樣江申上候。右相濟、御小書院江啓之介樣御誘引被成、御兩方共御料理は御斷、前田右近殿御招伴に而御菓子等出之。畢而啓之介樣御請被仰遊、安藝守殿五時前、玄蕃頭殿五半時頃御退出被成候。

右等之趣に付、御用番よりも御用有之候に付、今日不時立町飛脚早飛脚歩申渡申進候條可被達御聽候、以上。

二月廿七日　　前田圖書等兩人　判

横山遠江守樣

〔恭敏公史料〕

二月廿七日爲酒湯床拂賀。將軍使若年寄本庄安藝守。來賜縮緬五卷樽肴。右大將使若年寄松平玄蕃頭貽樽肴。右府夫人貽樽肴。

〔續德川實紀〕

二月廿七日

松平筑前守痘瘡酒湯によて、小老本庄安藝守して卷物五・一種一荷をおくらせられ、父加賀守に一種をおくらせらる。

三月六日。前田齊泰、慶寧の病癒えたるを祝し能を演ず。

〔御家老方等諸事留帳〕

三月六日

一、今日御能拜見に付五つ時前登城致候所、五つ時過御始り也。

一、献上物木具据御小書院江飾付、年寄中・江州之外皆御家老中・若年寄・洪水軒まで一列、御近習頭里見亥三郎を以御疱瘡御順症御肥立被遊、御酒湯も被爲引爲御祝儀上使有之恐悦、御酒湯祝に付献上物仕候趣遠州被述候事。

一、檜垣之御間に而御赤飯・御吸物・ぼら・御酒・御取肴各並居、洪水軒も同所頂戴、相濟御膳奉行を以御禮申上候事。

一、今日當番一統上下着用御能拜見被仰付、頭分以上恐悦御帳に付候由之事。

一、御能拜見之御禮松平加久丞を以申上候事。

一、御能御番組略左之通也。

玉之井　御　彌三右衛門　麻生幸三郎

鉢木　權之進　久左衛門　北條種萬藏

御中入

弱法師　御　全作　入間川八三郎

大江山　豐之丞殿　生藏　素袍落　長左衛門

雞龍田　宮門森之助　勝ぐり　九郎兵衛

輪藏　御甚助　附祝言

三月十二日。江戸浪人松下健作再び金澤に來る。

〔諸事要用雜記〕

三月十六日

一、松下健作當十二日金澤江參り、右者申遣候上出府之筈之處、如何と及察當候處、於彼地齋藤三九郎之兄とやら、三九郎御召抱に相成候に付松下にも不及抔申慣し、面目を失候儀に付、右張合に而出懸候由申聞候旨。依而筒被仰付方之事僉議之振申來、モルチイル・ホヲイ、

申來は前田齊泰の旅行中へなり

スル之二品三挺も被仰付可然、其餘は火矢方に而被仰付候事に可申談と申來。夫々内狀入御覽、僉議之通り可被仰付、御入用之儀御勝手方へ達有之樣夫々及返書。

三月十三日。前田齊泰、金澤を發して參覲の途に就く。

〔諸事要用雜記〕

三月十二日

覺

一、千八百六十七人　御當日御供人高
　内　六百四十八人　雇　者
二十九匹　御家中乘馬
百八十九人　宿繼人足
　但、宿定廿五人之外
百二十七匹　宿繼馬
　但、宿定廿五匹之外
右御發駕御當日御同宿之御供人馬高大綱如斯御座候、以上。

三月十日　富永左膳

〔官事拙筆〕　國澤小兵衛

三月十三日

一、今日御發駕に付、朝五時前服紗小袖・上下に而登城いたし候。各も同斷之事。

一、晝四半時前御供廻り之頃、追付同席初於御居間書院被召候旨に付、如例蔦之間御廊下に列座。無程加判之人々美作守外五人罷出候處、今日は天氣相も宜敷、追付留守中政事向無油斷与御意有之。益御機嫌能追付御發駕被遊恐悦奉存候。御意之趣奉畏候旨座上遠江守より被申上候處、重而何も無事与御意有之に付、御懇之蒙御意難有仕合奉存候旨右同斷被申上。畢而播磨守ゟは御城方之儀も御意、應被及御請、何れも退去。其次靱負・内膳・大膳一切、御家老中・若年寄・青山淇水軒一切、夫々被爲召御意有之退去、相濟暫席ゟ退座。此間に美作守ゟ各及暇乞候。追付御供宜旨申上り候由に付、何れも御式臺ゟ相廻り候。靱負・内膳・大膳は橋爪ゟ被罷出候事。

前田美守作は扈從なり

一、彼是晝九時前益御機嫌能御馬上に而御發駕被遊候。御式臺鏡板左内之方を頭に年寄中、御家老中等右之方、且又基五郎殿・豐之丞殿にも左之方鏡板ゟ御見送、同席前に御着座。其外階上等夫々列座人も有之。且又階下に而無事に与御意之趣も有之。座上遠江守應而被及御請

候。橋爪之方江御通過之比何れも引取候事。

〔諸事要用雜記〕

三月十三日

一、今日御發駕御供揃五時揃に付、同刻宅發足、罷出候上相揃。

一、御旅裝束に御召替、追付御居間書院江御出、眞龍院樣御附使者御直答、夫より年寄中等・式部被爲召、御意有之事。

一、右相濟、御子樣方御對顏、御のし被進、直に御奥へ御同道。御供宜段申上り、前に御案内申上御出被成、御先江表御式臺へ被爲入候事。

一、御供宜段申上、御奥より御出、御熨斗指上、九時前益御機嫌能御馬に而御發駕被遊。御城中御作法如前々。森下迄御馬、夫より御駕籠、俱利伽羅下坂埴生手前に而提灯付候。六つ三分石動御着被遊候事。

三月十四日

一、今朝五時過石動驛御發駕、例之通御見立、夫より宿建騎馬、暫歩行、無程降になる。福岡御小休御發駕、暫被爲入、御供人雨具になる。高岡御宿入之頃より追々晴る。四半時高岡御着被遊候事。

一、九時過瑞龍寺御參詣被遊、同半時過御戻り被遊候事。

一、今日古御城跡御巡見之時分、配膳役一人・御近習勤仕兩三人可被連、且有澤采女吉同人せがれ九八郎被召連旨に付而、夫々申談る。且山森罷出候に付直に召連候。右被召連候人々之儀御横目中へ申談る。且被召連候人々從者は、又々御本陣際へ罷出候節之通りに而、御城境御門外に何茂殘る。夫より美作守初草履取一人之事。

但、美作守殿は草履取一人之事、當席より申達す。

一、八半鎌御巡見御出被遊、七半鎌下御戻り被遊候事。

一、初め被爲入候節御馬上、御戻り御歩行、且町奉行御城跡御巡見中御先立致候。右前に御城番之足輕御先へ相立候。御先供は御巡見中御跡へ續參る。御駕籠・御馬も御跡より參り候得共、是は外に殘り候方宜と存候。且又御戻り御旅屋御園内御巡見被遊、夫より關野社内御覽被遊、拜殿等へも被爲入、直に御歩行に而御戻り候事。

三月十五日

一、今朝六時過御發駕、高岡町端に而御提灯引け、小杉等御小休、夕七半頃魚津江御着被遊候事。

一、於魚津引網被仰付、大鯛七・八枚外小魚餘程引上げ候。

一、右八枚之分二之丸へ三枚、松御殿へ二枚、御本宅へ三枚被進候儀被仰出、於御膳所盃申談、町奉行へ直に相渡候。松御殿・二之丸之分紙面二通、是又町奉行江相渡。金澤へは飛脚、江戸之分は十九日三度へ傳付と申渡。

一、引網何茂見物被仰付候。美作守も見物被仰付、被罷出候。御肴右之通に付、被下候分無之候事。

三月十六日

一、今朝六半時御供揃に而、同刻魚津驛御發駕被遊、所々御休、八時頃泊驛御着被遊候事。

三月十七日

一、今曉七時過御本陣江罷出る。且夜前境奉行迄御道中奉行より申遣、糸魚川川方御役人より昨日之紙面、此躰に而は今晩風雨等無之候はゞ川場御差支無之旨申來居候處、昨夕より之風雨に而者如何可有哉と境奉行迄尋遣置候處、猶更追々可及注進旨に而、其後七半時過、增水に及御渡船御差支、境川・青海川も水增御差支之旨に而、御近習頭中も各御本陣に相詰候處、右之通に候處、右躰に而者當驛に御逗留可被遊哉と御道中奉行より相伺、則伺之通被仰出、左之通旅宿觸有之。

姫川御差支に付、今日當驛に御逗留被遊候段被仰出候。

一、右に付今日晝旅籠代都而半拂之事。

一、御家中乘馬飼料代之分は用意に不及候。

右之趣早速御供人旅宿々々相觸可申候事。

三月十七日

三月十八日

一、糸魚川御役人江、御道中奉行より川方之事に付紙面を以申遣候處、右飛脚江只今從是可申遣与認置候由に而飛札指越、姫川追々減水に相成、今日御渡船御差支無之旨申來候事。

一、右之通に候處、山之下出役之者より注進申來、風立に成、親不知波高に而今日御通行御差支候段申來。

一、夕御膳後追付之御供揃に而、濱邊御巡見可被遊旨被仰出、御横目へ申談、御近習頭へも申談る。

一、八つ一分御歩行に而御出、當所町端御藏所御覽、右之内に備荒倉戸前爲開、御米積之處御覽被遊。夫より濱江御出、獵師引網之儀御郡奉行より申談置候由に而、則御目通に而引上。相濟、元之御道より七分過御戻り被遊候事。

三月十九日

一、今曉親不知又々波高之由注進有之候へ共、全く波とも不相聞、普請出來無之由。仍而六半時前泊驛御發駕被遊、御道中奉行御横目川場へ出候に付、御旅館取次同道御先參り、御差支之有無境迄御案内申上候筈に示合置候處、境へ右御旅館取次來參、追々引波に而御差支無之由境より之飛脚參り申聞、道普請も出來之由注進申聞候。依而境御立被遊、親不知へ被爲入候處、波も靜に成、御無難に御通行、駒返も御無難に而御通行。姫川二ヶ瀬に而舟一艘充甚難澁、其上川場に而甚之風烈に成、南風成候ゆゑ、波者次第に靜り、川は夕景少增水之躰に候。夜六半時能生へ御着被遊候事。

三月廿日

一、今朝六半時過能生驛御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時前高田驛へ御着被遊候事。

三月廿一日

一、今朝六時高田御發駕被遊、所々御小休等被遊、七つ時過柏原驛御着被遊候事。

三月廿二日

一、七半時過御旅館へ出、六時過柏原御發駕被遊、半道も行御提灯引け候。犀川・筑摩川無滯御越、益御機嫌能七時過矢代江御着之事。

三月廿三日

一、六時過矢代御發駕被遊、所々御休被遊、七半時小諸江御着被遊候事。

三月廿四日

一、今朝六時過御旅館江出、夜明に而追付御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時坂本江御着被遊候事。

一、夜四半時過餘程之地震に付、急速御旅館へ罷出候處、尤御目覺被爲入、則奉伺御機嫌候。美作守殿も罷出、被伺御機嫌候。御道中奉行初表向之人々も追々罷出、美作守殿へ迄伺御機嫌候由之事。

但、大分嚴敷、勿論覺不申地震也。坂本邊に而は六十七年來無之事と老人之咄之由。續而少さき分度々有之事。

三月廿五日

一、今朝五時御供揃に而、同刻過坂本御發駕被遊、御關所暨安中・高崎騎馬、所々御泊附之通御小休被遊、七時倉ヶ野へ御着被遊候事。

一、今日晩も地震之氣止不申、夜に入小雨に成る。

三月廿六日

一、今朝六半時過倉ヶ野御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時熊谷御泊江御着被遊候事。

三月廿七日

一、今朝六時御供揃に付、七半時御旅館へ出る。六時過熊谷御發駕被遊、所々御小休等被遊、七時頃浦和江御着被遊候事。

三月廿八日

一、今朝六時御供揃に而、御時計少繰上り居候哉、同刻過浦和驛御發駕被遊、巖寄に而提灯引、御下屋敷へも御立寄、同所より御馬に而四つ七分益御機嫌能、追分口御門より御着府被遊候事。

一、筑前守様六時御供揃に而、喬松丸殿にも御同様、爲御待受御下屋敷へ被爲入、御式臺江御出向、御同道に而御入、御近習番詰所邊に而御殘り、御溜へ被爲入、御着之御歡御近習頭を以被仰上、追付御二人様とも御通御對顔、御のし三方配膳役上下着用上之、爲御持之御菓子豫而御膳奉行へ申談置指上候付、御小將より上之。暫御間有之、何時に而も御戻り被成候様被仰進、御供宜付、御暇之上御二人様とも御戻り、御先江被爲入候事。

一、右御戻り之上御供相しらべ、御洗足等・御膳、相濟追付同所御發駕被遊候事。

一、四つ七分奥之口御式臺より御着被遊、筑前守様・喬松丸殿同所階上江被爲在、御見懸被遊階下江御下り御挨拶。夫より御先立大村、階上江眞龍院様御附中村治兵衛罷出、席前通、御居間四之間より三之間同所に姫君様御附使者久留孫太夫殿罷出被居、御先立より唱、只今到着之御意。夫より御稽古所通御入遊被候事。

三月廿三日。大聖寺侯前田利平、參覲の途金澤に着す。

〔官事抽筆〕

三月廿三日

一、前段之通備後守様昨夕御着、今朝六時過御供揃に而松任御立被成、御旅館（金浦屋次郎兵衛方）被爲入候筈之旨、昨晝爲聞合相知れ、且御着之上松之御殿御機嫌伺に御出、夫より兩御寺御參詣被成候旨に付、右御留守之處江罷出候得者御邪魔に有之間敷与、見番爲遣案内次第罷出候圖りに相定候。

一、罷越候上御旅館江御着之御様子、松之御殿江御出御道筋之儀も爲聞合、見番之者内膳方より被遣置候。然處四時過歟御旅館江御着之案内有之。松之御殿より兩御寺江御出之御道筋は、大手より新堂形横御通之旨之事。

〔御家老方等諸手扣〕

三月廿三日

一、備後守様今日御當所江御着、御旅館金浦屋也。御勝手方主附御用番に付御近習頭丹羽榮

等迄呈書、御機嫌相伺候事。

三月廿四日。前田齊泰、上野坂本に於いて地震に會す。

〔諸事要用雜記〕

四月朔日

一、前月廿四日御道中於坂本驛地震、信州邊大變に而、追々樣子相知候處、越後高田より此方所々損所有之、野尻・柏原・牟禮不殘潰家、善光寺過半燒失、死人千計も有之由。犀川之上山押込候哉、水干に相成候由。丹波嶋者家も五・六軒潰候由。併右川水干に相成候付、何時押出可申哉も難計と、各山ゟ駈上り候處、大地處々ひらき、四尺計も地落入候處も有之由。死失人も有之躰に候。追々注進之內、備後守樣廿二日立之御飛脚之者承り合候趣餘程委く候。何れ前代未聞之由に候事。

一、右に付交代人指留、並今日出候三度山道往來之儀伺有之事。

〔見聞袋群斗記〕

三月廿二日坂本驛御泊之處、夜半信州地大いに震ふ。先に諸臣交代にて罷歸る者有により、急に信州へ人をやり、扈從等之存歿問はしむる。此儀誰も不心付、思召にて急速人を被遣、公上州坂本驛御逗留、安否御聞き及び御發駕なり。御供人一統奉感稱と承るなり。

廿二日は廿四日の誤なり

〔毎日帳書抜〕

四月朔日

一、前月廿四日夜地震に而、信州筋等所々潰家等出來、山拔も有之、餘程之地震之躰。然處御參勤御道中柏原より御便後いまだ御便も無之、同日者坂本御泊之御日圖に付御樣子無心許、依而不時立日圖早飛脚步を以申遣可然と遂示談候事。

三月廿四日。木村采右衞門・永山平八等、越後中屋敷にて地震に會す。

〔弘化四丁未年三月越後信濃地震之記〕

三月廿一日永山平八同道金澤出立、同廿四日越後中屋敷驛止宿いたし候處、同夜五半時頃、東南之方より大濤を打懸候樣之物音いたし、屋梁動搖、席上之品々不殘傾倒、襖・戸障子飛はづれ、すは地震と駈出し候處、地上步行難致程の儀に而、めり〳〵と鳴渡り、暫して相止。驛中婦女老人を扶け幼を負ひ、愛かしこに打集泣さけび、男子は家財を荷擔して東西に奔走し、或は火を用心せよと呼はるも有。又逸れ馬を搜し求るもあり。驛中騷動一方ならず、止宿の旅店抔二階裏之大梁拔落、土藏も二圍破壞いたし、戸障子・鴨居・根太浮はづれ、其上終夜地震相止不申、翌朝迄に十七・八度相震申候。右之次第故驛中明家にいたし、家の前後明地へ出候族。予も笠を冠り筵の上に其夜を明し、翌廿五日同驛出立高田ゟ參候處、道傍宮社

本文は木村采右衞門の筆記に係る

之鳥居幷石佛・石塔之類不殘打倒し、高田市中家の損じ中屋敷よりは甚敷、通り筋之内やね石軒端に落ち、潰家七・八軒計見かけ候。卽死人も有之由。又面部大傷有之ものも多く見かけ申候。是は逃出候節家上の石に擊れ、右樣傷損いたし候由。町中不殘戸を閉し、飲食・草鞋之類求かね候。人馬繼立も差支、同所に數刻相待居候内、西越後等の消息相知れ、名立驛抔は强き地震と申位にて家の破損無之、柏崎近在も同樣之由。但今町驛は娼樓屋五・六軒打潰し、死傷人も有之由。同日荒井驛止宿、廿六日關山宿、兩日とも田の中に打臥、廿七日關川止宿、同所に二日逗留。關川左り之方山手に大谷と申公領、家數四十軒計有之所、山拔にて三十軒計打潰し、六十人程卽死いたし、高田より關川迄之内一宿々々に潰家之數多く、道路之陷裂も夥敷、田切坂は尤甚敷、廿九日關川宿出足信州江相懸候處、越後にくらべ候得者早急之强當りと相見江、野尻驛は十之七潰れ、其上十八軒計燒亡いたし、潰れ殘候家迚も傾撓(カタガ)り、就中住居は相成不申。牟禮一宿にて、卽死百三十人・馬十疋与土人申聞候。荒町宿は牟禮驛程には無之、善光寺驛は牟禮同樣皆潰れ之由。殊に善光寺は三月十日より如來開帳に而遠國之人打集り、驛中五・六千人程も泊り合候處、十之七・八は死傷いたし、且急之埋葬も出來不申に付、穢臭數里に相艤(ニホヒ)候由。是は家に壓れ候而已ならず、地震中七・八箇所より火起急り、市中不殘燒失、唯如來堂幷山門計燒殘り候次第。夫故右失火之ために横死いたし候もの多く、予見懸候中にも、江戸近邊之者之由にて、柱に足を挾まれ逃出候事不相成、其中煙氣來り半體たゞれ、されど一生懸命にて足を拔取り命を助り候よし。尤歩行も致得ず、駕籠にて旅行いたし候を見かけ申候。其外困苦流離の狀目も當てられぬ事共計に而、善光寺より右之方山入小市・稻荷山諸村も同樣皆潰れ之由。飯山・松代城も餘程崩れ損じ、城下も大半打潰し、其上飯山・稻荷山は火災も有之。右地震より犀川水流一滴も來らず、春川之事常水より倍にも有之べき時節に右之族ゆゑ、暴潰れ之處難計に付、川中島郷中居民不殘岡田山江逃上り、丹波嶋驛抔は問屋役人兩三人家之前に舟を繫ぎ居殘り、旅人江も右之段申入通行爲致不申よしに付、予は長沼驛に相廻り、能布川渡しを越、是は筑摩川下、流水有之。福島宿江相越、兩驛とも舟二艘用意有之に付、宿役人江水源之樣子相尋候處、小市より二里計上に山平林と申有之、兩側斷崖にて犀川上流此所より流出候處、虛空藏山与申岩山地震に而川中江崩出水流を塞候。右川上に新町与申廣野有之、松代領に而山中三萬石与唱候膏腴地江、日々大水灌注、民家悉沈沒いたし候。依而松代侯より長沼・福島等之宿役人御呼立、若暴決患有之時は川緣諸寺に而早鐘を撞候事に申渡に付、中島諸村晝夜安眠いたし候もの無之与申聞候。其上福島驛江相向候處、晩景に付夜通し旅行も難儀に付、兼而承り傳へ候大笹街道江相懸り、其夜は井上村与申所に止宿。同晦日仁禮峠を越え、上州大笹驛に止宿、翌朔日信州沓掛驛江出、碓氷嶺を越え申候。

去る廿四日より朔日迄、晝夜兩三度づゝ山鳴震動相止不申。丹波島東は前文之通に而通行不致候得共、追々跡より追及之者に相尋候處、矢代・戸倉は越後關山邊同樣之當りに而潰家有之、榊・横引・上田・岩鼻も崩落候得共、上田よりは家之損無之よし。しかし地震は上州筋申に不及、江戸表も相震候樣子。且上州にて尾藩之士に逢相尋候處、名古屋も同夜同刻正座難成程之地震にて、木曾路は盍尻邊潰家も有之よしに承り候。誠に前代未聞之地災、後年之ため荒增を爰に記。

四月四日江戸到着。

三月廿四日。金澤に地震あり。

〔官事拙筆〕

三月廿四日

一、今曉四時比餘程强地震有之、其後も兩三度又々ゆり候。右に付兩御廣式江爲伺御機嫌罷出候儀に而も可有之哉、播磨守は御廣式方に而外引番には成兼候へ共、近にも候故家來迄以紙面爲尋遣候處、播州方に而は不罷出圖り候由。依而自分も罷出候儀は尤指止候事。

但、右地震自分等は覺無之程之地震、ゆり樣は格別にも無候へ共、餘程長くゆり候也。前段之通其後間有之兩三度も地震、其內大小も有之。翌朝六時前後之比も兩度、日之內も兩三度至而小さき地震も又々有之。何れ久々無之地震に候事。

〔弘化四年地震之記〕

一、金澤三月廿四日夜四つ時暫前地震、餘程長く候得ども格別之事無御座候。鴨居等に懸たる物落る程にも無之、夜之內六・七度も動く事有之、翌日より晦日迄少々充度々地震有之事。

一、越中高岡邊は鴨居に掛たる物落ると云。

一、能州田鶴濱長公之御菩提所東嶺寺棟木落る。因之長公より御役人早速發足之由、河野久太郎殿物語也。七尾近邊土藏損所も有之、酒多くこぼれ申候よし。跡に承り候得ば、金澤酒造も大抵一軒に二石計はこぼれ申よし。

一、小松より申來候は、大抵金澤と同樣にて少々之事也。

三月廿八日。前田齊泰江戸に着す。

〔官事拙筆〕

四月六日

一、昨日御用番より被指出候前月廿八日江戸表より早飛脚步、美作守等より之左之紙面添紙共到來に付致承知書、落着に付翌朝越後屋敷江遣之候事。

相公樣益御機嫌能、今廿八日四半時過御着府被遊候。先以目出度御儀恐悅之至奉存候。御供

本年三月十三日の條參照

人末々迄無滯罷越申候。此段眞龍院様初御申上可被成候。依之前々之通中飛脚を以可申進處、
御次より御用有之早飛脚に申渡候、以上。

三月廿八日　　前田圖書
　　前田美作守
本多播磨守様

〔日記〕

八月廿二日

一、弘化四年御在府詰高　　但江戸在住共
總高二千五百十八人
内
一、二百十七人　　與力以上
一、四十四人　　御歩
一、十四人　　筑前守様御附御歩
一、二十四人　　定番御歩
一、二十七人　　御算用者
一、二十二人　　御料理人
一、六人　　御細工者
一、六十九人　　御小人
一、四十四人　　御手廻
一、三十一人　　御臺所附同心
一、十四人　　同板本
一、六十六人　　同小者
一、九人　　御作事方
一、三人　　御預地方足輕
一、一人　　同小者
一、百一人　　御厩方
一、六十九人　　坊主
一、六十四人　　大組足輕
一、三十八人　　御持弓足輕
一、三十八人　　御持筒足輕

一、六百十八人　割場附足輕等
一、二十九人　御下屋敷定番足輕
一、七百八十人　割場附小者
一、二十四人　御手木足輕等
一、百三人　三十人組等
一、五人　大島忠太夫等組足輕等
一、十一人　御先手等手替
一、六十六人　鳶之者
一、十四人　田中彦四郎等組足輕
一、十三人　笠松六郎等組足輕
御歩以下〆二千三百四十一人
右當御在府詰人等如斯御座候。

八月

此外又家來打込大凡三千人許なるべし。飯米一日分十五石。

三月廿九日。徳川家慶、使を遣はして前田齊泰の參覲を勞せしむ。

〔諸事要用雜記〕

三月廿九日

一、今日上使御内沙汰有之、四時過出席相揃候上被爲召。
一、四半頃御表江御出、御飾御覽、御同道に而御出被遊候事。
一、今日彌上使戸田山城守殿御越之旨、御小人目付を以申來、兼而御近習頭へ申談被置候。爲御知方等夫々相濟。
一、今日上使御退出後、追付之御供揃に而御老中方御廻勤之儀伺被仰出候段、御大小將御番頭より御近習頭へ演述有之候事。
一、九つ一分過爲上使戸田山城守殿御越、御兩殿樣御出向、御城下に而御表江被爲入、大書院三之間に御見合、昌平橋御付人に而御廣間邊迄被爲入、三丁目に而御式臺へ御出。無程上使御見懸に而、御門下江御兩殿樣にも御出、御挨拶之上筑前守樣には御跡へ御付、御通り、上意御拜聽。夫より御小書院江御通り、御料理御相伴に而、夫々御例之通相濟、御受被仰上候。前に筑前守樣御式臺御送り之處迄御先へ御出、相濟、御勝手座敷坊主衆溜御小書院溜江も被爲入、御入之事。
一、今日啓之介樣御出無御座、御重引者前田右近殿御引被成候事。

松平加賀守

參勤之段達上聞、大儀被思召候。上使被成下候。追而御目見可被仰付候。

一、右九つ七分過相濟候事。

三月。西洋炮術に熟達する者を加賀藩に招致するの許可を幕府に求む。

〔御親翰帳之內書拔〕

異國船渡來之節警衛向之儀、彌嚴重致し、人數・武器之手當等、是迄よりは一段手厚に相心得、且若近海江渡來候者、臨時警固幷防禦等被仰付候儀も可有之候間、平常火炮等之用意可申付旨、去寅年御觸達御座候。兼而其手當仕置候得共、猶更火炮等厚用意致し置申度。依而者西洋之炮術は便利之儀共有之候付、右炮術心得罷在候他國之者國許江呼寄、鐵炮等申付候而茂、指支之儀も有御座間敷哉、御問合申上候事。

松平加賀守家來

岩田內藏助

三　月

御付札

書面之通者不苦と存候。尤筒名目・員數等御屆致し可然候。

三月。江戸詰人に衣服その他の儉約を旨とすべきことを告ぐ。

〔觸　留〕

江戸表御式臺を初、御表向都而綿衣等麁服着用可致旨等、前々被仰出置候へ共、當時別而嚴敷御省略中之儀に候間、尙更麁服着用可致候。上使等押立候御客之節は輕絹類相用、御一門樣方等御出之節前日爲御知之分も、常御見廻懸り之振に候得ば綿衣等着用可致候。御內輪相勤候人々は猶以可爲麁服候事。

但、何とか御含に而御設有之御客之節は、其時々着服之儀御客方より可申談候。

一、武器之儀に付天保十一年被仰出之趣有之、成丈雜用者相省、鎗數等文政十年以前之通爲持可申旨被仰渡置候通に候間、無益之雜具抔爲持候儀堅可爲無用候事。

一、江戸詰中於御貸長屋無益之參會致間敷候。都而小屋暮方等之儀質素に相心得、入ざる慰事抔に長じ、費ヶ間敷儀勿論有之間敷候事。

一、餞別幷土產物堅可爲無用候。併身近親類等輕少之品も難成と有之候而は、却而情實に當り不申儀も可有之候間、至而近き親類等日用之粗品抔少々贈候儀は可爲其分候事。

一、足輕以下之者共も、尤小屋暮抔分限不相應之族無之樣可相心得候。御門外たりとも綿服之外は着用不相成、尤夏之服茂右に可准候。刀・脇刺拵も金銀相用候儀は堅不相成候事。

但、御家中家來若黨・小者之内にも、衣類等不相應之者も有之樣子に候。以來其主人より嚴重に可申渡候。

右等之儀に付而は、前々より被仰出之趣御參勤之時々申渡候へ共、追々嚴重被仰出之趣申渡候故、享和三年以來分而不申渡候。然處心得違いたし、麁服相用候儀は無之躰。其外無用之參會等之儀も每々嚴重被仰出申渡置候處、是亦心得違之人々有之躰に付、自今之儀嚴重可申渡旨被仰出之趣、天保六年御發駕前一統申渡候得共、年數も相立候事故、猶又今般改而右之條々可申渡旨被仰出候。追々嚴敷御省略等被仰付候得共、色々無御據不時御入用も指湊、且定式御入用も次第に相增、御勝手御運方御急迫至極之御時節に候間、一統奉恐察、猶以無用之費を相省、精誠遂勘辨、聊も御難題に不相成樣急度相心得可申儀可爲肝要候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江嚴重可被申渡候事。

三　月

別紙寫之通美作守殿御渡、各樣江も可及御演述之旨就被仰聞候致廻狀候、以上。

三月七日　　富永左膳

三月。諸士の生活を儉素にすべき從來の令を勵行せしむ。

〔小木文書〕

自他は自國他國の義

諸士風俗等之儀に付度々被出、就中近く茂被仰出候處、一端之事之樣に成行、無程相ゆるみ候而者、御意外之御事に被思召候。今度江戸詰之人々心得方之儀に付、被仰出之趣も有之、是迄度々被仰出候得共、中には暮方抔も兎角自由を構、おのづから銘々難澁に逼り候躰。依而自・他共儉素に相暮申可旨等、今度御發駕前御馬廻頭・御小將頭御前江被爲召被仰出之趣、中川平膳等申談有之候條、彌以他を不相見合、各志を相勵、是迄被仰出置候趣共無油斷可被相心得候。此上御趣意不致貫通而者、誠に以申譯無之儀に候。尙追々可申談儀も可有之候。

三　月

今般音地新兵衞殿被申談候趣別紙一通爲御承知相廻申候。御廻達留より御返可被成候、以上。

三月廿七日　　中川甚之助

四月朔日。前田齊泰登營して參覲の禮を行ひ、慶寧は病氣快癒を謝す。

〔諸事要用雜記〕

四月朔日

一、今朝六時御目覺、御湯相濟候上、御膳之時分か筑前守樣御供廻りに而御表江御出、御提灯引け御同道に而御登城被遊、於御座之間御參勤之御禮被仰上、筑前守樣に者於御白書院御病後之御禮被仰上。兩御丸共御參勤之御禮、幷筑前守樣御病後之御禮被仰上候。御禮御老中

御謁。筑前守様にも御白書院於御縁頰、兩御丸共御病後之御禮被仰上候趣、御謁に相成、相濟御同道に而御老中方御勤被遊、九時過御歸殿被遊候事。

〔官事拙筆〕

先達而申進候通、相公様益御機嫌能前月廿八日御着府、同廿九日上使戸田山城守殿御出被成、御懇之被爲蒙上意、且又御參勤之御禮可被仰上旨、昨晦日御老中方御連名之御奉書到來に付、則今朔日御登城被遊候處、於御座之間御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自熨斗鮑御頂戴被遊、重疊目出度御儀恐悦之至奉存候。次に拙者共御供に被召連候處、於御白書院御目見被仰付、御威光故与難有仕合奉存候。委曲之儀は以御書被仰遣候御様子に御座候。右之趣可爲申進如斯御座候、恐惶謹言。

四月朔日　　前田美作守
　　前田圖書

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次の賀例のごとし。松平加賀守はじめ、參覲のもの二人。

四月二日。震災により江戸・金澤間の旅行は中仙道を取ることを屆出づ。

〔諸事要用雜記〕

四月二日

一、左之通御屆有之候事。

加賀守爲用事、家中之者並定飛脚之者順次中山道追分口より北國海道ゑ懸往來仕候處、右道中筋今度地震に而、越後・信濃路之内皆潰之宿驛も有之、人馬繼立難相成躰御座候間、暫之内中山道より美濃・近江・越前ゑ懸旅行爲致度奉存候。且又道中繼人馬之儀、一日十三人十三匹充繼立申候。順路之儀にも無御座候間、此段御屆申上候、以上。

四月　　松平加賀守

四月五日。鹿島郡田鶴濱に火災あり。

〔御家老方等諸手控〕

四月五日

一、能州田鶴濱村二百六十軒餘之所、當二日出火、二百十六軒外土藏・納屋等三四十計燒失之由。

四月四日。前田慶寧の婚禮に際し節約を緩くすべからざることを告ぐ。

〔諸事要用雜記〕

四月四日

一、左之通美作守殿被仰渡、御近習頭へも申談候樣被仰聞、夫々申談る。
御勝手向御難澁に付、御儉約方之儀追々被仰渡置候通に候。然處連々御廉多に被爲成候に付
而者、定式御入用次第に相嵩、其上不時御物入も指湊候付、專御調達を以御取續有之故、彌
以過分之御借財に相成候。近年段々嚴敷御省略も有之候得共、中には其通に而相辨兼候品も
有之、無據最前之通御改之儀なども有之故、御勝手御急迫之處御緩かに相成候趣に心得候人
々も有之哉に候。今度筑前守樣御婚禮も被爲在候へば、彌增御多端に相成候儀に候處、右御
慶事之折柄御調子合により、不斗御省略之御取締相弛候而は、自然与御平常向江も押移、是
迄之御僉議方立戻り候樣に相成候得ば、畢竟御勝手御運方被成方も無之御場合に至り可申。
左候而者不容易御事に候條、猶此上御省略之儀無油斷精誠遂僉議、心付候儀は無泥可申聞候。
此段可申渡旨被仰出候事。

四月六日。前田慶寧、久留米侯有馬慶賴の妹崇姫に結納を贈る。

〔成瀨正敦日記〕

四月朔日

於親樣御歳幷御姓左之通。

一、御歳天保三壬辰年壬十一月二日御出生に而、當未御十六歳。

御姓村上源氏。

右之通御座候、以上。

三　月

一、親姫樣御諱之事御問合に相成候所、右之趣迄申來、御諱は御奥通御伺も有之旨申來。則
御奥へ女中文に而崇子与被稱、御差支も無之哉与申來居、大村氏被相伺候所御宜旨御意に付、
其段御廣式頭申渡被置候。依而崇子与御治定に成候事。

〔諸事要用雜記〕

四月六日

一、今朝從筑前守樣御結納被進候に付、表向八時過揃。依而七時過出席、服無地のしめ・同上
下に而罷出る。
一、六時繰出候筈之處、彼是遲刻に成、提灯引宜段申上り、御表江御出被遊、御式臺階上江
御出被遊、御結納被進候品行列御覽被遊候。筑前守樣には夜之內之儀に付、引出橋より御出、
御溜へ被爲入、御對顏、重而御同所へ御扣、御表へ御出之節御同道被遊候事。
一、右御出之節、喬松丸殿にも御出可有御座旨被仰出、夫々申談、引出橋より御勝手通り、
御使者之間後御廊下より、階上筑前守樣御脇へ被爲入之節御飾御覽、御同道被遊、新御廊下

中務大輔は久留米侯有馬慶頼に対し弘化三年十一月兄頼永の後を相續

ゟ御殘被遊候事。

但、後刻御道具之節も御出之筈。是は御出入衆も御越之儀に付、御式臺に而は御差支、依而裏御式臺へ被爲入候筈も昨日夫々申談、御横目幷寺田兵馬へも申談置候事。

一、九時前筑前守様御入、無程御居間へ御通り、今日御祝之御料理、於居間御一集に御祝被進候事。

一、九時前御居間書院ゟ御兩殿様御出、圖書被爲召御意有之候事。

圖　書

今日者首尾能大儀。早朝より大儀。

筑前守様御意

目出大儀。

一、八時前中務大輔様より御答禮、御家老御使者參り、御進物等彼是取しらべ中、御道具繰出之御付人、夫より昌平橋之御付人に而御表へ御出、大書院三之間に御見合之内三丁目來り、啓之介様・右近殿御式臺階上疊之處へ被爲入、御出入衆は階上より御下へかけ被罷出候。

一、御前御式臺疊之處へ御同道御出、追付御道具夫々罷通、相濟八つ三分御入被遊候事。

一、八半時頃有馬様より御結納御祝儀被進候。御答禮之御使者有馬大和參上、於御大書院御口上御聞に付御出被遊、夫々御作法通り相濟、筑前守様にも御作法通り相濟候。夫より重而御出、御直答是又御作法通り相濟候事。

一、七半時過御小書院御客御通り宜段申上、御兩殿様御出御逢、熨斗相濟、御料理之御挨拶に而被爲入、筑前守様に者御引菜上之口より御出、御上客啓之介様・前田右近殿迄御引、其外者御給事人、相濟被爲入、御同所様重而御出、御盃事夫々御料理相濟、御兩殿様御出御挨拶、御直に御小書院溜今日之御取持之御方に付、御取持之御挨拶も被仰述、夫より大書院溜久留孫太夫殿、夫より御勝手座敷幷坊主衆溜ゟ御立寄、夜六半時前歟夫々相濟候事。

一、右相濟、御囃子七番御手役者切り、御近習當番切拜見、夜四半時過相濟候事。

四月七日。前田齊泰・慶寧共に久留米侯有馬慶頼を訪ふ。

〔諸事要用雜記〕

四月六日

一、明七日增上寺御參詣御延引、同日六半時之御供揃に而筑前守様御同道、左之通御勤可被遊旨被遊旨被仰出候。

御通被仰達候。

水　戸　様

右大地震は三月廿四日のものなふ

四月六日

御通被仰達候。

中務大輔様

〔諸事要用雜記〕

四月七日

一、五つ七分御出、昨日被仰出候通、水戸様等筑前守様御同道御勤被遊、八時前御歸殿被遊候事。

四月十日。今明日金澤の市民前田齊泰の旅中無事を祝して盆正月を行ふ。

〔毎日帳書拔〕

四月九日

一、今度下道中大變之樣子之處、御道中益御機嫌能御着被遊候爲恐悦、明十日・十一日町中盆正月仕度旨相願、承屆候旨小紙申聞。

〔日家榮帳〕

一、殿樣三月十三日御發駕、魚津に而三日御滯留。右大地震夜坂本御旅舘、御宿內指障り無御座、翌廿五日朝坂本御發駕被爲在候。同廿八日江戸目出度着被爲在候に付、四月十日・十一日休日御國一統御祝申候。

四月十日。犀川・淺野川・手取川共に出水す。

〔御家老方等諸手扣〕

四月十日

一、昨日より大雨不止、今朝より風烈し。此間寒し。兩川出水、犀川橋往來止。夕景より晴。

四月十五日

一、當十日風雨、兩川共・手取川餘程之洪水、損所・水附家・御田地水押等多有之由屆有之事。

四月十三日。前田慶寧の夫人入輿す。

〔諸事要用雜記〕

四月十三日

一、今曉八時美作守殿爲御輿迎被罷越候。

一、今日御入輿に付六時過出席、相揃候上被爲召。

一、四時筑前守樣御出に而當席被爲召、今日御婚禮に付、其已來段々被懸御心御世話被成進、難有思召候旨御口上被仰上、則申上る。追付御對顏之趣被仰進、御居間迄御通り、御熨斗配膳役上之、相濟御退出被成候事。

但、御直に御住居江被爲入候由之事。

一、今日御入輿前、御表御客衆江御兩殿樣御對顏之筈に候へ共、筑前守樣御取込にも可有御座、御前迄御逢可被遊候間、御居間御引取後御勝手に御扣被成候樣被仰進、則申上る。

一、今日御小書院御祝之御客出雲守樣等四時御出に付、御勝手座敷之御客も追々御越に付、御表江御出、御小書院上之口より被爲入。出雲守樣・啓之介樣・前田右近殿其外御出入衆兩頰に御揃、御出御挨拶。追付御料理之旨御挨拶に而被爲入。夫より御大書院溜御廣間上之間初而御逢小笠原又六郎殿、夫より御勝手座敷へも被爲入、御入被遊候事。

一、右之頃三田御出輿之御付人來候事。

一、四つ七步昌平橋御付人に而御表へ被爲入、大書院三之間に御扣被成、本鄕三丁目御付人に而御式臺へ被爲入、追付御入輿御行列御覽被遊、益御機嫌能九時御入輿之事。

一、御供之御家老有馬大和・同御中老馬淵貢御表江相廻り、御料理相濟、御目見之習禮も有之。宜段申上り、八時過大書院江御出、御熨斗三方御表小將持出、御右御手寄江上之。美作守二之間上之方へ罷出、追付大和御家老代竹田市三郎誘引、二之間御敷居之內へ罷出交名唱候。此時今日者天氣も靜に大慶と御意。美作守御取合申上、直々御手熨斗被下旨同人演述。大和御次へ退き帶劍有之、罷出御取合之美作守座付之邊より膝行、御側へ進み御手熨斗被下、退き御禮之時御手熨斗之御禮御取合申上。御使者退去、次に御中老馬淵貢御次第同前。相濟御留守居中村和三郎組頭誘引、御目見御意無之。相濟御入被遊候事。

一、八半時御表御客御大書院に而御盃事宜段申上候。御緣頰之方啓之介樣・右近殿、御禊之方出雲守樣、夫より御出入衆何も兩頰に御座付、御吸物膳、御土器三方・御□三方兩頰へ一向充指出、御相伴衆江者數之御土器指出。御前上之口より御出、啓之介樣御盃事、其御盃右近殿、相濟御禊之方出雲守樣御盃事被遊、御納。夫より數之御銚子に付、其間御休息之御間に御見合被爲入、御吸物膳引候上御出、御退出に付御挨拶、相濟御入之節、御料理之間通に而寶生大夫御通懸御目見。夫より御□□之間に今日之御取持衆御溜、其處へ御立寄、夫より御居間書院江御着座。美作守今朝御輿迎相勤、披候上被爲召候筈之處、彼是御取込に付、只今被爲召、左之通御意、御禮申上退去、相濟御入之事。

今日者早朝より大儀。首尾能大慶。

四月十三日。前田慶寧夫人を東御前と稱せしむ。

〔御家老方等諸手扣〕

四月十二日　美作守

一、當十三日親姫様被御引移之上東御前様奉唱候様被仰出。

親姫は壱姫なり

四月十五日。徳川家慶、前田慶寧の成婚を祝して物を贈る。

姫君は前田齊泰夫人

〔諸事要用雜記〕

四月十五日

一、今日御婚禮濟爲御祝儀、御兩殿様江上使有之に付、姫君様江右御案内御使之儀御近習頭へ申談る。

一、筑前守様五半時御上り被遊候。御同道に而御表へ被爲入、上使御都合夫々御□被爲在候事。

一、御本丸より之上使村田幾三郎殿四時過御越、御兩殿様御出向、夫々御作法通り相濟、御受之後筑前守様に者御式臺へ御出被遊、御先立、大書院三之間之外御廣間取續御廊下へ御出向、御先へ被爲入、暫御入被遊。重而西丸より之上使石卷猪十郎殿御越、從右大將様・御簾中様御拜領物有之。夫々御本丸之通相濟、被爲入候節、御勝手座敷幷坊主溜・啓之介様へも御對顔、御入被遊候事。

一、右相濟御膳被召上、筑前守様にも御辨當被召上。無程御奥へ公方様より上使村田幾三郎殿御越、夫々御作法通り相濟、御菓子濟寄に、御本宅より御案内に而、御兩殿様御同道、引出橋より御出被遊、御廊下に暫御見合、御用達より御左右に而、御書院御襖御近習頭開之、御出御挨拶被遊、御兩殿様御送等無之、直に被爲入候。夫より上蘭差支代り表方佐山罷出、御請有之相濟候事。

一、今日上使御退出後追付之御供揃に而、兩丸御老中御勤に付、御口上書聞番より下物差出、調筆申談、校合之上入御覽、聞番へ相渡す。

一、九半時過御出、御同道に而御老中御廻勤被遊、八半時過御殿江御戻り之事。

四月十六日。東本願寺前門主越前吉崎に下向するを以て、百姓の參詣せんとするものは裁許十村の許可を得べきを命ず。

〔郡方御觸〕

近々東本願寺先御門主、越前吉崎江御下向之由に候。先年茂同所江御下向有之、門徒之者冥加錢等指出申儀、曁參詣等堅不相成段、天保九年之節改作方・御郡奉行より申渡置候得共、其節密に參詣等いたし候者茂在之、御締方行屆兼候体に候條、此度之儀茂前々申渡通、嚴重可相心得儀に候。併稀成儀に付、其内耕作方指障にも不相成、參詣致度もの在之候はゞ、其段裁許江相達、聞屆を請罷越可申候。乍然密に罷越候者於有之者、嚴重可申付候。此段夫々可被申渡候、以上。

四月十六日

高澤平十郎殿

大嶋五郎右衛門殿等

右寫之通申來候に付、相越之候條、得其意、參詣等堅不致樣本文之趣不相洩樣可申渡候。併稀成儀に付、其内耕作方指障にも不相成、參詣いたし度ものは、其段其許申ゟ爲相屆、指遣可申候。先々早速相送り落着より可相返候、以上。

四月十八日　　大嶋五郎右衛門

能州四郡十村中

本年四月二日の條參照

四月廿四日。震災により信越の通過困難なるを以て中仙道を取るべきを命ず。

〔小木文書〕

今度地震に而、越後・信濃路之内皆潰之宿驛も有之、人馬繼立難相成躰に付、御家中之人々幷飛脚之者、暫之内中山道より美濃・近江・越前ゟ懸け旅行之儀、道中御奉行深美遠江守殿ゟ御屆有之候條、當春交代等之人々、右街道より可致通行候。宿賃等茂右之圖りを以割符有之筈に候。

右之趣被得其意、組・支配等不相洩樣、一統可被申談候事。

未　四　月

別紙中山道より旅行之儀に付、遠藤數馬殿より兩通之趣被成御承知、先々早速御廻落着着より御返可被成候、以上。

四月廿四日　　山本辨左衛門

小本孝吉樣

四月廿五日。德川家定、前田慶寧夫人に物を與へて成婚を祝す。

〔諸事要用雜記〕

四月廿五日

一、東御前樣ゟ、今日右大將樣・御簾中樣より、御婚姻爲御祝儀、以御女中衆奉文を以一種一荷充御拜領被成候。且右御禮女使を以從御前御勤、兩御丸御老中方へは其段御屆、筑前守樣より者兩丸御老中へ御禮、大奥へも女使、御身當りよりも女使之事。

一、今日御婚姻御整に付、御内證より今日公方樣御初ゟ、御前・筑前守樣・東御前樣より御獻上物、相濟女使佐山相勤拜領物被仰付、右御禮者女使序に被仰上候事。

五月朔日。前田齊泰夫人江戸城に登る。

〔諸事要用雜記〕

五月朔日

一、今日姫君樣爲年始御本丸へ御登城、夜五時過歸御被遊候由之事。

一、右に付御出前幷御歸殿之上共、女使例之通。女使伺申談候事。

五月二日。前田齊泰、慶寧の成婚を祝し能を演ず。

〔諸事要用雜記〕

四月廿三日

一、近々御參府後年頭、幷今般御婚禮濟御祝被爲兼、姫君樣へ不押立御料理被進、筑前守樣・東御前樣ゟも御料理被進、喬松丸殿・和田倉御前樣・壽正院樣にも被爲入、御料理被進、其節御能も可被仰付候。右主付御近習頭其內被仰付申談候。御日取之儀者追而被仰出候事。

五月二日

一、今日御招請に付、提灯引け三人共出る。

一、筑前守樣六半時過御上り、長圍爐裏通り、燕之御間に御溜代り出來、御持參之御品御近習頭を以被上、無程御廣緣通り御居間へ御通り、御奥へ被爲入候事。

但、御刀も右御廣緣通り相通り候。御戻りは御能濟候上に候へば、毎も之御溜に相成筈。

其節者御刀、御近習番へ入相立候而出し候筈也。

一、今日右大將樣御成に付、中入過に和田倉御前樣御出之筈。依而暫御遲に付、御能者無御構御始め之筈也。

一、六半時過池之端樣御出之由に付、例之通御白洲へ一兩人當席ゟ罷出る。和田倉樣者五時過御出、是又罷出る。

一、肥後守樣兼而御約束に候得共、右大將樣御成御門前通御に相成、依而御出不被成候。出雲守樣等御三方樣は御出被成候。於御見物所麵類、幷御中入後御提重等指出候筈に御客方へ申談る。且御出入衆・坊主衆も御能拜見有之候事。

一、和田倉樣御入御遲刻に付、初め御三献之御都合之處、御中入之事に相成候。依而御同所樣之外御揃之上御熨斗、無程御能御始と相成候事。

一、御中入御三献幷御料理被進、其節例之通御鈴ゟ當席一人充立合之事。

一、望月御能相濟、御兩家樣へ御對顏被遊候事。

一、御能七半時過相濟、夜六半時御締御用無御座旨に而、夫々立合引受候事。

一、御婚禮濟御祝に付、御到來之御肴御吸物に被仰付、年寄中等御次廻りへ夫々頂戴被仰付候事。

一、和田倉様等御戻り之時分、御白洲へ罷出候筈に付、大村氏被相殘、御二方様共御戻之節被罷出、四半時頃御戻り被遊候事。

五月六日。江戸に往來する者の中仙道及び北國街道中便宜の道路を擇ぶべきことを告ぐ。

〔成瀨正敦日記〕

別紙美作守殿御渡、各様江も可及演述旨被仰聞候付、爲承知寫相廻申候、以上。

五月六日　　多賀建物
　　富永左膳

成瀨主税様等十二人
組頭江

信州路異變に付、御家中之人々を初木曾街道通行之儀、先達而申渡置候通候。然所北國海道人馬繼立難相成場所は、相對雇に而繼立候得ば道路通行相成可申体に付、御家中之人々を初、指急候御用向に而致旅行候者は、中山道追分宿より北國海道江相越、人馬繼立相成候宿驛は御定之通繼立、尤指支之場所は相對雇に而通行之儀、道中御奉行衆江御屆相濟候條、交代等右兩海道之内勝手次第可罷越候。發足方之儀は猶更會所承合可申候事。

右之趣夫々可被申談候事。

五月十三日。前田慶寧の當秋に於ける歸國を廢すべき年寄中等の意見を決定す。

〔官事拙筆〕

五月十二日

今朝播磨守より被出之。

一、筑前守様當秋御國江被爲入候御内定之處、信州路異變に付、只今之處往來差支、追々常往來は支不申而も御通行は迚難被爲成可有之に付、外街道御通行之儀御屆等有之、夫々御願立可被遊思召に被爲在、猶更遠江守等了簡も無之哉御尋之趣江戸表より申來候。御同所様御儀は江戸表御誕生故、江戸表之儀は御地盤之御居處之様に被思召、御國に被爲入候儀は他處江被爲入候様之思召も有之。此思召御立直不被爲在候而は、往々御國江被爲入候儀を御いとひ被遊候様に被爲成候而は、何歟に付御爲宜ヶ間敷。依而當秋之處何卒御國江被爲入候事に相成候様、御附之人々より段々申上候趣も有之。御成立之御爲には御國江被爲入候儀可御宜、遠江守等了簡に候。併此間申聞有之候趣に而、當時之御勝手振故、今・來年にも如何共被成方無之様之處江可被爲到哉。此間心付申聞之趣は、一通り御入用而已之處を以被申聞候儀与

存候。右段々無御據御樣子も有之故、此等之處も奉恐察、各存寄承度旨御算用場奉行一統相招申聞候處、御勝手向之儀は當時御調達而已を以御取續之事故、何程御不足与申に而も無之、御調達さへ出來候得ば無御支儀に御座候。當時御議定も宜敷故、隨分御調達調候得共、御借財は次第に相增、畢竟如何可相成哉与何も心配至極仕候。依而は被爲成候程萬事御欠不被爲成而は不相成儀与奉存候。其上近年打續色々御物入も有之、當年は御婚禮に付不時御入用、此後も右御廉に付指定り御入用も相增、且又信州筋異變に付交代人等中仙道往來に相成、此等に付而も不時之御費相懸り、此後も下筋御本陣等より定而願方も可有之、何歟に付當年は餘程之不時御入用相增可申事与奉存候。先日も御達申候通、當秋外街道より御通行被爲在候へば、來春迚も御同樣可有御座、左候得ば相公樣御歸國も又外街道可被爲成、纔半年之內三度之外街道御通行に相成、過分之不時御入用相成申候間、何卒被爲成候儀に候はゞ、當秋之處は御猶豫被爲在候樣仕度奉存候。當秋御國江被爲入候得ば、差當て加樣之處御手支有之与申に而無之故、達而御國江被爲入候儀御差留申上候事は仕兼候得共、御借財次第相增候而は御議定も立兼可申、左候へば只今之樣之御調達も調申間敷、其上當年順氣之處も如何可有之哉。若不作等有之候而は、此御取扱方被成方も六ヶ敷のみならず、世上之樣子も違候へば、御調達之處も其先々指支候へば無覺束儀に奉存候。何れ御調達而已を以御取續之御勝手向に候へば、甚危御勝手与申ものに候間、此處得与御詮議御座候樣仕度、御成立之儀は何共申上兼候へ共、當秋御國江不被爲入迚、往々御國江被爲入候儀御厭被遊候處江被爲至候与申に而も被爲在間敷哉。思召さへ被爲立候得ば、御國江被爲入候儀は如何樣とも可被爲成儀、思召不被爲立候時は、たとひ當秋御國江被入候とも、往々御國江被爲入候儀御厭不被遊樣被爲成候共難申上候与奉存候。其上去々年も秋御國江被爲入、御在國之內御行步等は每度難被爲成、又當年も秋御國江被爲入候而、每も時節之惡敷折御國江被爲入候樣に相成候而は、却而如何にも可被爲在哉。此上當秋彌御國江被爲入候儀被仰渡候共、私共初御勝手方之人々に而も御尤之御儀とは不奉存候。併御附方之人々に而は了簡も違可申候得共、私共に而も其處親敷不奉存事故、左程には不奉存候。夫よりは此御時節不時成御入用相增候儀、何共恐入申候間、此上得与御僉議之上被仰渡候樣仕度旨等、段々申聞候事。

五月十三日

一、各相揃候上、前に有之當秋筑前守樣御國江被爲入候儀御猶豫之詮議之趣、江戶表江可被申遣返書下物於奥之間入披見、及示談候處、申合も有之候上、各存寄も無之旨に付、明日出早飛脚步申遣候筈。

五月十四日。先に中仙道通行を命じたる令を取消し、通常の如く北國街

道を取らしむ。

〔小木文書〕

定番頭江

今度地震に而越後・信濃之内皆潰之宿驛茂有之、人馬繼立難相成躰に付、御家中之人々幷定飛脚之者、中山道より美濃・近江・越前江懸旅行之儀申渡置候得共、此節人馬繼立方申渡有之、十三人十三疋繼立之儀指支不申旨に付、御家中交代等之人々下通り可致通行候。

右之趣被得其意、組支配――――以上。

未　五　月

山本辨左衞門

別紙之通り旅行之儀に付、九里歩殿より兩通之趣御承知被成、先々早速御廻、落着より御返可被成候、以上。

五月十四日

小木孝吉様

五月十七日。前田齊泰、慶寧等と共に平尾邸に臨む。

〔諸事要用雜記〕

五月十七日

一、今日御下屋敷御出に付大村氏被罷出、其段昨日奥御取次を以申上る。六半時御供揃に付、提灯引け出席。御膳後不被爲召候へ共、三人共御居間へ罷出る。兎角折々降、御乘切りも被遊筈之處、御不都合に付暫御見合之事。

一、五時過追々晴に付、筑前守様中之口通り御上り、御供廻之上、御廣式江御案内申上。喬松丸殿御出、南御門通り御下屋敷へ被爲入、中之口前御通り之御案内に而、筑前守様一先御溜へ被爲入、直に中之口より御出御扣。追付御前御出、御馬乘に而筑前守様御同道、南御門より御供廻りに而御途中御相乘之人々、當席初追分より御先江出、松平甲斐守殿御下屋敷より御相乘之筈に候事。

一、喬松丸殿右同所邊迄御先へ被爲入、夫より御同道、御早乘被爲在候在候筈之事。

一、七半時過御下屋敷より御歸殿被遊候。尤御歸殿後御機嫌伺等無之。

五月廿一日。會津侯保科容敬・容保父子本郷邸に臨む。

〔諸事要用雜記〕

五月廿一日

一、例刻出席相揃候上被爲召。

一、四時過肥後守様等御出宅御付人より追々來り、同半時頃御兩殿様御出向、御小書院へ御通り被遊、鰭之御吸物御盃事被遊、御引菜御前御持參、相濟御入、御膳被爲召上候。

一、若狹守様御口上之内、筑前守様へ此度御婚禮之御禮有之に付御盃事有之筈に候得共、御斷に而御盃事不被遊候事。

一、御料理前御盃事之内、若狹守様へ御刀、御出入内藤遠江守殿御持參被進之候事。

一、御出前御先使者以、左之通御進贈被成候事。

會津蠟燭三百挺　若狹守様より

吸物椀五十

鮮鯛一折　肥後守様より

交御肴一折

一、御料理相濟、御休息之御間ゟ被爲入、御裝束御直被成、九時過御兩殿様御小書院上之口より御出、御前御誘引に而燕之御間より御廣縁通り御通り、御兩様御見物所之邊より□之者御出向申、御先立代り合直に御居間縁通り御庭へ御出、喬松丸殿に□口外へ御出向御挨拶。夫より筑前守様御跡に付御同道、直に□御物見へ被爲入候。坊主者御休息之間前より出、御庭之内始終御附添申候。夫より傘之御亭へ被爲入、御涼臺に暫被爲入。夫より御馬見所ゟ御上り、追付三亥父子幷宗益出、席上書畫被仰付、其内御吸物幷御提重出、都而坊主衆御取持仕。餘程御間有之、夫より豫而可被進御約束之御馬兩疋を牽上げ、御馬見所前へ御下り御覽被遊、二三篇爲走、御用無之に付牽入。夫より重而所々御廻、高山下御亭へ被爲入、御茶上之、高山へも御上り、夫より新御亭へ被爲入、御吸物・御硯蓋上之、御住居より被爲入候。御置物之内へ御くわし入有之分御取はやしに相成、羹物幷に當座鮮御指身等出、□なども被遊。同所に而日暮、御表夫々宜付、坊主衆より申上御引取に相成、最初之通り御誘引に而、御小書院上之口より御通り、御兩殿様共下もへ御引退。其節御小漬之御挨拶被遊、被爲入。御小漬相濟、御兩殿様共御出、御挨拶之上追付御退出。例之通御式臺階上迄御送被成、直に坊主衆へ御意、暫御大書院上之間に御見合、御勝手座敷宜に付被爲入、御挨拶相濟御入被遊候事。

一、於新御亭拙者共三人共被爲召御意、御盃被下候事。

五月廿六日。能美郡の百姓等、小松本蓮寺に押寄せ騒擾す。

〔官事拙筆〕

五月廿七日

一、今夕小松町奉行より左之紙面到來。

小松町西照寺・能美郡園村來生寺、一昨年東本願寺より持下り候御書一件に付、昨廿六日夕小松町本蓮寺江百姓躰之者罷越、同夜同寺江押寄打毀候旨致内達候段、同寺より町會所江及内達候に付、寺庵には候へ共私支配處に罷在候儀、自然百姓共町方江騒込候而は、若町方之者共致心得違入交出候儀も出來可申哉与、爲御縮方手先足輕幷町役人共等夫々致手當置候旨。此節梯川水高にも御座候故、水防之趣に仕事々敷無之様に取計置候段、町方等御用定番御歩野崎覺太夫等より飛脚を以申越候付、此段御達申上候。早速御縮方夫々被仰渡候様仕度、指懸候儀に付先盗賊改方幷御郡奉行江も私より及演述置申候。猶更異變之儀御座候へば、早速御達可申上候。尤右之趣罷出御達可申上筈に御座候へ共、風邪難儀仕候に付先紙面を以御達申上候、以上。

五月廿七日　　服部貞右衛門

奥村助右衛門様

五月廿八日

一、寺社奉行より與力を以、當廿六日小松本蓮寺江百姓躰之者罷越申聞之趣有之、同處町奉行より演述に付、役僧呼立尋候處、其譯百姓躰之者罷越、下女江申捨にいたし立去行衛不知。其後何等異變も無之故不達申、併替儀も候得ば早速可相達旨申聞候旨、執筆迄申越候事。

一、御算用場奉行水原清五郎別席に而、右之一件御郡方足輕より指出候紙面別紙共三通出之。若外より御聞も有之候而は如何与先入披見候旨申聞。則受取置候。右は百姓騒込候与之内通等有之、小松町方手當方出張餘り嚴重過候風說等、委細書略之事。

一、前段御算用場奉行江爲念心得談置候儀故、改方武田九郎兵衛も呼に遣、及遲刻候故私宅江參出候様爲申遣、今夕自分宅江參出に付、書院於二之間逢、小松町奉行幷御郡附足輕より申越候紙面も爲承知爲見、心得方爲念申談候處、是又此間演述之趣も有之、早速手先之者呼寄遂評議、今朝十人計遣し、内通等に罷越候躰之者など候はゞ早速引揚參候様申談遣申候間、尤油斷は不仕旨等申聞候事。

五月廿八日。大聖寺侯前田利平、關東筋川々普請を命ぜられたるを以て使者を金澤に遣はして助資を求む。

〔御家老方諸手扣〕

五月廿八日

一、野口岩佑等五半時前拙宅江來、備後守様今度於江戸表關東筋川々御普請被蒙仰、難有御仕合被思召候。未公邊より御ケ條は不被仰渡候得共、過分之御上納金に可相成、江戸表に而御願被仰上候筈。此表江御詮議も可有之候間、何分宜取計之程御賴之趣覺書に調、口達相添

拙宅は中川八郎右衛門

申述候。御先例之處御上納高如何程之者と相尋候處、一萬三・四千兩彼是一萬五千兩計之者と申聞、委細相調御勝手方席ゟ出置候。且只今御願之高も相知不申事、外に御用も有之間敷、今日にも被引取候哉と相尋候處、御指圖次第罷歸可申旨申聞に付、尙更今日出席之上申合、以紙面令申進旨申入置候事。

五月。祠堂銀借用の家中にその返濟方に關して告ぐ。

〔觸　留〕

定番頭ゟ

寶圓寺等御寄附祠堂銀幷御寺方等祠堂銀、前々御家中之人々借用之所、天保十一年諸上納打込等に被仰付候得共、祠堂銀之儀は右利足を以年々御寺務方御趣意に付、無利足打込には難相成品。併ながら御寺方等渡り高幷裁許之者渡り方も減少之上、七朱三十ヶ年賦に相改候儀承屆置候處、借用之人々不會得之族茂有之躰、返納方等閑に押移、當時御寺方等三季渡り方差支、御算用場より借用を以相渡候場に至り、際限茂無之次第に候。依之今般右場ゟ茂申渡、段々巨細に取しらべ之上、惣貸付高之內御算用場銀幷寺社所調達銀等、祠堂銀に不相當分結込貸付に相成居候故、借用人不心服与茂相聞候に付、右場銀子も有之候得共、今度格別之趣を以右銀高都合四百七十七貫九百目餘見消之儀遂詮議候所、當時貸附高一貫目に付百七十三匁宛借用人手前見消に相成候。且又殘元高之內、今石動幷城端宿用銀、先年祠堂銀ゟ結込貸付方承屆置候分、當時借用高に致割符候得ば、元高百目に付六匁一分六厘宛相當り、此分見消には難相成候得共、祠堂銀等打込置候儀不可然。依而此分當時利足御償、無利足五ヶ年賦を以當年より御算用場ゟ別取立に申渡候條、右場ゟ可差出候。殘元高全祠堂銀に付、御仕法前之分改而當年より三十ヶ年賦、御仕法後之分二十ヶ年賦、兩樣共利足是迄之通相心得、證文相改可申候。御當節右樣御取扱茂有之儀致會得、是以後每歲限日通聊無遲滯寺社所ゟ可指出候。

但、證文改方等之儀は寺社所可承合候事。

一、當時元利滯居候分、此度元高ゟ結込證文相改可申候。前段之通仕法相改候上、若返納方遲滯有之人々は、收納米之御算用場において致除知、每歲半納平均直段を以元利共爲遂差引可申事。

一、當年より祠堂銀新借用之分、利足一歩之筈に候事。

右之趣一統可被申談候事。

未　五　月

六月九日。前田齊泰、子女の養育方を簡易にすべきことを命ず。

〔成瀨正敦日記〕

六月十八日

一、有賀氏より以内狀、當九日出町飛脚到來之御用狀、幷大野氏等より之内狀も送り被越受取遣す。

御子樣方御養育方之儀、御自分樣御發途前御直に御意被爲在候通に付、別紙之趣御廣式頭ゟ申談、年寄女中等ゟも夫々可申渡旨被仰出候。右之御儀に付、榮操院樣御内意も有之御樣子候間、猶更別紙之趣被申上、自然御同所樣御好之御趣意も有之候者、宜取計引直、夫々被申談候樣被仰出候間、左樣御心得可被成候。右之趣爲承知播磨守ゟも申達置候被仰出候條、宜御取計可被成候、以上。

六　月　　大野織人

大村肴次郎

成瀨主税樣

御子樣方御養育方、近年次第御嵩高相成、追々御出生茂可有之候處、ヶ樣之譯に而者、却而御成立方にも宜かるまじく被思召候。仍而御仕來に不拘、格別御事輕に御養育方之儀、遂僉議候樣被仰出候。

弘化三年九月二日の條參照

六　月

六月十四日。長氏與力河野久太郎の松下健作より傳習監造せる大炮の試射を出願す。

〔大砲御用留〕

一、六月十四日今日御筒目方等達る。

覺

一、モルチール　筒重六十八貫目
　　鐵丸重五貫三百目
　　臺重七十貫目計

一、ホイツスル　筒重百三十五貫
　　鐵丸重二貫二百目
　　車臺重二百貫目計

一、野戰筒　筒重二十六貫五百目
　　鐵丸重九十八匁
　　臺重三十一貫五百目

河野は長氏の仕興力
小林以下は長家の家臣

右昨年松下健作鑄立候大砲、當七月中に様打爲致度奉存候。但臺金具等全出來仕候上は、毎年稽古打仕度奉存候。此段宜被仰上可被下候、以上。

六月十四日　　河野久太郎

小林紋太夫様
大原十郎左衞門様
小林平右衞門様
長右衞門様

六月十五日。前田齊泰の子利順諱を受く。

〔諸事要用雜記〕

六月十五日

一、喬松丸殿へ御實名被進候に付、御出之儀此間被仰進置候處、今晝前引出橋通り御出、御居間書院御縁頰御屏風圍之内に御溜、御近習頭被爲召、御出之趣被仰上。追付御居間へ御通り之儀被仰進、則御通り、御居間二之間入口に而御脇刺御取、直に二之間へ御出、御目通りに而御中座、御左之方御襖際より横疊三疊目に御着座。其時御實名被進候段御意、御前ゟ御實名御右筆調筆之分御小蓋にのせ上置、自御手被進、御頂戴御復座之上、御熨斗三方配膳役上之、目出与御意、難有思召に而御請被仰上、直に御退出、御三之間に暫御扣之上、御居間ゟ被爲入候様御取次を以被仰進被爲入候上、御花押折懸包に而御小蓋にのせ、包のし添、御直に被進、御頂戴御退去。右御禮當席被爲召被仰上、御退出之事。

但、御近例通り御禮御使者御肴一折被上候筈。方々様へは御普爲聽等無之。

一、被進候御實名左之通、陸原大次郎考上る。

御實名　利順（トシヨリ）

周易下象傳云。利有攸往順天命。

六月。家中の人々に先祖由緒一類附帳を改めて提出すべきことを命ず。

〔觸留〕

定番頭ゟ

年寄中席ゟ御家中之人々先祖由緒一類附帳、先達而差出置候處、年月を經候間、此度增減等相改、當八月中迄に可差出候。帳面口張等に不及候。本組與力、且御歩等之内御知行被下候人々之分茂、最前之通可差出候。當時御咎被仰付置候人々は、代判人より可指出候。舊宅之分は跡目相續被仰付候上早速可差出候。將又以後跡目等被仰付候時々無違失可差出候事。

右之趣組・支配有之而々ゟ可被申談候事。

七月八日。家中の人々江戸往來等の際の荷物に過量なからしむべきこと戒む。

〔觸　留〕

御横目江

御家中之人々江戸表往來之節、荷物目形御定より過貫目相成居候人々有之に付、近年道中御奉行衆より被指越候趣等時々申渡置候得共、今以心得違之者茂有之躰に而、此度追分宿改所より取縮方之儀等嚴重申越候趣有之候。是迄數度相觸置候通に候處、等閑之至に候。此上公邊より御察當有之處江至り候而は、不容易儀に候條、過貫目無之樣嚴重相心得可申旨被仰出候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江申渡候樣、夫々可被申談候事。

七　月

別紙之通夫々可申談旨、御城代播磨守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之內裁許有之面々者、其支配江茂不相洩相達候樣御申談可被成候、以上。

七　月　八　日　　御　横　目

組外御番頭衆中

七月廿三日。長氏の與力河野久太郎の監造せる大炮を石川郡打木濱に觀る。

富若は長又三郎連弘の子連恭

三島續は人名なり

〔大砲御用留〕

一、七月廿三日去年以來被仰付候大砲、今日御退出後於打場御覽被遊候に付、夫々餝置候事。

一、夕八つ半時御出、富若樣も御同道に而御出御覽被遊候。

一、全御出來之品野戰筒迄なり。ホイツスル並モルチールは全く出來不仕候に付、臺迄御覽被遊候。右相濟、小筒之調練十二人組御覽被遊候。三島續十二手續入御覽候。右相濟候而、まだしきもの御覽被遊候段被仰出候に付、山本與五郎・河野文太郎十二手續御覽被遊候。

一、野戰早打之手續入御覽候。

一、シュンドルス水中に入候而御覽に入候。

一、粉藥入。シュンドルス入。ヘイプ入。

一、ゲッインドロンドを燒入御覽候。

一、ホイスを燒入御覽候。

一、大坂鐵の大割・小割・千割・向鎚地等御覽被遊候。

一、右相濟、御目付被仰付。

其以來何茂入情にいたし、ヶ樣に相成御悅被遊候。調練を何茂入情にいたし候哉、能揃候。

社中ゟも宜可申入旨御意被遊候事。

土俵とある は車臺の末 完成なるに よる

七月廿五日。河野久太郎、その監造せる大炮の試射を石川郡打木濱に行ふ。

〔大砲御用留〕

一、七月廿五日曉七つ時頃、篠原監物殿・御嫡子勘六殿・御次男采女殿御出之事。

一、町旗幷圍繩は十五町迄昨日張置候に付、今曉未明に町旗二十町迄、圍繩も全爲張候事。

一、昨日暮合迄に土俵仕懸致置候に付、今朝夜明候而直に筒樣致候事。

一、朝六半時過野戰筒一つ・小ホイッスル樣打、五時頃又右之通り樣打、何茂無難之事。

一、五半時頃ホイッスル樣し、又モルチール樣し、又篠原殿モルチール樣し無難なり。又四時過右之通樣候處、何茂無難なり。

一、九時頃よりモルチール稽古打、但土俵。篠原殿モルチール稽古打、但臺敷板有之候。ホイッスル稽古打、但土俵。夕八時頃に野戰筒臺に懸、三發致候事。

一、モルチール相濟次第爲認候。又野戰筒も濟次第爲認、追々金澤ゟ送遣候。玉箱も跡より爲認送遣候事。

一、十一月十四日重五郎來り、御筒に銘彫候事。

一、モルチールの銘。

十二貫目玉筒。弘化三年十月十七日鑄造。同四年七月二十五日樣之。江戸住松下藤原正綱。

鑄匠江戸住長谷川常次郎。監造河野久太郎。

弘化四年三月、木匠野村理三郎。同金澤住登澤次作。同同千田安兵衞。

弘化四年七月、鐵匠金澤住中條屋新右衞門直行。

一、ホイッスルの銘。

六貫目玉筒。弘化三年十月廿五日鑄造。同四年七月廿五日樣之。江戸住松下藤原正綱。鑄匠江戸住長谷川常次郎。監造河野久太郎。

弘化四年三月、木匠野村理三郎。同金澤住登澤次作。同同千田安兵衞。

弘化四年十月、鐵匠金澤住中條屋新右衞門直行。

一、野戰筒の銘。

百五十目玉筒。弘化三年十一月十日鑄造。同四年七月廿五日樣之。江戸住松下藤原正綱。

鑄匠江戸住長谷川常次郎。監造河野久太郎。
弘化四年三月、木匠野村理三郎。同金澤住登澤次作。同同千田安兵衛。
弘化四年四月鐵匠江戸住松尾仙太郎。

七月。郡奉行、その役所に張文のありたる時御算用場に持參する手續を改めんことを稟請す。

〔上田舊記〕

私共役所等に張文有之節、御算用場江持參、御横目立合開封可仕儀に御座候處、遠所江引越人張文有之毎に出府仕候而者、支配所御用支に相成候儀も有之。且又加州・能州向に而も、兩人共出役中張文有之、御用先指支、引戻り御算用場江持參仕兼候儀も可有御座。依而以後張文有之節、支配所等御用に而指支御算用場江持參仕兼候節者、添紙面を以相認、手先留書爲持、御算用場江指出可申候間、於御場御横目御立合御開封之上、様子被仰談候様仕度候事。

弘化四年未七月　　三州御郡奉行

七月。藩の收納藏の設備に關して令す。

〔岡部舊記〕

諸郡共御藏之下敷取替方、等閑之族に相聞得候。元來下敷之儀は、古ぬか等取除、年々新たに出來可申筈之處、右様等閑に相成居候儀は、代官共においても不行屆次第に候。依而當御收納米積入迄に早速取替、掃除方等入念に相心得候様可申渡。尤當八月中旬より拙者共出役致見分候條、可得其意候。將又中には御藏番人幷代官宿等江、下敷請負之委に相成居候ヶ所も有之躰。右様之儀は甚不相當儀に候條、以來右様之儀無之様、急度相改可申候。且又先達而申渡置候りん木之儀も、追々無油斷遂詮議可申事。
右之趣夫々可得其意候、以上。

弘化四未七月　　改作奉行

諸郡御扶持人中
組裁許中

八月三日。徳川家慶、前田齊泰等に放鷹によりて獲たる雲雀を贈る。

〔御家老方諸手扣〕

八月十一日

一、當三日相公様・筑前守様御鷹之雲雀御拜領之由、江戸狀到來相廻今枝より來。

〔諸事要用雜記〕

八月三日

一、今日筑前守様御勝不被成候に付、上使之節幷御廻勤も御名代備後守様へ御賴に相成候。

昨日市三郎等より相伺、同人より聞番へ申談、備後守様へ御使者相勤候由之事。

一、□半時頃御表へ御出、備後守様御名代御勤に付、上意御拜聽之御習禮被成進、相濟御入被遊候事。

一、八時前爲上使御使番松下善太夫殿御越、例之通御出向、筑前守様御名代備後守様にも御作法通り御出向有之、上意御拜聽、夫々御例之通相濟、御請被仰述、御退出、始之通御送り被成。御入之節御勝手座敷等所々御逢被遊候事。

但、上使御通り候上八時打候事。

一、御時刻も移り候に付、御登城は不被遊旨被仰出候事。

八月八日。前田齊泰の子利順の居を御表に移すべきことを報ず。

〔御家老方諸手扣〕

八月八日

一、喬松丸殿御奥ゟ御暮被成候得共、次第に御成長被成、御稽古事有之に付御表御住居被仰進、燕之御間假板圍被仰付、當分御住居に被仰出、御しつらひ御入用三十二貫目餘之由江戸表より申來。

八月廿四日。前田齊泰の子直會金澤に生まる。

〔成瀨正敦日記〕

八月廿四日

一、八つ半時過御廣式頭より内々申越、御産婦之方催之様子に候間退出相見合候様申來、見合能在候所、暫有之、御廣式頭より以紙面、御産御催之旨申越候事。右に付今日出先指留置候様會所へ申遣置候。

一、暮前永原貢御次ゟ罷出、御産婦之方八つ半頃より御催之所、申之中刻御男子様御出生被遊、即刻森快安等相診之所、御丈夫に被爲在候旨申聞候段、貢申聞候事。

〔見聞袋群斗記〕

八月廿四日申の刻、於二之御丸御廣式御男子御誕生、蓑目御用奥村助右衞門なり。

八月廿四日。下曾根金三郎製作の揚火玉江戸より到着せしを以て、小川群五郎にその模造を命ず。

〔成瀨正敦日記〕

八月廿四日